ブレス・オブ・ファイア　ドラゴンクォーター

社　九生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブレス・オブ・ファイア　ドラゴンクォーター

【Ｎコード】
Ｎ７７３２Ｖ

【作者名】
社　九生

【あらすじ】
はるか昔、世界に？大いなる災い？があった。
空は焦げ、瘴気はあまねく地表に満ちた。
見上げるべき空を失った人々は、足の下に生きる術を見つけ出す。
大深度地下都市。シェルター。
覆われた、第二の世界で、幾世代もの刻が過ぎる。
人々はもう、空を忘れたのだろうか……？
下層地区のレンジャー、リュウは、任務で訪れたバイオ公社（生物化学工場）で、奇妙な体験をする。

閉ざされた地底の世界の物語が、動き始める……。

※あらすじはゲーム公式サイトより引用。
本作はＰＳ２専用ゲームソフト「ブレス・オブ・ファイア？　ドラゴンクォーター」のノベライズです。

私はニーナ

夢を見ている。小さなブリキの箱の中。
そこには少女の、失われた日常があった。
家があって、暖炉の温もりが橙色に輝いて、テーブルのうえにはごちそうがある。
この香ばしい匂いの湯気に包まれた肉は何の肉で、濃い黄色の、細やかな緑の葉が乗ったスープは何で出来ているのかは分からないが、政府から配給されるまずい米やパンの類でないことは明らかだった。
お母さんの手作り。もふもふとした薄黄色のスリッパを履いて、赤と白のチェック柄のエプロンを身に着けて、キッチンに向かって、ふと「ママ」と呼びかけると、こちらを振り返って微笑んでくれる。
そうやって作られた料理が、まずいわけがない。
食卓には母とともに、父の姿もある。楽しそうに笑っている。
私もうれしい。家と、光と、母と、父と、そこには一切の悲しみがなかった。
たった一つだけあるとすれば、目の前の景色が全部、現実でないということを少女が自覚していることだった。
このまま目覚めないで。パパとママも、ずっとそこにいて。しかし、夢は夢だった。
暖炉の火が消える。ごちそうが石に変わる。天井の隙間から影が伸びてくる。途端に空気の質感がニセモノっぽくなって、視界から色が、光が、急速に失われてゆく。ブリキの箱が壊れてゆく。
やめて。行かないで。パパ、ママ。私を置いていかないで――。
虚空に伸ばしたか細い腕が、こつりと岩肌に触れた。
痛くはない。悲しい。
涙があふれ、頬を伝うのを感じながら、少女はぼんやりと天井を

仰いだ。
暗い。コールタールのような深い闇がよどんでいる。そこにはでたらめに隆起した岩のシルエットが絨毯のように敷き詰められ、空気はざらざらとして埃っぽい。
ああ、ここは現実だ。あるいは、？悪い方の？夢だ。家も、暖炉の温もりも、父と母の姿もなく、凍える風が吹き抜ける洞窟で、少女が一人、孤独に時を過ごす夢。
あれからもう二年が経つというのに、涙は一向に涸れてくれない。でも、大丈夫。悪い夢は今日で覚めるから。
少女は手の甲で涙を拭い、傍らに生えた頂点の丸い岩を支えに立ち上がった。遠巻きに人々のざわめきが聞こえる。炊き出しの時間だ。
おもむろに歩き出そうとして、すぐに足を止める。大切な友だちを踏みつけてしまいそうになったからだ。
くまのぬいぐるみ。幼い頃、父にプレゼントされた。
名前はブキ。素材が貧弱なのか、ちょっと両手を握ってダンスの真似事をしただけで、両腕がブキ、お腹がブキッと音を立てて千切れるからだ。
おかげで継ぎ接ぎとボタンだらけになった身体は、あちこちパッチワークされてとてもカラフル。外見こそ変わっているが、少女にとってはいつも傍にいてくれる大切な友だちだ。
少女はブキをぎゅっと抱きしめて、少し早足に洞窟を出て行った。寸胴鍋で煮詰められるスープの匂いに食欲をそそられたのもあるが、少女には会いたい人物がいた。
広場は列を作る人でごった返している。俺が先に並んだ、いや俺だ、と口論している男たちもいる。この最下層区ではさほど珍しくもない光景だ。
背の低い少女は、懸命につま先立ちをしたり、高いところに登ったりして、人混みのなかに青年の姿を探した。
彼がこの集落を訪れたのはおよそ二週間前。いまと同じ炊き出し

の時間に、少女が広場の隅でぼそぼそとパンを口にしていると、気さくに声をかけてきた。
薄いピンク色の頭髪、額にかけたゴーグル、白いラインの入った皮製のジャケットに、それと同じ柄のスキニーパンツ。腰には短めの両刃剣を携えていた。
身なりからして最下層区の人間でないことは明らかで、少女はブキを抱いて警戒心を募らせたが、青年はチョコレートをくれた。欠片一つじゃなく、一枚丸ごとだ。
それでも見慣れぬ人間への警戒を緩めるつもりはなかったが、チョコレートは甘かった。
涙が出るほどに。こんな甘いお菓子を口にしたのは何年振りだろう。前に食べたときは、お母さんが一緒だった。
思い出が涙となってブキの額にこぼれ落ちる。
青年は少女の傍に腰を下ろし、ささやきかけるように話し始めた。
「僕はここから一つ上の階層で、レンジャーという仕事をしている。凶暴なディクから街を守り、犯罪者を取り締まる。自分で言うのもなんだけど、正義の味方なんだ」
顔を見せてごらん、と指で優しく顎を起こされ、にっこりと笑う青年の顔が視界いっぱいに広がった。とても印象的な、心に火を灯してくれるような笑顔だった。
「困ったときは、正義の味方に相談してくれ」
それからというもの、青年は度々顔を見せるようになった。飴やチョコレート、そしてたくさんの土産話を持って。
青年の話はユーモアに満ち、その耳にすっと入り込んでくる柔い声質で語られる話はどれも、一日の大半を狭いほら穴で過ごす少女にとっては夢にあふれた冒険譚だった。
少女は引っ込み思案な性格だったが、やがて青年が集落にやってくるのを心待ちにするようになり、自らの過去についてもしずしず打ち明けるようになった。
言葉も、舌も足りなくて、ときに感極まって思うように話が出来

ないけれど、青年はずっと黙ってうなづいていてくれる。
ブキも聞き手としては優秀であるものの、青年のように背中をなでてくれたり、温もりのある言葉をかけたりはしてくれない。少女は青年を心から信頼し、そして尊敬していた。
やぁ、と手を振って、青年は人好きのする笑みを浮かべた。少女は胸の内がきゅんと高鳴るのを感じながら、足を早めてゆく。行き交う人にぶつかりそうになる。小さな足を踏みつけられそうになる。
それはいけない。この靴は青年からもらった物だ。少女がずっと裸足で過ごしているのを見かねて、下層区の街で女の子用のスニーカーを買ってきてくれたらしい。白とピンクのツートン・カラーでやや派手だが、少女の宝物だ。
「じゃあ、行こうか」
おもむろに歩き出した青年の背中を、少女はぱたぱたと跳ねるようについていった。
今日という日をどんなにか待ち望んだことだろう。
パパとママに会える。
青年が約束してくれたのだ。
君をまた、パパとママと一緒に暮らせるようにしてあげる、と。
いくら堪えようとしても頬がほころぶ。足元が軽快に弾ける。
パパとママに、会えるんだ。

青年と交流を深めていくなかで、少女はこの世のあらゆる理を知っていった。
齢十にもなれば、誰もが常識として頭に留めていることのほとんどを少女は知らない。家の外にもほとんど出たことがなかった。
「外は空気が汚いし、怖い人たちがたくさんいるから」
それが母親の口癖だった。
だから少女は、絵本や、テレビで放映しているアニメ番組、そして窓越しに見える範囲でしか世界を知らなかった。
青年はかすかに驚きつつも、少女が疑問にぶつかる度、そっと手

を差し伸べるかのように教えてくれた。
千年もの古に地上で起きた？大いなる災い？。それによって空は焦げ、瘴気があまねく地表に満ち、人々は足元に生き場を求めた。
大深度地下都市。それが少女と青年が生まれた地底の世界だ。そしてこの社会には、？D値？というヒエラルキーがある。いつからともなく人々に課せられた絶対のルールだ。
たとえば青年のD値は１／２０５４。出生と同時に計測され、割り出された数値がパーソナル・ナンバーとして名前の後ろに付加される。少女は両親から世界の成り立ちを教えられてはいたが、D値については一切教えられなかった。
それに漠然とテレビのニュースを見ていても、不意にチャンネルを回されることがあったり、新聞や特定の本を読ませてくれなかったりと、両親には不可解な行動が目立った。
「両親は、君にD値について知られたくなかったのだろう」と青年は言った。
分数様式で示されるこのD値は、分母の数が分子の？1？に近いほど潜在能力が高く、優秀な人材であるとされる。そして人々はD値によって職業や居住区が決定されるのだ。
D値が高ければ衛生環境の良い上層区への居住が許され、政府の要職に就けるなどエリートとして扱われるが、D値の低い者は空気汚染が深刻な下層区にしか住めず、出世も望めない。一生？ローディ？呼ばわりされて差別や偏見の対象になる。少女が暮らす集落にいるのはみなローディで、実質社会から切り捨てられた層の人間たちだ。
「D値による区分は絶対だ。それがたとえ親子であっても、D値に大きな差があれば別々に暮らさなくちゃいけなくなる。君の両親は上層区の人間なんだろう？
そこに、D値の低い君が八歳になるまで暮らせていたのは、君の両親が――」
最後まで言い切らぬまま、青年はぷつりと口をつぐんだ。

それでも少女には分かった。父と母は自分を匿ってくれていたのだ。小さなブリキの箱のような家に。胸いっぱいの愛情と温もりのなかに。

それを想うと、また涙が出た。同時に、D値の低い自分を恨めばいいのか、世界を恨めばいいのか、矛先の定まらない憎悪が胸を渦巻いた。

青年はしばらく黙って背中をさすってくれていたが、やがてこう言った。D値は生涯変わることのない数値だが、ある手術がそれを可能にする、と。

「上層区に住むに相応しいD値を手に入れて、パパとママと、堂々と暮らすんだ」

ぽん、と肩を叩かれると、少女の鬱蒼とした心に光が差し、希望が騒いだ。

手術の費用は全額、自分が出すと青年は胸を張った。

どうしてこんなに優しくしてくれるのだろう。

自分の知るどんな言葉を持ってしても感謝しきれない。彼は本当に正義の味方だ。ヒーローだ。

集落を出て十分も歩くと、リフトポートに着いた。

人口増加とともに都市全体が拡大しているため、階層や区画の移動にはもっぱら高速移動車両（リフト）が用いられる。

この場所に来るのは――顔を重厚なマスクで覆った人間たちに連れてこられた、あの日以来だ。

薄暗いホームの隅にわだかまる闇、底冷えした静寂、電灯が放つ鈍い青色の光、そこにたかる羽虫たちが作る不気味な音像。

この空間には何か得体の知れない呪いがかけられている。当時はそんなふうに身体が拒絶反応を起こしたが、いまホームへと階段を下りる少女の足取りは軽かった。

片側の線路に全面黄色で統一されたリフトが停車している。その前には白衣を着た男が立っていた。

青年の言っていた「お医者さん」だろう。フレームの細い眼鏡をかけ、金色の髪は上品に整えられている。いかにも学者然とした風情だった。

「や、これが、あなたの言っていた……」

男は挨拶一つすることもなく、二人を前にするといきなり言い出した。

眼鏡のテンプルを二、三回、くいっと上げて、少女を見つめる。あたかも品定めするかのような目つきだ。

男の眉尻一つ動かない、どこか機械じみた表情に、少女は急に心細くなって、青年の腕に手を伸ばした。

「ええ……？素材？です」

ぴたり、と青年の袖口を掴もうとしていた手が止まる。いまのは誰の声だろう？

紛れもない。青年の声だ。声質の変化に思わず耳を疑った。

おそるおそる青年の顔を見上げてみると、そこにはいつもの優しさがなかった。目は鋭く、ある種の残酷さともいうべき冷気を帯びている。

「や、ごくろうさまです」

？値踏み？が終わったのか、男は少女から視線を外すと、ポケットからおもむろに財布を取り出した。

「これは、まぁ、前金ということで」

青年は何枚かの紙幣を受け取ると、掌のなかでくしゃっと丸め、用は済んだとばかり踵を返した。

少女は慌てて青年を呼び止めたが――冷たい言葉が返ってくるだけだった。

「あばよ、お嬢ちゃん」

そして遠のいていく青年の背中。去り際に見えた横顔も、言葉遣いも、何から何まで別人だった。

どういうこと？　あなたは正義の味方じゃ、ヒーローじゃなかったの？

ぽとり、とその小さな胸からブキがこぼれ落ち、足元を転がった。
「さぁ、行きましょうね。どこへ？　や、君は、彼に教えてもらわなかったのかね？」
パパとママに会わせてくれると言った。手術をして、D値を高くして、みんなに認めてもらえる家族になるんだって。
「お父さんとお母さんにですか……それは、まぁ、安心してください。手術が無事に済んだら、また一緒に暮らせるようになります」
取ってつけたような男の口ぶり。誠実さや心に訴えかける感情のきらめきは微塵も感じられない。
でも、このまま元の場所に戻ったところで、何があるのだろう。ローディたちの不潔なざわめきと、明日の見えないどん詰まりの闇が待っているだけだ。
少女は横様に倒れていたブキを拾い上げると、手招きをする男の元へと、枷を引きずるような重い足取りで向かった。リフトに乗り込んだ。後戻りはもう出来ない。
二本のレールにうなるような軋みをあげて、リフトは発進した。
少女はふっとまぶたを閉じてみる。狭い岩窟をひた走るリフトの、身体と心を蹂躙するような振動。大気のうねり。胸を占める喪失感とも、絶望感ともつかぬ巨大な虚しさ。
それがみな、三秒数える間にどこかへ行って、少女を、あの暖炉の温もりに約束された、父と母のいる永遠の安穏へと帰してくれる。ほら、一、二の、三で、まぶたを開けてみよう。
そこには、きっと――
「や、ところで、君の名前はなんと言うのです？」
悪夢は覚めてくれなかった。男の無機質な声が、少女の期待を静かに打ち砕いた。
少女はほとんど息絶えたかのような面差しになって、しばらく。そのくちびるがひっそりと動いた。
「私は……ニーナ」

（?）ルーチン・ライフ ―前篇―

ぼんやりと――空調用のプロペラの羽が、くるくると低速回転しているのが分かる。

耳を包むのはテレビの音声だろうか。空気汚染の深刻化がどうの、中層区の水没領域がどうの。

何か夢を見たような気がするけれど、一片の映像さえ覚えていない。ただ、見たかもなぁ、という憶測めいた余韻だけが頭に残っている。

少年は上体を起こして、眠気の膜を剥がすかのようにごしごしとまぶたをこすった。寝覚めはあまりよくない。このところディク狩りが続き、ろくに休暇を取れていないことが原因だろう。

今日も任務だ――少年は短い梯子を使って二段ベッドから降りる。ベッドの下段に同居人の姿はない。近くの壁に埋め込まれた薄型の液晶テレビがつけっぱなしになっている。部屋の明かりも、フットライトも。

少年はまだ本調子でない目をめぐらして同居人を探しつつ、バスルームへと向かった。洗面所の照明もまたつけっぱなし。

少年のいささかやつれた、不健康そうな顔がのっそりと鏡に浮かんだ。洗面鏡の両脇に備え付けられた棒状の照明具。その淡い橙色に照らされると、少年の肩先まで伸びた髪がつやめき、何か特別な魅力を宿しているかに見える。

本当は忙しさにかこつけて伸ばし放題にしているだけの、何の変哲もない黒色の髪なのに。少年は手ぐしで髪を梳（と）き、肩先にかかる部分を赤い紐でまとめあげると、頭のてっぺんできゅっと結わいた。

すると背筋に血が通って、心持ち眠気が晴れた気になる。このあとはごくありきたりな朝の手続きだ。毛並みの悪い歯ブラシで口を洗い、顔面に水をかぶる。

フックにかけられた白いタオルを手に取ろうとすると、隣には同

居人のタオルがあり、わずかに水気を帯びている。つい数分前に彼もここで身支度を済ませたのだろう。
少年は最後に荒れた肌の具合を確かめ、ささっと前髪を整えると、洗面所を後にした。もちろん、明かりを消して。
再び部屋へと戻ってきた少年を、誰にともなく語られるテレビの音声が出迎える。相変わらず同居人の姿はなかった。
一足先にロッカールームで用意を進めているのかもしれない。起こしていってくれたらよかったのに。
少年は今さらのように頭のなかで独りごちながら、テレビを消した。手前には四角いテーブルと二人分のスツールがあり、その一つにフレームの赤いゴーグルが置かれている。
昨晩、ロッカーにしまい忘れてここまで持ってきてしまったのだ。最近は度々こういうことがある。疲れが頭に蓄積しているのか、どうにも手足の感覚や意識が冴えない。
骨組み丸出しのベッドでは熟睡出来ないからだろう、空間を造る壁や照明の色に癒しの力がないからだろう。しかし、寝て、起きて、仕事をこなす。たったそれだけのことを繰り返すレンジャーに、特別な部屋が必要ないのも事実だった。
少年は短いステップをのぼりながら、額にゴーグルをかけ、自動で開かれたドアの向こうへと踏み出してゆく。
さぁ、退屈な一日の始まりだ。

ロッカールームへは、自室から宿舎の廊下を歩いて二十秒とかからない。同居人の姿はやはりそこにあった。
部屋は通路のように細長く、壁の両脇に所狭しと板金製のロッカーが並び、パイプやフェンスが張り巡らされた天井には大きなプロペラ。
それが薄暗い室内に充満する埃っぽい空気をゆるゆると攪拌(かくはん)し、どことなく息苦しさを覚える。少年はゴムでコーティングされた床に散らばる紙くずを踏んづけていきながら、同居人に話しかけた。

「テレビ、つけっぱなしになってたよ……」
同居人はニットのインナーを着込んでいる最中だった。
やがて襟からするりと頭が飛び出る。上品に切り揃えられた金色の頭髪が、静電気でくしゃくしゃにはねた。
「また一段階、空気汚染がひどくなったんだってな」
彼は特に悪びれる様子もなく、淡々と会話を続ける。
その細くも筋肉質な腕が、ロッカーから緑色のジャケットを取り出した。
「政府はどうするつもりなんだろう。野生ディクの数も増えるばかりだし」
「さぁな。特にこれといった政策は示されてない。いずれにしても中層区から下の話だから、最悪、連中は見捨てるのかもしれないな」
ジャケットに袖を通しつつ、彼は空いた手でロッカーの戸を閉めた。
「ゆがんでるぜ、この世界は」
バタン、と音を立て、今度は少年がロッカーを開けた。
「で、今日の任務は何？　またディク狩り？」
「いや、リフトの護衛だとさ」
彼はジャケットの裾をピンと張り、身体のあちこちを触って装備漏れがないかを確かめていた。
「護衛？」
「ああ。積荷を乗せたリフトを端から端まで送るだけ……」
言葉半ばに、彼は振り返った。「ローディの能無しでも出来る仕事さ、リュウ」
その目はいつものように相手を見下すかのような冷気をはらんでいた。ジャケットの襟が耳たぶを覆うまでにびしっと立てられ、彼の高慢な雰囲気をより一層と引き立てている。
ボッシュ＝１／６４。エリートである彼にとって、この程度の任務は暇つぶしにもならないのだろう。
「先に外で待ってるぜ、相棒」

去り際に片手を挙げ、彼はロッカールームを出て行った。
その腰にぶら下げていたのはレイピア。彼のスマートで、攻撃的な精神がそのまま形となったかのような剣。
一方、リュウが取り出したのは、ごく一般的な細身の両刃剣。ついで紺の地に赤のラインが入ったジャケットをまとう。こちらもボッシュの派手な色合いのそれと比べればはるかに地味だ。
ぎゅっと、革の手袋をはめながら、リュウは思う。これまでにも疑問に感じていたことだった。
どうしておれは、ボッシュとコンビを組んでいるのだろう？　相棒、と呼ばれているのだろう？
あいつは言った。ローディだと。能無しだと。おれのことを言っているのか？　リュウ＝１／８１９２、おれのことを。
きっといつもの軽口だ。ボッシュは度々、ああやって乱暴な台詞を吐く。しかし、その無邪気な口ぶりに心がかすり傷を負うこともある。
リュウはロッカーの戸を閉めるのと同時に、あえて思考を停止させた。
ボッシュ＝１／６４にとって、サード・レンジャーという仕事は、栄光に満ちたキャリアの第一歩に過ぎない。深度九八〇メートルに広がるこの場所から、頂点へと這い上がるスタート地点に過ぎない。
だが、リュウにとっては永遠の仕事であり、永遠の居場所でもある。彼の前に道は用意されていない。昨日までにしてきた退屈な任務を、代わり映えのしない日々を、これから先もずっと続けてゆく。
そうやってルーチンに沈んでゆくだけの運命をありありと示している。１／８１９２という値が。
よそう、未来について考えるのはよそう。何の意味もないのだから。
リュウはいささか逃げるようにして、足早に部屋を、いずれまた帰ってこなくてはならない部屋を、出て行った。

ブリーフィングにはまだ時間がある。そう言って、ボッシュは街の食堂で腹ごしらえをしておこうと提案してきた。
すると呼応したかのようにリュウの腹が鳴る。彼は下層区定番の？ハオチー肉入りスープ？のどろりとした湯の質感と、付け合せに出るぱさぱさとしたパンの食感を思い浮かべながら、ボッシュの後を追った。
二人のいる廊下はレンジャー基地の二階に相当する部分で、片側は窓のない吹き抜けとなっている。急峻な崖の岩肌が迫り、時おり深い暗闇の向こうから風が入り込んでくる。
階下は街とリフトポートの進入路を隔てるジャンクション（中継地点）。整地や壁の加工がされていない天然のトンネルだ。
藍色で統一されたダウンライトや電球が壁面に取り付け、ないしチェーンで吊り下げられ、闇の奥地で灯火のように底光りする外観はいっそ神秘的でさえある。
そのなかでリュウたちと同業であるらしい身なりの者が連れ立ってリフトポートへと向かったり、外灯の下で一組の母子が人を待っているかのように立っていたり、重厚なマスクで顔を覆った者が壁際に設けられたテレコーダー（公衆電話）を使って誰かと会話したりしている。扉が開かれると、リュウたちも彼らと同じ空気を吸った。ジャンクションへは二階から直接階段で下りられるようになっているのだ。
かん、かん、と鉄条網で出来たステップに音を立てながら、ふと、リュウは誰かに呼びかけられたかのように天井を仰いだ。
深い。巨大な断崖が、急峻な闇が、果てしなく広がっている。そのうちに奥からふっと手が出てきて、自分の魂をさらっていくのではないかと錯覚してしまうほど、得体の知れない世界が崖の狭間でゆらいでいる。
「何ボケっとしてんだよ、リュウ」
「いや……何でも、ない」
リュウの心に脈絡もなく芽生えた感情。

空。かつて人は、その広大な青さとともに生きていたという。今の時代からは想像もつかない。本当にあったのかどうかも定かではない伝説。

二人の向かう下層区街の天井は、全面が色とりどりの絵の具で塗られている。空を？模した？のだ。更に人の手によって？太陽？が造られると、元は地底の大空洞であった場所に一日のサイクルが生まれた。

人工太陽の消灯時間が夜。それに光が灯るのが朝。夜に至るまでの時間が昼。どれもかつて人が地上で暮らしていたときに使われていた言葉なのだという。他にも？ユウガタ？という表現があるようだが、こちらは使われていない。

ただ、下層区街に描かれた空は、ユウガタの表情に近いと、リュウはどこかで耳にしたことがある。そうか。空は刻々と変化して、一定の形を持たないものだったのか。

分からない。すべては現代に遺された史料から発する憶測に過ぎない。だから、リュウはこの目で確かめてみたいと思う。

いつか、本物の空を――。

（？）ルーチン・ライフ ―後篇―

しかし、結局のところ、空などという存在はお伽話。ありもしない空想だと、一般的には認識されている。

「空が見たい」などと言おうものなら子供呼ばわりされて恥をかく。相手がボッシュのような現実主義者（リアリスト）ならなおさらだ。

リュウはふっと芽生えた感情を心の奥底にしまい込む。こうやって人々は、空に対して強い憧れ、好奇心を持っていながらも、リュウのように忘れよう、忘れようとしていくのだ。

街の食堂は多くの人で賑わっていた。カウンターに並ぶ列が店の外にまではみ出している。客のほとんどはレンジャーや地底掘削要員といった公的労働者で、家族連れなど庶民の姿は見受けられない。

逼迫（ひっぱく）した食糧問題を抱えている下層区において、彼らのように国の事業や公安に携わる人間には優先して食料が回されるようになっている。

いまの時間帯はちょうど朝。この店は街にいくつかある大衆食堂の一つで、公的労働者専用というわけではないのだが、この時間帯は決まって彼らに独占されてしまうのだ。

サード、というレンジャー内では最も階級の低いリュウもいちおうは官憲であり、これまでにも食事に困ったことはない。

だが、人口増加に対する都市拡大や、それに伴う居住区の治安維持のために、公的労働者の求人率は年々高まって来ている。今や五体満足で経歴に問題がなければほぼ採用といった状態だ。

すると今度は公的労働者内で早い者勝ちの食物競争が起こるわけだが、それでもリュウが食事に困らないのは、ひとえに、ボッシュ。彼の１／６４というＤ値が傍らにあるおかげだ。

ボッシュは長蛇を成す列などまるで眼中にないといった風情で、ずかずかと店に入って行った。どうにも後ろめたくて、リュウはず

っと顔を伏せたままだ。
当然のように誰かが罵声を飛したが、ボッシュの顔を見た途端にその口が引っ込んだ。代わりに舌打ちや陰気なひそめき合いが店内を包む。
「セット二人分。俺のにはスープはいらないから、代わりにブレッドを一つ増やしてくれ」
カウンターで接客を務める少女は、見るからに不服そうな顔つきだった。
「あんさんは、まぁ、千歩ゆずってしゃーないとして、そっちのカレはどうなん？　D値高いんか？」
つと向けられた彼女の青い瞳から、リュウはさっと視線をそらした。
彼女の名前はクリオ。てっぺんに赤いぽんぽんを乗せた帽子をかぶり、その独特な風貌と口調で客を出迎える店の看板娘だ。
「このボッシュ＝１／６４の相方を務めるやつのD値が悲惨なワケないだろ。ほら、俺たちにはあまり時間がないんだ」
クリオはいぶかるような目つきで二人をにらみながら、後ろの厨房に指示を出した。
やがてクリオが運んできたプレートには、どちらも同じように灰色のぎったりとしたスープとパンがついている。
注文通りでないことにボッシュが文句を言うと、「うっさいの！顔面にスープぶちまけたるぞ！」という怒声が返ってきた。
やれやれ、といった調子でボッシュはチップと交換にプレートを受け取り、二人はテラスの席についた。店内はもう満席だったのだ。
路面の赤土が風に巻き上げられるためにあまり良い席とは言えない。テーブルもスチール製で安っぽく、ボッシュは「これだから下層区は」とでも言いたげな顔をしていた。
「リュウ。このスープやるから、ブレッドくれよ」
言いながら、ボッシュはリュウのプレートからブレッドを取り、ついでハオチー肉入りスープの入ったお椀を置いてきた。

ハオチーとは地底全域に生息する芋虫型のディクで、その硬くて埃っぽい味のする肉は？庶民の味？として下層区では広く親しまれているのだが、エリートの口には合わないようだった。
「それにしても」
「なに？」
ボッシュはブレッドをちぎり、欠片を一つずつ口に運んでゆく。
その気になれば丸ごと一口で食べられる大きさなのに、リュウはこういった所作にボッシュの育ちのよさを感じる。
彼は上層区の出身なのだ。
「さっきの女。あの喋り方、下層区訛りってやつか？」
「いや……普通の人は、あんな喋り方しないよ」
「ふーん」鼻先で答えながら、ボッシュの目が何気なく街に向けられる。
仕事に出向く労働者たちの往来、レンジャーごっこをしている子供たち、そして彼らの頭上に広がる、空。
中天はホワイトとエクリュ・ベージュの中間色で描かれ、地平線に向かう連れてオレンジとエメラルドが混じる。
それらの色彩が人工太陽の光を受けてまばゆく輝き、白みかがったオレンジの明るさが街を満たしている。先ほどジャンクションから街へ入ったときに目が眩んだのはそのためだ。
生まれも育ちも下層区であるリュウにとってはごく見慣れた景色だが、ボッシュは違う。三ヶ月前に初めてこの街を見た彼は、一言、「汚ねーな」と言った。
確かに、本物の空がこの天井に描かれたもの通りであったら失望する。生きている感じがしないのだ。このスチール製のテーブルのように安っぽくて、拙い抽象画のようにさえ見えてしまう。
「そろそろ時間だ。あんまり待たせると、隊長、怖いからな」
ボッシュはプレートを持って立ち上がり、リュウは二杯目のスープを口に流し込んだ。
「お前、よくそんなもんをゴクゴク飲めるな……。見た目といい匂

いといい、ほとんどゲロだぜ」
ボッシュはうぇっと口を尖らせた。リュウの腹のなかで？ゲロ？と言われた汁がどろどろとゆれている。当分はもう何もいらないだろう。
プレートをカウンターに返して店を出て行こうとした折、ふと、一台の小型レッカー車が通りがかった。
人々が左右に道を開ける。その間を低速で進む車の前後には、マスクと警棒を装備した警備兵がついている。
バイオ公社か、とボッシュがちらりと呟いた。レッカー車は大きな真四角の鉄檻を乗せた台車を牽引しており、檻のなかでは一体のディクがおとなしく座っている。
その獣らしい底光りする目を遠巻きに眺めながら、二人は歩き出して行った。レンジャー基地へと戻る道中、二人の話題はもっぱらバイオ公社が中心となった。
生物化学工場としてデザインド・クリーチャー、略して？ディク？を研究、開発する機関。それが一般に知れ渡っているバイオ公社の企業内容だ。
乗り物用から食用に至るまで多種多様なディクを生み出し、人々の生活を豊かにする一方、一部のディクは野生化し、人々に危害を与えることもある。
そんなモンスターから街を守るために政府公認のもと組織されたのがレンジャーだが、よくよく考えてみればおかしな話だ。
先ほどのように新規開発した実験体を連れて街を横断するのも珍しくない。噂によれば下層区の少年少女をさらって非人道的な研究の対象にするとも聞く。
そんな？国家事業？の名にかこつけて図々しく、企業実態について様々な憶測が飛び交う彼らこそが、今回の任務のクライアント（依頼主）だ。
「任務の辞令はいつ受けたの？」
「昨日の夜。お前が仕事から帰るなりベッドに倒れこんだあとだ」

「リフトって言ってたけど……積荷の中身は？」
「聞かされてない。ま、たかが護衛の俺たちが知る必要もないけどな」
リュウの足がぴたりと止まる。そこは街の出入り口付近、階段を上ったところにある広場で、片側は見晴台になっていた。
バイオ公社の高層ビルが、スモッグや粉塵で濁った景色の向こうに高々とそびえている。あのなかで今日も、ボッシュが気味悪がるようなスライムめいた何かが生産されているのだろうか。

ボッシュは颯爽とレンジャー基地のオフィスへと入って行った。
事務机に向かって報告書をまとめていた女がつと顔を上げる。与太話をしていたと思しき男の二人組みがぴたっと話を止める。
「エリートのお通りだ」とでも言うように、ボッシュは肩を鳴らしながら青いタイル張りの床を突き進む。この真ん中にすうっと赤いガラスの入ったドアの向こうが隊長室だ。
「ボッシュ＝１／６４、リュウ＝１／８１９２。以上二名、参りました！」
ボッシュの力強い声が整然とした室内に響き渡る。
「よろしい……」下層区レンジャー基地の監督官、ゼノ＝１／１２８が静かに呼応した。
ブラインド越しに差し込む人工太陽の明かりを背に受ける彼女は、その燃えるような赤とは裏腹に、淡々とした声で語り始めた。
「すでに聞いているとは思いますが、今回の任務について、確認しておきます」
資料を眺めながら話す彼女の手が、さっと眼鏡のテンプルに触れる。彼女の？クセ？だ。
「警護任務、レベルＥ……。バイオ公社の下層実験棟より発進する輸送リフトに同乗し、貨物を警備する……。
知っていると思いますが、バイオ公社では機密性の高いものを扱っています。積荷の中身について、細かい報告はありません」

彼女はキッと素早く顔を上げた。無駄を嫌う軍人らしい動き、口調、峻厳な眼差し。
しかしそれはあくまで職業的な態度であり、彼女がもっと心優しい人物であることをリュウは知っている。
「何か質問は？」
「特にありません。ですが……」
ボッシュの声が一瞬、上司に対する口調とは思えない怪しげな響きを帯びた。
「任務の前に、少しお話が」
「――いいでしょう。リュウ、先に出なさい」
事態が把握できずに呆然としていた彼は、慌てて敬礼し、部屋を後にした。

扉が閉まり、リュウの気配が遠ざかったのを確認すると、ボッシュはだらりと肩の力を抜いた。
ついで歩き出し、隊長の執務机のうえにどさっと腰を下ろす。いっそ暴挙とも言える部下の行いを咎（とが）める素振りもなく、ゼノはむしろ怯えているようであった。
「隊長、分かってると思うけど……」
両足を組み、退屈そうにつま先をゆらしながら、ボッシュは脅迫めいた声音で喋り始めた。
「俺のD値は1／64。この値はセカンドやファーストはもちろん、？統治者（メンバー）？にすら、手が届く資格なんだ……。だから、俺に足りないのは手柄なんだよ。こんなチンケな任務じゃなく……もっと、ハデな手柄がいるんだよ」
ぱた、という音を立てて、ボッシュは床に降りた。
「今回の任務は、機密レベルの高いものです。無事に終われば、上層部にはそれなりの報告を……」
不意に言葉が途切れる。ボッシュの手がすうっと、忍び寄る影のように肩へと下りてきたのだ。

「分かってればいいんだ……」
ゼノは彼が部屋から出て行くのを背中に知りながら、自らの不甲斐なさに拳を握り締めていた。
ボッシュ＝１／６４。地下世界を統べる統治者（メンバー）の一人にして、？剣聖？ヴェクサシオンの一人息子。
隊長として何たるザマだ。たかだか十六の少年に、足がすくむほどの恐怖を覚えるとは。
しかし、ゼノは決して彼自身が怖いのではなかった。彼の背後にちらつく、偉大なる剣士の影に怯えていた。

「ボッシュ……」
隊長室から出てきた彼に、リュウは「何を話してたんだ？」と訊ねた。
ボッシュは白々しくかぶりを振り、その口元は相手を小ばかにするような笑みをたたえていた。
「別に。任務のことさ」
不信感、というほどではないが、リュウはボッシュの横顔に平穏ならざる思惑を感じることがある。
三ヶ月前にここへやってきて、自分が彼と同年齢だったためか、隊長命令でコンビを組むことになった。
彼は自らの過去について多くを語らない。が、その翠緑色（すいりょく）の双眸は、燃え爆ぜるような野心を奥底に秘めている。
それに不安を感じる一方で、リュウはうらやましくも思う。ボッシュには未来を掴み取る資格がある。だからあれこれと、心のなかで野望をめぐらせることが出来るのだ。
だけど、おれは――。
「さて。さっさと任務を終わらせようぜ、相棒」
言って、早足に歩き出す彼の、エリートの背中を、リュウは追いかけていくことしか出来ないのだった。

（？）竜の声ー前篇ー

リュウとボッシュは下層区のリフトポートへとやってきていた。
任務開始地点であるバイオ公社下層区実験棟へは、リフトを経由して行かなければならないからだ。
閑散としたホーム。片側にはリフトが停車しているが、そちらは目的地とは反対方向の路線。
とっくにバイオ公社行きのリフトが来ていても良い時刻なのに――せっかちなボッシュは、ホームに一人佇む係員に訊ねた。
二、三言やりとりしたのち、ボッシュは呆れたようなため息を吐きながら引き返してきた。あの重厚なマスクで顔を覆った係員は、彼になんと答えたのだろう。
「ボッシュ、どうかした？」
「お決まりの、リフトの故障……」
ボッシュは愚痴っぽく言いながら、薄暗いトンネルの先を指差した。
「このボッシュ＝１／６４に、線路の上を歩けとさ」
しょうがないね、とリュウは小さくうなづいた。
野生化したディクが我が物顔でうろつき、ライフラインや施設の老朽化が甚だしい下層区では、あれが壊れた、これが無いというのは日常茶飯事なのだ。
係員曰く、目的地へはこのままリフト道を歩き、途中にある整備用のエレベータを乗り継いで行けば良いということらしい。
しかし、係員はひどく無愛想で、具体的にどこの何のエレベータに乗れば良く、また道中は多数の野良ディクが棲息しているから気を付けろといった助言はしなかった。
リュウたちも特に深くは言及しない。レンジャーは街のため、人のため日々働いているが、「政府の人間」ということで一部から忌み嫌われているのだ。

「道、分かる？」
「何となくな。ついこの間、任務でリフト道のディクの一斉討伐をしただろ」
ああ、と答えながらリュウは線路に降り立った。
「道の途中途中に標識があった。それを頼りに行くしかない……急ぐぞ」
腰につけたポーチからペンライトを取り出し、ボッシュは早足に踏み出してゆく。
トンネルの両壁には白い電球がチェーンで鈴なりに張られているが、明かりは灯っていない。ディクが電気系統を食いちぎったためだろう。
じゃり、じゃり、と音を立てながら進入してゆくトンネルはまさに闇の棲み処。ペンライトの作るスポットが薄黒い染みだらけの壁を、滲み出した地下水が滴る天井を、すっかり錆びついた二本のレールを音もなく撫でてゆく。
歩き出してから五分ほど経過したところで、べちゃ、という液体音がボッシュの足元で弾けた。二人はすぐに身構えたが、スポットのなかでうごめく物体を見ると剣の柄から手を離した。
ハオチー。今ごろリュウの腹のなかで消化されているだろう肉の主だ。
身体の半分が肌色と薄緑色のツートン・カラーになった芋虫型のディクで、体表に粘着性の高い液体をめぐらして普段は天井や壁に張り付き、パトロール中のレンジャーの前に落下してくるのは珍しいことではない。
「リュウ、お前の好物が落ちてきたぞ」
ボッシュはからかうように言いながら、うねうねと身体をしならすハオチーを蹴り飛ばした。
きりもみするように転がっていくハオチー。と、その先から喉を鳴らすような獣のうなり声が聞こえてきた。
一、二、三……合わせて六つ、白く底光りする獣の目が暗闇に

浮かんでいた。
「さっそくお出ましか」
邪公(じゃこう)。地下世界に広く分布する二足歩行型のディクで、丸みを帯びた小太りな胴体に、大砲のように顎が突き出た頭の乗ったアンバランスな体つき。耳まで裂けた口の両端には鋭い牙が生えている。
ある程度の知性を持ち、何らかの防具を身にまとって両手に棍棒や斧を装備して狩りを行う。なかにはライト・ボウガンを持つ者もいるが、撃ってこないところを見ると目の前の三体はどれも近接タイプらしかった。
リュウは剣を抜こうとしたが、ボッシュに止められ、その手にペンライトを渡された。
「お前は？照明係？だ」
言うやボッシュは颯爽とレイピアを引き抜き、相手を挑発するかのように刃を立てる。
先頭の邪公が高らかに斧をかかげて雄叫びを上げると、三匹が一斉に躍りかかってきた。
しかし、ボッシュの間合いに足を踏み入れた途端、一匹が額から血を噴出させて倒れ込み、半秒遅れてもう一匹も地面に伏した。
瞬く間に仲間をやられ、残された一匹は慄くように後ずさりを始める。いよいよ背に壁が迫り、邪公は最後のあだ花と言わんばかりに大きく吼えた。
それを鼻で笑いつつ、ボッシュは突きの構えを取る。
「死んでいいよ」
弾丸のごとく繰り出されたレイピアの先端が、邪公の片目を貫いて壁にまで到達した。
邪公は悲痛な断末魔をもらし、やがて魂が抜けたようにふっと全身の痙攣(けいれん)が止まった。
獣剣技(じゅうけんぎ)。自身が学んだ剣術を、ボッシュはこう呼んでいた。
「全員、死んだの……？」
「見りゃ分かるだろ」

脳、心臓、三体はどれも正確に命の在り処を射抜かれていた。
血は乱暴に噴き出るのではなく、穿たれた穴から滾々（こんこん）と湧き出るように流れ、その顔はべろりと舌を突き出して獲物はどこかと叫んでいる。あたかも生きたまま時間が止められたかのような姿だ。
一方、ボッシュは返り血一つ浴びていない。彼がレイピアを鞘に納めてしまうと、本当にそこで戦いがあったのか疑わしく思えるほど、一瞬の出来事だった。

リフト道のディク掃討作戦があったのは一週間前。大勢のレンジャーとともにリュウとボッシュも作戦に加わった。
討伐した邪公の数は述べ百頭。セカンドやファーストといった上級レンジャーもいたなかで、サードであるボッシュは相当数の敵を討った。
元から高D値のエリートとして注目されていた彼だったが、そのときの戦果が彼の名と実力を決定付けた。いまでは彼に取り入ろうとゴマをすってくる下級レンジャーもいるほどだ。
かの作戦で居住区近辺にのさばる邪公たちを仕切っていたリーダー格の討伐に成功。他にも脅威となりそうな大型の邪公はあらかた片付けられた。
ヘッドを失った群れは散り散りとなり、いまでは狩り逃した残党、いわゆる？雑魚？が残っている状態。先ほどトンネルで鉢合わせた三頭もその一組だろう。
邪公は高い知能を持っている。その朱色を帯びた全身と、鬼のごとき面差しは見るからに獰猛だが、不用意に人間の縄ばりに踏み入っていくほど頭の悪い生き物ではない。
だからこれまでは大規模な掃討作戦が行われてこなかった。こちらから近づかなければ、邪公は決して人間を襲うことはない。いや、なかったのだ。
明確な理由は分からない。おそらくは邪公が獲物としていたディ

クが、彼らに狩りつくされてしまったのが原因だろうと推測されている。

ある夜、数匹の邪公が下層区街に侵入してきた。そして街を荒らしに荒らした。このことがきっかけでレンジャー基地は隊員総出で邪公、およびその他のディクの討伐に乗り出した。

この日のことを、リュウはあまり思い出したくない。頭の中から永遠に葬り去りたいとすら思っている。控えめに言っても、あの日の出来事は？悪夢？だった。

リフト道はディクの排泄物で汚れ、壁や線路のうえに飢え死にした邪公が転がっている。腐臭と暗闇。ここの空気を吸っていると、リュウの脳裏にあの日の絶望が矢継ぎ早の映像となって想起される。

事が起きる前に、どうして排除しておかなかった？

リュウはトンネルを部分部分で仕切るゲートをくぐる度に振り返る。ここのシャッターを閉ざしておけば、ディクの行く手を塞ぐことが出来る。さっきの邪公だってかなりリフトポートに近い場所にいたのだ。

しかし、それをすれば当然、リフトの運行が滞る。食料や物資の供給が遅れてしまう。このトンネルがいくらディクの通り道になるとはいえ、物資の搬入路を閉ざすことは出来ない。こと何の権力も持たないサード・レンジャーには。

そうやってリュウが悩んでいる間に、ボッシュはぐんぐんと先を進む。彼の頭にはそもそも「街を守る」という発想はないようだった。

整備用の通路を経由し、二人は天上の高い開けた場所に出た。

歩くところは両側に奈落が広がる橋の上となり、壁に設置された照明灯が岩肌に深い青色の光を投げている。向かいには反対車線の線路が見えるが、橋はその半ばでぷつりと途切れていた。

淡い白光を放つ虫がゆらゆらと宙を舞い、鬼火のような光の軌跡が暗がりに描かれては消える。燐虫。奈落からは時おり思い出した

ように風が吹き上がった。
　リュウはその都度足がすくんだが、ボッシュはまるで堪えていない様子だった。
「ボ、ボッシュ」
「なんだよ」
「ちょっと、進むの早くない？」
「おまえさ……」苛立ちげに頭をかきながら、ボッシュは立ち止まった。
「バイオ公社が時間にうるさいのは知ってるだろ？　このままだとリフトに置いていかれるぞ」
「まさか……だって、おれたちはその護衛じゃないか。少しぐらいは」
「待ってくれねーよ」リュウの言葉を取り次ぎ、ボッシュは再び歩き出した。
「あそこはそういうところなんだ」
　橋を渡り終えると、またトンネルが二人の前に伸びていた。
　しばらくブーツで砂利を踏んでゆく音だけがこだましていたが、
「そういや、お前、まだ見るのか？」
　ボッシュが唐突に問いかけてきた。
「え、何を？」
「夢だよ。最近、変な夢にうなされるって言ってただろ」
「あ、ああ……それは、そうなんだけど」
　リュウは困ったように鼻頭を指で掻く。彼との会話はいつも急に始まるのだ。
「何を見たのか決まって覚えてないんだ。ただ、見たって気がするだけで」
「なんだよ、それ。自分が見た夢ぐらいしっかり覚えとけよ」
　そう言われても、とリュウは頭のなかで独りごちた。
「なんでこんな話を？」
「別に？　ただ、今朝はちょっと覚めぎわの悪い夢を見たんでな」

「どんな……？」
ボッシュはゲートの横につけられた開閉レバーに手をかけながら、肩越しに言った。
「？竜（ドラゴン？に喰われちまう夢さ」
ガシン！　銅造りの壁や天井に大きな音を立て、扉は開かれた。
二人の足がぴしゃりと止まる。白タイルの敷き詰められたホームのうえに邪公の死骸が横たわり、そこに無数のコウモリが群がっていたからだ。
彼らは外敵の存在を察知するや、威嚇するような奇声を上げながら瞬く間に二人を包囲した。
「手厚い歓迎だな……」
ボッシュは素早くレイピアを構えた。それに遅れてリュウも剣を抜く。
敵陣の真っ只中で、二人は背中合わせに立っていた。
「こっちは俺がやる。もう半分はおまえだ」
ついでボッシュは脅迫めいた声で言った。「出来るよな？　相棒」
そしてボッシュの背中が勢いよく離れていくと、リュウは少しよろめきながら目の前の敵と対峙した。
ランタン・バット。鋭く尖った耳に、顔の半分を占める大きなガマ口。皮は邪公と同じく朱色を帯びている。
負けるもんか――リュウは十字型の剣を振りかざし、大・小それぞれ体格の異なるランタン・バットの群れに飛び込んでいった。
しかし、振り子のように宙を羽ばたくランタン・バットを彼の剣が捉えることはなく、斬撃はことごとく空を流れた。
一匹一匹は怖くないが、ランタン・バットは数で攻めてくる。リュウは防戦一方になり、敵を斬り倒すための剣はやがて敵を振り払うだけで精一杯の？棒？と化していた。
バットたちにたかられて手も足も出ないリュウは、ふと目に飛び込んできた空白へとその身を投げた。
一旦は間合いをおき、戦局を立て直す作戦だったが――突然、目

の前に鮮紅色の粒子が漂い、一点に集約し始めた。
しまった！　群れのなかの一匹が気流を生み出すかのごとく羽を素早く動かし、その身は目の前にあるのと同じ色の粒子をまとっている。
ランタン・バットは何も噛みつくだけではない。？パダム？という火炎系の魔法を操るのだ。
「くっ！」
眼前で小さな爆発が起きた。とっさに飛びのいたので直撃は免れたものの、しばらく前後不覚に陥った。
左肘に鈍痛が走る。うまく受身が取れなかった。更に爆風によって巻き上げられた塵が紗幕（しゃまく）となって周囲を覆い、敵の位置が分からない。
しかし、リュウは静かにまぶたを閉じた。ゆっくりと深呼吸し、神経を研ぎ澄ます。
何も死を覚悟したのではない。ゼノ＝１／１２８はリュウとボッシュの直属の上司であるが、リュウにとっては剣術の指導官でもあった。
訓練生時代、彼女が演習場で技を実演して見せてくれたときのことはいまでも脳裏に焼きついている。
『全ての生物は体内に？気？を宿している。そして剣士にとって、剣とは身体の一部。刃の切っ先に気を集中させ、振り下ろしとともに放出する。よく見ておけ』
彼女の周囲には細長いコンクリートの柱が並んでいた。彼女は一対の剣を両手に持ち、ふとまぶたを閉じた。
時間が静止したような沈黙。それは次の瞬間、コンクリートとともに砕け散った。
リュウは空気鉄砲を食らったかのような衝撃に吹き飛ばされ、おずおずと起き上がってみれば、あれほど堅牢に見えたコンクリートが彼女の足元で白い粉末と化している。
唖然とするリュウに、彼女はさっと眼鏡のテンプルを触れてから、

言った。

『おまえにこの技をくれてやる。名づけて――？絶命剣？だ』

（？）竜の声ー後篇ー

リュウは目を見開き、剣を両手で逆さに持ち上げた。
全身の気が躍動して刃の切っ先に流れ込んでゆく。砕けろ。あのコンリートのように。
「行くぞっ！」
リュウは全力をこめて剣を地面に突き刺した。
めりこんだ剣の先から爆裂的な勢いで波動が広がり、周囲にいたランタン・バットは真空の刃に斬り刻まれて次々と落ちていった。
やった！　リュウは両肩で大きく息をしながら、口のなかでつぶやいた。
しかし――振り返ったときには遅かった。一匹のバットが猛烈な勢いで突進してくる。攻撃も防御も間に合わない。
だが、どうしたことだろう。きつく閉じたまぶたの先で覚悟していた痛みは、一向に訪れなかった。
「危ないところだったな、リュウ」
まぶたを開けてみると、目の前には左翼から腹の中心にかけて串刺しになったバットの姿があった。
ボッシュ。彼が助けてくれたのだ。バットは穿たれた穴からどす黒い血を流しながら小刻みに震えている。
ボッシュはさっと剣を振るい、まるで唾を吐くようにバットを床に打ち捨てた。
「さて、先に進もうか」
そう涼しげに言う彼の背後には、バットの死骸が鈴なりになって横たわっていた。
死骸は眼球大の穴が腹や頭、身体のどこかしらに穿たれ、その数はざっと見ただけで十数匹はいる。
これだけの大群を相手にボッシュは息一つ切らすことなく、そればかりか「これぐらい出来て当然だろ？」というような佇まい。

リュウは身体を力ませた。ボッシュの前でぜぇぜぇと息を喘がせるのが恥ずかしく思えたからだ。
喉の奥で息が詰まりそうなのをこらえつつ、リュウはボッシュの後をついていった。

「――廃棄ディク処理施設？」
埃や煤をかぶって汚れているものの、壁に掲げられたプレートには確かにそう記されている。
つまり、二人の目前にあるエレベータは廃棄ディク処理施設に通じているのだが、二人はそこを目指しているわけではない。
いままで二人は標識が示す通りに進んできた。ここに来る直前、最後に見た標識には、廃棄ディク処理施設と二人の目指す場所が同じ方向で示されていた。
「ようするに、ここを通って行けってことだろ」
早々とそう結論付けたボッシュはエレベータに乗り、リュウも慌てて彼の後に続いた。
整備用エレベータは簡素な柵が周囲にめぐらされただけの四角い箱。ボッシュが柱についた赤いスイッチを押すと、鉄のチェーンがじゃりじゃりと金属音を立てながら巻き上げられていった。

バイオ公社下層実験棟へと繋がる通路は、レンジャーが度々世話になるホスピタルの廊下をリュウに思わせた。
床はエメラルド色のリノリウム、所々が張り出した壁は真っ白だ。
これまでの銅色で出来た薄汚い建物とは違い、ずいぶんと清潔感があるものの、ハオチー一匹の気配すら感じられないほどの底冷えした静寂が広がっている。
ぱったりと、前を歩いていくボッシュの足音が聞こえなくなる。彼の足は扉へと向かい動き続けているのに。それをどうしてか、リュウは不審に感じなかった。
心がある種、恍惚とした状態にあった。誰かが自分を呼んでいる。

いまの彼はそのささやきに誘われるままの人形になっていた。
扉が開かれた。廃棄ディク処理施設。先に入っていったはずのボッシュの姿はなく、リュウの視線は一点に注がれていた。
?竜(ドラゴン)?。この地に足を踏み入れた者を待ち受けるかのごとく、それは扉を入ってすぐ真正面のところで磔にされていた。
大空を自由にかけていた翼は溶け、大地を揺るがした両足は姿さえなく、脊髄骨がむき出しになって垂れ下がり、世界の行く末を見守っていた目は大きな空洞となっている。
いまや無残に朽ち果てたドラゴンの巨体。しかし、リュウには分かっていた。この耳に聞こえる声の主が?彼?だということを。
?長い、終わりのときが……終わった。とうに潰えた我が試みを、呼び覚ます者……?
リュウはすうっと伸びた橋の上を静かに歩いてゆく。妙な予感があった。
それはドラゴンとの距離が縮まっていく毎に輪郭を帯び、?彼?の前に着いた頃には確信に変わっていた。
この絶望に満ちた日常が変わる。いや、変えてくれる。そうだろう?
?いいだろう、小さき友よ……?
まばゆい閃光がドラゴンの口先から広がり、リュウの身体を、絶望を、ゆっくりと?み込んでゆく。

?今一度、空へ?

「リュウ!　おい、リュウ!」
聞き覚えのある声に鼓膜を揺らされ、リュウは目覚めると同時に飛び起きた。
「あれ!?」右に左にめぐっていた目が、一点に止まる。
「ボッシュ……?」
「はぁ?　いきなりフラッと倒れたと思ったら……寝惚けてるのか

よ」
「倒れた……おれが……？」
ボッシュはリュウの肩を掴み、強引に立たせた。
「おい、しっかりしてくれよ。行くぜ！？」
いまのは一体なんだったのだろう。夢、なのだろうか。
場所はバイオ公社下層実験棟へ繋がる廊下。床も壁も何も変わっていない。ただ、あの心を押しつぶすような静寂はなくなっていた。
前を歩くボッシュの足音もちゃんと聞こえる。そうだ。エレベータでこのフロアへと降り、そのまま普通に歩いていただけなのに――まるで現実と夢の境目を感じなかった。
不思議に思いながらも、リュウはボッシュとともにL字型の通路を右に曲がり、突き当りにゲートを見つけた。
なぜか見覚えがある。この先は、あの、ドラゴンがいた部屋じゃなかったか……？
リュウの予感は当たった。部屋の奥で、巨大なドラゴンの白骨体が十字に組まれた鉄柱に磔にされている。
「なんだ、これ……！？」
ボッシュは思わず驚嘆した。
施設は天井が高く、各フロアに通じる扉へは橋が懸造りで渡されており、下はディクの死骸や鉄くずが山積している。
なかには人骨と思われるものまであった。燐虫が舞い、死骸から発せられる臭気と塵が銅色の霧となって視界を覆うなか、その奥に浮かぶドラゴンの巨像はあたかも死神のようであった。
掌や腕、心臓には四本の大きな鉄槍が打ち込まれている。ドラゴンは正面を向いて固定されていたが、それは骨格標本というにはあまりにも不吉な姿だった。
リュウはボッシュとともにしばし唖然としていたものの、不思議と声を感じない。よりおかしな言い方をすれば、ドラゴンから？生気？を感じないのだ。
夢のなかでは心が恍惚とするほど強大な引力を持っていたのに、

いまのドラゴンにはそれがない。ただの死骸だ。
不審に思って見つめていると、ボッシュはリュウが怯えていると思ったのか、
「死んでるんだぜ？　噛みつきやしないさ。さ、行こう。リフトに遅れたらまずいぜ」
くるっと踵を返し、ボッシュはさっさと歩き出していった。
リュウは永遠に黙して語らないドラゴンの口先を仰ぎ見ながら、問いかけるようにつぶやいた。
「？アジーン？……？」
どうしてそんな言葉が口を突いて出たのかは分からなかった。

「リフトが出ちまう。急げ、リュウ！」
発車のベルがけたたましく鳴り響く。
ホームへの階段を駆け下り、ボッシュは一足早くリフトに乗り込んだ。
リュウも後に続こうとしたが、係員が前に立ちはだかり、ペンとボードを突き渡された。
どうやら乗員リストに名前を書けということらしい。ボッシュの分も。
「おい、何してんだ、リュウ！」
黄色く塗装された三両編成のリフトの先頭から、ボッシュが柵から身を乗り出して急かすように手を振っている。
誰のせいだよ――しかし、いまは悪態をついている時間さえ惜しい。
リュウは記入を終えると同時に振り返り、すでに発進したリフトの後部車両へと飛び乗った。
両手でしっかりと梯子を掴み、呼吸を整える。予定よりも到着が遅れたのは確かだが、何せリフトが故障していたのだ。
リュウは頭のなかで文句を言いながらゆっくりと梯子を上り、小さなバルコニーへと出た。

不意に身体がぐらついて慌てて手すりを掴む。高速輸送車両と名が付くだけあって結構な速度だが、こんなに急いで何を届ける気なのだろう。
屋根の中央には丸いでっぱりがあり、そこはハンドルで開閉するタイプの上蓋がついたハッチとなっている。すなわち、積荷は今まさに自分の足元にあるのだ。
好奇心に引き込まれそうになる身体を強く吹きつける風が阻む。リュウは片腕で顔をかばいながら通路を進み、銃座の前で柵に背を預けた。
かん、かん、かん。鉄造りの梯子を踏む音が聞こえる。やがてボッシュがその顔を見せ、挨拶代わりに手をあげた。
「リュウ、そんな気難しそうな顔しないで、もっと気楽にいけよ」
ボッシュの視線がちらとハッチに向かう。「何を運んでるのか知らないけど、レンジャーの護衛までついたリフトを襲うやつはいないさ」
貨物を狙い、盗賊や？トリニティ？の連中がリフトを強襲するのは間々ある話だ。そのために置いてきぼりを食らいそうになりながらも、こうしてレンジャーがリフトの護衛につく。
道中あった橋の一つが見るも無残に崩壊していたのだって、つい数日前に何者かがリフトを爆破したからだ。犯人は捕まっておらず、動機や目的は不明のままだが、おそらくは？トリニティ？の仕業だと見られている。
メベト＝１／４という男が率いる？反政府？を掲げたレジスタンス組織。リュウたちレンジャーの敵だ。
確かに、もしも彼らの襲撃にあったら、という不安がないわけでもなかったが、リュウが気難しそうな顔をしているのは別の理由だった。
「ボッシュ、君には、ドラゴンの声が聞こえた……？」
ボッシュは質問の意図が分かりかねるように眉毛を曲げた。
「急にどうした？」

「さっきの大きなドラゴンのことだよ。不思議だけど、おれ、名前知ってるんだ」
「名前？」
「？アジーン？……それが、あのドラゴンの名前だ」
バカバカしい、とボッシュは鼻先で笑った。
「お前も知ってんだろ？　ドラゴンっていうのは、？大いなる災い？を引き起こした、言うなりゃ？邪神？だ。あいつらのせいで俺たちはこんな薄汚い地下で暮らすハメになった。もう千年も前の話だから、地上の暮らしがどうだったかなんて知らないけどな……。とにかく、そんなやつに直々に声をかけられたんだ。お前、やばいかもな」
「ボッシュだって、夢のなかで喰われたんじゃないのか？」
「あれは、別だ」
痛いところを突かれたように答えて、ボッシュは一息、間を置いた。
「ところで、リュウ。お前……俺に手柄をゆずる気ない？」
リュウは耳を疑う。「えっ！？」
「俺の能力だと、あとは大きな手柄があれば昇進できる。うまく行けば？統治者（メンバー）？の一人にだって、なれる」
別段見るところもない岩窟の景色が矢のように過ぎ去ってゆく。それをぼんやりと眺めていたボッシュの目が、じろりとリュウに向けられた。
リュウは彼の眼差しに寒気を覚えるときがある。暗闇に浮かぶ邪公の両目玉に見つけられたときのような恐怖、危機感。
ドラゴンのことで頭がいっぱいだったリュウは、つかの間の白昼夢から現実へと引き戻されるような気分だった。
「統治者（メンバー）になんて、まさか……」
「リュウ、俺にはそれだけの資格があるんだ。そう、このボッシュ＝１／６４は、この世界を統治するメンバーの一人になる。いや、ならなきゃいけない」

初めは理想を語るようだった彼の口調が、それがさも自らの？義務？だとでも言うような堅苦しい響きへと変わっていった。
「なぁ、リュウ。D値1／8192だと……おまえはサード・レンジャーより上には行けない。俺が昇進すれば、お前の後ろ盾になってやることも出来る」
ボッシュは真っ向からリュウを見据えて、よく言い聞かせるように言った。
「リュウ、俺のために働いてくれ」
ボッシュはその身にどんな過去を、使命を背負って生きているのだろうか。
これまで謎に包まれていた友人の心が垣間見えた気がする。いや、いまとなってはもう？友人？とは呼べないのかもしれない。
彼の翠緑色（すいりょく）の瞳は力強く自分を見つめているようで、視線はずっとその先に向かっている。ボッシュのなかで、自分は単なる踏み台でしかないのか？
リュウはしばらく黙りこくっていたが――その耳はただならぬ危機の気配を感じ取った。
中央に連なるつらら石をはさんだ向かいの線路に、人型のディクがリフトを追うように走行している。
背中には人がまたがり、こちらに鋭く何かを向けた。一発、二発、銃声が響き渡る。
一つはリュウの袖口をかすめた。リュウは慌てて銃座につき、ろくに照準もあわせることなくトリガーを引いた。
「強襲ディク？　トリニティか！？」
銃声の隙間にボッシュの怒号が聞こえる。
敵はハンドガンで応戦しながらやがてリフトを追い越し、その姿は闇に消えた。
「あきらめた……？」
目を凝らしながら、リュウはつぶやいた。
「いや……」ボッシュが？前方？に敵の姿を捉えた。

「ちくしょう！　ぶっ壊してでもリフトを止める気だ！」
彼の背中越しにリュウにもしかと見えた。リフトのフロントライトに照らされ、敵が何かを――？ロケット・ランチャー？を肩に担いでいるのが。
やがて砲口が火を噴いた。この世のすべてが一瞬にして破壊し尽されるような凄まじい衝撃のなか、リュウの意識は深い奈落の底に投げ出された――。

地平線の果てまで真っ白に塗りつぶされたこの景色は、おおよそこの世の物ではない。
ひどく傷ついた身体を引きずるように、リュウはよたよたと歩いていた。
どこへ行き着く当ても、標もないのに、何か強大な力に引き寄せられるように足が動く。
何だ？　何と言っている？　自らの息遣いだけがこだまする真空のような静寂に、それは空間のどこからともなく聞こえてくる。
？おまえを……？
突然、リュウの脳内に幻像（ヴィジョン）が流れ込んだ。
ドラゴン。その見るも無残に朽ち果てた巨体が全身を震わせ、目の前で飛び立とうとしている。
聞こえた。いま、はっきりと、それは打ち鳴らされた鐘のように大きく響いた。
？おまえを選んでやる？

（？）飛べない羽を持つ少女ー前篇ー

「今日は歴史の勉強だ、リュウ」
眼鏡の柄をさっと触れて、ゼノはスツールから立ち上がった。
なめらかな岩肌が黒板、四角いコンテナが机。レンジャー演習場の片隅に作られた、ゼノの特別教室だ。
「かつて、世界には？空？という色があった。そして太陽という？光？があり、月という？闇？があった。とても美しい世界だった。そこには我々の祖先が暮らしていた。人間、獣人、妖精……誰が王様ということもなく、彼らは大空の下を自由に駆け回っていた。しかし、彼らの平穏を蝕む存在があった。？竜（ドラゴン）？。彼らは世の安寧を守るために、学問を拓き、魔術を生み、科学をこしらえて兵器を作った。
そうして長い年月に渡り、彼らはドラゴンと戦い続けた。気が遠くなるような闘争の歴史のなかで、高度な科学技術を手にした彼らは、ドラゴンの邪悪な力を利用しようと考えた。
すると今度は彼らのなかで血で血を洗う戦いが起こるようになった。かつて？邪神？と畏怖されたドラゴンは、もはや彼らの手駒、兵器になっていたのだ」
手に書物を開きながら、悠揚（ゆうよう）と歩いていた彼女の足がぴたりと止まった。
「ここまでの歴史が記されたところで、古文書は唐突に終わっている。？大いなる災い？。その一文を残して」
ぱたん、と分厚い書物を閉じ、彼女はおもむろにリュウの机に置いた。あずき色の布で装丁された本は所々がけば立ち、金箔で印字された表題はかすれている。
重い。リュウはペラペラと頁をめくってみるが、この本には膨大な時間が詰まっている。幼い彼の手に、それはまだ大きすぎた。
「それはお前にやる。幼い頃に父からもらった物で、私はもう文面

を思い出せるほど読み込んだからな」
父。どこか懐かしい響きのように感じられたが、同時にひどくよそよそしい感じもする。リュウは両親の顔を知らないのだ。
「ところで、リュウ。この科学や銃がある時代に……どうして私のような？剣士？がいると思う？」
どうせ答えられないと分かっているくせに、ゼノは度々いじわるな質問をふっかけてくる。
リュウはしばらく考えてみたが、やがてふるふるとかぶりを振った。
「魔法も銃弾も、その力を抑えることは出来ても、完全に絶つまではいかなかった。唯一、ドラゴンを倒すことが出来た武器が……？剣？だった。
理由は分からない。純粋に殺傷能力の高さを上げるなら、剣は魔法にも銃弾にも劣る。武器としては最も原始的で、また非効率だ。それでも邪を払う唯一の聖具として、剣はいかなる時代にも必要とされてきた。無論、その使い手もな」
ゼノはリュウの肩を叩く。「お前は魔法も銃の扱いも苦手だったな。だが、よろこべ。いつかお前の剣は、ドラゴンから世界を救うかもしれないぞ」
これから厳しい稽古が始まる。するとその口元から笑みが消え、彼女はまったくもってドラゴンのようになる。
ゼノは怖いし、いじわるだし、たまに逃げ出したくなってしまうけれど――リュウは彼女との時間が、大好きだった。

一度は肉体を離れた魂が徐々に舞い戻ってくるかのように、リュウはゆっくりと目を覚ました。
鉄の焦げるような匂いが真っ先に鼻をつき、視界にはちらほらと火の粉が舞っている。
辺りには黄色い車両が横倒れに、あるいは前部から岩盤に突き刺さり、漏れ出したオイルに引火して所々ぼやが起きていた。

そうか。トリニティの襲撃にあって、リフトごと谷底まで落ちてきたんだ。
一筋の黒煙がすうっと吸い込まれていく先を目で追うと、そこには闇。急峻な崖と、突出した岩々の鋭さがほの赤く染まっている。
幸いにも火が照明の役割を果たしてくれた。明かりがあるだけでだいぶ心が落ち着く。
リュウは通信機を取り出そうと、腰の後ろにつけたポーチに手を伸ばした。がしゃり、と鉄くずを握るような音が鳴る。
通信機だけでなく、ペンライトまでがポーチのなかで壊れていた。おそらくは落下の際に背中をしたたか打ちつけたからだろうが、しかし、不思議だった。
かすり傷一つ負ってないどころか、よく眠ることの出来た朝のように身体の具合が良い。頭もすっきりとしている。
リュウは小首を傾げたが、途端、一挙に押し寄せてきた不安がそれを打ち消した。ボッシュはどうしただろう。積荷はどうしただろう。
彼は大慌てで確認に向かう。積荷を乗せていた車両は横倒しになりながらも、ハッチは依然として固く閉められていた。が、車体の側面には何か強い力でこじ開けられたような亀裂が入っている。
パチっと勢いよく爆ぜる炎が行く手を塞ぎ、中身の確認も出来ない。リュウはしばし途方にくれた。
いずれにしろ、レンジャー基地に戻る必要があるだろう。任務の失敗を報告しに。
暗い地の底で出口を見つけようと歩き出した彼の足取りは、ひどく重々しかった。
つと、何か曰くありげな物音が聞こえた。火の爆ぜる音とは違うし、腹を空かせたディクのうなり声にしては嫌に甲高い。
人間の悲鳴？　リュウは直感に打たれ、額にかけていた暗視ゴーグルを装着した。
サーモグラフ視界の中央に、鬼火のようにゆらめく熱源がある。

岩間から出たり隠れたりで全体像がおぼつかないが、人型であることは分かった。
だが、リュウは助けを求めて呼びかけることはしなかった。ディクのなかには人間によく似たシルエットを持つ者もいる。サイクロプスやドヴォークゥ、彼らは身の丈二メートルを悠に超える一つ目の怪物だ。
リフトを襲ったトリニティの一員が乗っていたのはそのどちらか。鋼のような肉体に、リフトと張り合うほどの馬力を誇る足腰。人を乗せて自在に岩場を飛び、駆け回るために開発された乗用のディクだ。
もしかしたら、あれは例のトリニティかもしれない――リュウは熱源を追って、狭くてごつごつとした岩道を進んだ。ときに歪な地形に足を取られそうになりながらも、対象との距離を着実に縮めてゆく。
やがて強い光を感じ、リュウはゴーグルを外した。それは廃工場らしき施設の玄関につけられたポーチ・ライトだった。対象は先ほどこのなかへと入って行った。
室内は埃や錆びた金属の匂いで満ち、部屋の四隅に付けられた白熱灯が明滅を繰り返している。ここは鉄くずやスクラップの集積場らしかった。
扉の形をした四角い枠が、次のフロアへの道順を示している。その奥から、どす、どす、どす……。粉の詰まった袋を踏みつけるような音が、不気味な響きを帯びて聞こえてくる。
リュウは気配を殺しながら慎重に、かつ急いで足を運んだ。部屋に入ってすぐのところにあったスクラップの築山に身をひそめ、ちらと外を覗きこむ。
女の子だ。女の子？　リュウは我が目を疑った。今まさに、サイクロプスが自分の眼前を横切ろうとしている。その分厚い腕のなかで、少女が鎖の束縛から逃れるようにじたばたともがいているのだ。
リュウは嘆くように一人かぶりを振る。その声にもならない悲鳴

を聞いた、涙でいっぱいの瞳とさえ視線が合った。しかし、無我夢中だったのだろう。少女はサイクロプスと同様にリュウの存在に気付いていない。

このままじっと身を潜めていれば助かる。おれはサード・レンジャー、D値1／8192のローディ。あんな怪物とまともに戦って勝てるわけがない。

だけど、本当にいいのか？　おれはまた繰り返すのか？　？お前は？また、無力なままで終わるのか――？

ぷつっと糸が切れたように、身体の底から怒りにも似た闘志が湧き上がる。いままでに感じたことのない力の奔流。

それはやがて真紅のオーラとなって体外へとほとばしり、紺色に澄んでいた彼の瞳は燃えるような赤に染まっていた。

あいつを倒す――彼はスクラップのうえに飛び乗り、剣を抜きざま再び高らかに飛翔。刃は矢のごとき速度と威力を持って、サイクロプスの背中を斬り貫いた。

緑色の血液とともに、その口からどよもすような金切り声が噴き出した。サイクロプスはめちゃくちゃに腕を振り回し、肩口に乗っていたリュウを振り落とした。

スクラップの側面にしたたか背中を打ちつけたものの、まるで痛みを感じない。理性や恐怖もとうに吹っ飛んでいる。いまはただ、目の前の敵を倒す、破壊する。その衝動だけに突き動かされていた。

サイクロプスの胸から飛び散る血しぶき。その一滴一滴を正確に捉えるまでに神経が研ぎ澄まされていた彼にとって、眼前に振り下ろされた拳をかわすなどは造作もないことだった。

リュウは素早く背後に回り、剣を握る手と足に力を込めると、一息に地面を蹴った。刃が斜めに閃き、少女を抱えていたサイクロプスの左腕が宙を舞った。

耳をつんざくような絶叫を背中に受けながら、リュウは両手にしかと受け止めた少女の安否を確かめる。ショックのあまり気を失っているが、呼吸は感じられる。

どす、どす……。あの重量感のある足音が近づいてくる。リュウは静かに振り返り、あらぶる敵と対峙した。
それが顔と言わんばかりの巨大な一つ目。腹筋が六つに割れた雄々しき肉体。片腕を失い、おびただしい量の血を流しながらも、万雷のごとき雄叫びを上げるほどの生命力。
残された三つ指が鉄塊のごとき拳を作り、急加速をつけて振り下ろされたのよりも早く――リュウは先ほど穿った穴の下を貫き、剣の柄尻に左手を添えて、そのまま前へ前へと体重をかけた。
力強く踏ん張っていたサイクロプスは、しかし、リュウの力に負けてかかとからコンクリートにめり込み、ずりずりと地面を掘り進みながら一直線に押し流されてゆく。
その巨体を壁が受け止めた頃には、サイクロプスはすでに瀕死の状態にあった。一つ目が力なく瞬きを繰り返す。
リュウは素早く剣を引き抜き、終(つい)の一刺し。大目玉がぶしゃっと弾け、やがてサイクロプスの全身からふっと力が抜けた。
「はぁ、はぁ……」大きく息を喘がせる彼の周囲から、真紅のオーラが空気に溶け込むように消えていった。同時に脳内を占めていた破壊衝動が失せ、理性が戻ってきた。
リュウはいまさら腰が抜けそうになるほどの恐怖を感じた。目の前でうなだれるサイクロプスにではなく、この数分間の自分に。
何だ？　この力は何だ？　思い返してみれば、戦っている間はまるで自分の意思が働かなかった。この身体を誰かに操られているかのような感覚だった。
リュウは返り血に汚れた掌を見る。それはかすかに震えていた。
何だ、何なんだ、おれは……？誰なんだ？？

動揺する彼の瞳が、遠くで横たわる少女を捉えた。彼は剣を鞘に収めながら駆け寄り、少女の顔を覗き込んだ。
思わず息を呑む。それまで脳内にはびこっていた不安や疑念は、一瞬のうちにかき消えた。

この色素の薄い金色の髪も、白い肌も、か細く流れる四肢の輪郭も、すべてがガラス細工のように繊細だった。
リュウは革の手袋を取り払い、そっと少女の背中に両腕を回した。薄汚い返り血でこの美しさを曇らせてはいけないと、あるいは血の一滴すら少女にとっては致命傷になるかもしれない。
とっさにそう思わせるほど、少女はもろく、無闇に触れてはいけない物なのだと五感が訴えてくる。
少女の顔が一瞬、苦痛を感じたようにゆがみ、やがておぼろげにまぶたが開いてゆく。
それが完全に開かれ、リュウを見つけると、少女は小さく声をこぼしながら彼にしがみついた。まるで深い闇に吸い込まれそうになる身体を必死に繋ぎ止めるかのように。
「大丈夫。あいつは、倒したよ……」
思考が止まった頭のなかから、一つ一つ言葉のピースを探すように、リュウはただただどしくささやいた。
間近に見る少女の黒い眼は、表面に透き通った水をたたえ、なかに神秘の都が広がっているのではないかと思わせるほど、心をひきつける力があった。
リュウは小刻みに震える身体を肩からおろし、「立てる？」と言うと、少女はゆっくりとうなづいた。
「おれは、リュウ。きみは……？」
少女は腰周りについた埃を払い落とし、おどおどするような視線をリュウに向けた。
「ニ……ニィ……」
喉の奥につっかえている物を吐き出そうとするように、少女は懸命に言葉を紡ごうとする。
そして痛そうに、歯痒そうに身じろぎしながら、やっと、それらしい単語を口に出すことが出来た。
「ニー……ナ……？　きみ、声が……？」
リュウの言わんとしていることを察し、少女――ニーナの表情に、

暗い影が降りた。
何か悪いことをしてしまった気がしつつ、リュウはおもむろに踵を返した。
「とにかく、ここを出よう。安全なところまで行かなきゃ」
しかし、ニーナは元の場所で身をすくめたまま動かない。
怖いのだろう。サイクロプスのような怪物が、外の世界が。
「おいで」
リュウは手招きし、力強く「行こう！」と言った。
しばしためらうような仕草を見せたあと、ニーナはぺたぺたと音を立てながら駆け寄ってきた。
彼女は裸足で、手術の際に患者が着るスモックのような、薄地の白いベールしかまとっていない。
そして、何より。彼女の背中には一対の赤い羽が生えている。「翼」と呼ぶにはあまりにもか弱く、彼女が動くたびに白い光の粉がふっと虚空に散らされた。
リュウが手を差し伸べると、ニーナはそれを遠慮がちに、すこしぎこちなく受け取った。
瞬間、何故だろう。彼女を守らなければと、リュウは思った。

二人が立ち去ってからまもなく、とある人影がフロアに降り立った。
生き物のようにうねる長い尻尾。フードに隠れた獣耳。タイトな藍色のショート・ワンピースに締めつけられるように膨らむ乳房。
薄がりに浮かぶその姿は、あでやかな女体の輪郭を持っていた。
彼女は床に飛び散った緑色の血を追いかけ、壁にもたれたまま死んでいるサイクロプスの前で足を止めた。
口から上が暗視レンズ付きのマスクで覆われ、彼女の瞳や表情の機微をうかがうことは出来ないが、彼女はどこか名残惜しそうにサイクロプスを見つめていた。
『今回の任務は――』

ふと、彼女の脳裏に低くしわがれた男の声がよみがえる。
『下層区バイオ公社から搬送される……積荷の確保』
彼女は訊ねた。『それは、一体何ですか？』
『人の形をしている。それも、おそらくは……？子供？だ』
そのとき、彼女は自分と男の間の光が怪しく輝いたように感じた。
長い沈黙ののち、男は悟ったような、諦めたような態度で言った。
『この世界がいかに疲弊しきっているか……それが分かる事例だよ』
彼女はつと振り返り、その足は二人が向かった先へと静かに動き出していった。

（？）飛べない羽を持つ少女ー後篇ー

ニーナ。それが彼女の名前らしい。

何かに怯えるようにうつむき、いっそ亡霊のような足取りで歩く。この手に彼女という存在を握り締めているのに、どこか実体が感じられない。幻なんじゃないかと、思わず疑ってしまうほどだ。

リュウは絶えず彼女を気遣いながらゆっくりと進んだ。こちらはブーツを履いているから何の問題もないが、彼女は裸足だ。

銅でコーティングされた床はざらざらとして表面が粗く、ネジや尖った鉄の断片がそこらじゅうに落ちている。ディクの排泄跡と思しき染みもある。

そんなところを歩かせるわけにはいかない。右腕と左足首に錘のような分厚い輪をはめている以外、彼女は赤子のように無防備なのだ。

通路の突き当たりでエレベータを発見したが、電気系統をディクに食いちぎられているのか稼動せず、リュウは近くにあった整備用梯子を使うことにした。

先に自分がのぼり、ニーナの手を引く。まるで昏睡状態にあるかのような、意識がはっきりとしていないらしい彼女の面差し。いつまぶたが閉じて、ふっと梯子から落ちてしまうかリュウは肝を冷やしっ放しだった。

だが、それは単に外見から受ける印象であることが分かった。梯子から引き上げられると、ニーナは自分の意思できょろきょろと首をめぐらし、薄がりのなかで何かを見つけた。

するとそちらのほうにぱたぱたと駆けていってしまい、リュウは彼女が何をするのかと行方を見守った。

「うー？」

所々が錆びた鉄のチェスト。

錠前は壊れており、ふたはうっすらと開いている。ニーナは物珍

しそうに手を伸ばした。
「うぁ！」
途端にチェストが跳ね上がり、額に一対の触手を生やした奇怪な生物が姿を現した。
「ニーナ！」
リュウは腰が抜けて動けなくなったニーナの手を取り、通路へと逃げ込んで立てつけの悪い鉄扉を強引に閉じた。
噂でしか聞いたことがないが、宝箱やコンテナを背負って風景に溶け込み、それに近づいた者を襲う巨大カタツムリがいるという。
いまのは明らかにそれだ。リュウは鉄扉に背もたれてほっと胸をなでおろしながら、諭すように言った。
「だめだよ、ニーナ。気になるからって無闇に触っちゃ」
ニーナは上目遣いにちょっと残念そうな顔をして、こくっとうなづいた。
こういった反応を見るに、彼女は言葉を理解出来るらしい。ただ、何らかの事情で声を失っているのだ。
それに自分の意思もはっきりとしている。今だって、好奇心の赴くままに行動したじゃないか。十二、三歳の子供らしく。
彼女をどこか魂の抜け殻のように感じていただけあって、この発見はリュウを安堵させた。彼女には心がある。生きている。
しかし、一方で疑問は尽きない。たとえば肩や首元、腕や足に規則的に刻まれた青い文様について。見るからに飛べそうにない赤い羽について。
思い切って口に出そうとするが、それはいつも寸でのところで留まる。彼女は答えを言うための術を持たないのだ。
だが、これだけは答えて欲しい質問として――どうしてこんな場所にいるのか。サイクロプス、恐らくはトリニティの所有物と思しきディクに、さらわれかけていたのか。
リュウの脳裏に、車体の側面を引き裂かれたリフトの姿が浮かぶ。まさか。

リュウはちらりと、彼女に悟られない程度に横顔を覗き込む。そうだ。こんなに可愛い子が、リフトの？積荷？であるはずがない――。

二人は半壊になっていたドアをこじ開けて、新たなフロアへと足を踏み入れた。

すると、ディク？　何か平穏ならざる物音が聞こえた。

顔をマスクで覆った人間が、ハンドガンを構えて物陰から飛び出してきた。とっさにリュウも剣を引き抜いて逆袈裟に斬りかかる。

銃声が高らかに鳴り響いた。それにおどろいて地面にへたり込んだニーナがおそるおそるまぶたを開けると、リュウは尻もちをついた状態で、相手の首に刃の切っ先を突きつけていた。

一方、相手もリュウの額に銃口を向けている。まさに一触即発の状態だった。

「――トリニティか？」

「レンジャー、その子を置いていけ。君では……その子を救えない」

膨らみのある胸、甲高い声質、相手は女だった。

「なに……？」

「我々はその子を必要としている。この腐った世界を変えるためにな……」

女の後ろには長い尻尾が地面を這うようにして垂れている。獣人。

リュウは一瞬それに気を取られたが、すぐさま視線を女の顔に戻した。

「何を考えているのか知らないけど……犯罪者の言うことを聞く気は、ないね」

女は鼻先で嘲笑った。「立派だね、レンジャー。けどね……」

淡々とした口調で、女は続けた。

「君の目に映っている世界だけが、すべてというわけではないんだよ……。

ただ生きてるだけなら、知らない方が幸せなこともある。君は、私には会わなかった……。羽の生えた女の子もいなかった……。いい

ね？」
ついで、女は少し離れたところにいるニーナを見やった。
「さぁ、おいで。私と一緒に行こう」
するとニーナは意を決したように立ち上がり、ぱたぱたとリュウの下へ駆け寄った。
そして自分が守るといわんばかりにリュウをかばい、女をにらみつけた。
「そのレンジャーといても、君は救われない……」
しかし、ニーナの瞳は頑なだった。
女は困ったようにため息をもらし、やがて根負けしたふうに言った。
「分かった、レンジャー。手を結ぼう。ここを出るまで」
「何を企んでる……？」
「その子を保護しようって目的は、同じだろう？」
女はおもむろにマスクを外し、その素顔が露わになった。
リュウが想像していたよりも優しく、それでいてどこか悲しげな――誰かの未来を暖かく見守りつつも、いつかその身を襲うだろう不幸を憂いてもいる、そんな複雑な表情だった。
「私は、リン。よろしく」
しかし素顔を見せてくれたといって、すんなりと心を許すわけにはいかない。相手はトリニティ、何を考えているのか分からないのだ。
リュウの眼差しから敵意が消えないせいか、リンは努めて親しげに言った。
「あんたも、よろしくな。レンジャー」
リンという女は、なぜか施設の間取りに詳しかった。この階段がどこに通じているか、この部屋は何に使われていたか。
「ちょっと昔、ここで厄介になったんでね」それが彼女の答えだった。

過去にトリニティのアジトとして使われていたのだろうか？　リュウはリンの尻尾を目で追いながら、あれこれと考えをめぐらした。
リンが先頭を歩くのは、何も彼女が案内役を買って出たというだけではない。もしリュウが彼女の前を歩いていくとして、いつ後頭部に銃弾が飛んでくるか分からないからだ。
しかし、それはリンにとっても同じはず。更にこちらは用心して剣を抜き身にしているにも関わらず、彼女はハンドガンを腰のホルスターにしまっている。
リュウはますます不思議に思った。ニーナが目的なら、さっさと自分を殺して連れ去ればいいのに。
疑念に耐えかねて、リュウは訊ねた。
「さっきリフトを襲ったのはお前だろう？　ロケット・ランチャーまで使って……なのに、なんでいまは何もしないんだ？」
リンは背中を向けたまま答えた。
「私の目的はその子を連れて行くことにあって、あんたを殺すことじゃない」
「でも……」
「しつこいやつだね」リンはぴたりと足を止め、肩越しにニーナをちらと見やった。
「誰だって、小さな子が悲しむ顔なんて見たくない。犯罪者にだって……心はあるんだ」
リンは冗談めかして言い、くすっと掴みどころのない笑みを浮かべた。
「そう、か……」
リュウは唖然とするほかに言葉が思いつかなかった。

レンジャー基地、隊長室。
窓に差し込む人工太陽の光が部屋を真っ赤に染め上げるなか、ボッシュは身体を震わせていた。
上司の叱責が怖いのではない。任務に失敗したという？屈辱？に

打ち震えているのだ。
「トリニティの襲撃……リュウは行方不明……そうですか」
抑揚のない声で応えながら、ゼノの瞳はかすかに憂いを帯びていた。
「それで、積荷はどうしました？」
「積荷！？　俺は、殺されそうになったんだぜ！？」
「あれは、極めて機密性の高いものです……。報告に戻るより、積荷の確認を優先すべきでした」
ボッシュの視線が狼狽しきりに足元をさまよう。「あ、あの高さから落ちたんだ……あとかたもなく……」
ぴしゃ、とゼノは書類を挟んだボードを中指で小突いた。
「ボッシュ……上層部は、言い訳を好みません。積荷の確認、そして、確実な？処分？を望みます……」
くっと眼鏡を持ち上げ、ゼノの眼光が鋭く冴え渡った。
「いいですか。？それ？が、どのような姿をしているとしても……完全に処分するのです」
ボッシュが慌てて部屋を飛び出して行ってからしばらく。彼の去り際はさながら負け犬のようだった。
高いD値に恵まれたとはいえ、偉大な剣士を父に持つとはいえ、所詮は十六の子供。精神が未熟なのだ。
ゼノはブラインドをめくり、人工太陽をぼんやりと仰ぐ。時々思うことがある。
いや、それは何十年と組織に尽くし、一定の地位についた者なら誰でも胸に秘めることかもしれない。
組織への、そして自分への疑念だ。悪化の一途を辿る地下都市全体の大気汚染に対して、上層部はとある計画を推し進めている。
到底表沙汰には出来ない非人道的な計画だ。しかし、大気が浄化され、人々の暮らしが守られるなら止むを得ない？犠牲？なのだというのが、上層部の考えだ。
彼女自身、彼らの？手駒？として計画の邁進に加担している。今

さら「嫌だ」という我を押し通して組織を抜けることなど出来ない。
そうするためには、彼女は長く組織にい過ぎたのだ。責任がある。裏切れない信頼や期待、長い年月のうちにびっしりと根差したしがらみがある。
だが、単に勇気がないだけなのではないか、そう指摘されたら言い逃れ出来ないのも、また事実だった。
自分の心はとっくに腐っている。命令通りに働くだけの機械と化している。剣の指導員として働いていたときから、彼女は上から与えられたマニュアル通りに幾人もの訓練生を指導してきた。義務的に、何の感情もなく。
そうしてレンジャーになった彼らは、いま立派な人間として生きているだろうか。いや、ほとんどは公儀権力の笠を借りて横暴に振る舞い、ローディたちを踏みにじる下衆と化している。
世界を汚す分子たちの誕生に、彼女は一役買ってしまったのだ。それに気付き、自責の念に苦しんでいた折、彼女はリュウと出会った。
一切のマニュアルを捨て、ときに姉のように、母のように、彼女はリュウに接した。
そのおかげかも分からない。リュウは決して優れたレンジャーではないが、少なくとも自分の利益のために誰かを傷つけるような人間にはならなかった。
ゼノが下層区レンジャー基地の監督官に任命されたのは、リュウの訓練期間が終わってまもなくのこと。それから彼女が教え子を持つことは二度となかった。
リュウ。心から向き合うことの出来た、最初で最後の教え子である彼には、自分の果たせなかった想いを全て託してある。D値の低さなどは関係ない。
だから、生きて、この様々な歪みを抱えた世界の、ほんの一部分でもいい。
変えて欲しいと、願うのだ。

（？）究極の破壊者ー前篇ー

一二〇〇メートル。自分たちのいる場所は、大体その辺りだろうとリンは言った。

リュウが暮らす下層区街でちょうど一〇〇〇メートル。それより深い最下層区は都市化が進められておらず、採鉄プラントや下水処理場などライフラインに関わる施設が集まった工業地域となっている。

人工化されていない天然の空間は野良ディクたちにとって格好の棲み処であり、現状ほとんど野放しだ。治安も衛生環境も？最下層（世の底）？に相応しい劣悪ぶりだが、一方で貧民層に残された最後の生活圏でもある。

人口増加に対する居住ドームの許容量（キャパシティ）には限界があり、D値が低い者のなかでも高齢、病弱などの理由で職につけない者は次々と淘汰される。罪を犯してD値、すなわち政府発行のIDナンバーを抹消された者も同様だ。

社会からつま弾きにされた彼らはおのずと最下層区に集まり、やがて？貧民窟？と呼ばれる集落群を築き上げた。ちょうどバイオ公社の実験施設から逃げ出したディクたちのように、自らの棲み処、コミュニティを形成したのだ。

貧民窟はアリの巣のように張り巡らされている。リン曰く、この施設の最上階にあたる場所から貧民窟の一つに出られる。更にそこからは下層区行きのリフトが出ているそうだ。

リュウはほっと胸をなでおろしたが、すぐに「相手はトリニティだぞ」と気を奮い立たせた。話が出来すぎている、これはひょっとしたら罠なのかもしれない。

「レンジャー、疑う気持ちは分かる」

心を見透かしたような物言いに、リュウはどきっとした。

「だけど、ここを出るまでは？同盟？だと言ったはずだろ。私の言

うこと、少しは信じてもらいたいもんだね」
しかし、リュウの顔から警戒の色が薄らぐ気配はない。
「無理、か……」リンは自嘲気味にくすりと笑った。
廃れた壁や床の具合を見るに、施設は人の手を離れてかなりの時間が経っているらしかった。
しかし、通路の照明は所々生きている。電気が通っている証拠だ。やる気のない工員が施設閉鎖の前に電源を落とし忘れたのか、あるいは浮浪者が住み着いているのかもしれない。
じりじりとストロボのように瞬く黄色の電灯、腐敗した金属の匂い、滴る水が下水管に音を立て、廃墟特有の鬱蒼とした空気と底冷えした静寂とが怪しいコントラストを作っている。
あまり長居したくはない場所だ。かさかさ、かさかさ、という何かがうごめくような音がどこからともなく聞こえてくる。排水溝から虫が飛び出して、一行の前を素早く横切っていった。
鎧のように黒く艶めく扁平状の体、鋭い双眸、カナクイと呼ばれる昆虫型のディクだ。ひゃっ、と怯えるニーナの肩を、リュウは安心させるようにぽん、ぽんと叩いてやった。
ここはディクの巣窟となっている。先ほどから耳に聞こえる不気味な物音も、その源を辿っていけばディクに行き着くだろう。一行の足はおのずと早まった。
T字型になった通路の一方へと進んでいくと、突き当たりの壁に梯子がかかっていた。
ここの工員はもらっぱら階の昇り降りに梯子を使っていたらしいが、リュウは地階にあったもののほかにエレベータはないのかと訊ねてみた。
「それがないから、みんなここをやめちまったのかもね」
冗談っぽく言いながら、リンは梯子をのぼり始めた。
リュウは目のやり場に困る。レオタードのような衣服を着ていながら、彼女はまるで男の視線というのを意識していない。
更に長い尻尾がうねうねと動いて、顔を下に向けていても毛先が

鼻にかかる。これは妨害を目的とした嫌がらせなのか？　と、リュウは盛大にくしゃみをしながら思った。

梯子は三階を抜けて四階まで伸びていた。直線距離にすれば七、八メートルと言ったところか。

リュウとリンにとっては大した移動ではないが、ニーナは小さく息を喘がせて疲れの色を見せている。

近くに小部屋を発見し、一行はそこで休むことにしたが――先客がいた。

バインド・スパイダ。四本の長い肢と頑強な顎を持ち、普段は天井に張り付いている。

部屋へと踏み入った一行は彼らの歓迎を受けたというわけだ。身体の成熟した者から小さな者まで、次から次へと天井から降りてくる。ざっと目にしただけで十匹近くはいた。

肢を小刻みに動かして前進する姿は一見すばしっこく感じられるが、実際はのろい。

リンは慌てることなくハンドガンを抜き出し、構え、マガジンに装填されている弾丸の数だけ銃声を鳴らした。

あまりの爆音に驚いたスパイダたちは、壁の穴から隙間から、文字通り蜘蛛の子を散らして消えていった。リンは一匹たりとも殺すことはなかった。

もしも彼らを全員残さず倒していたら、通路はこの部屋を抜ける以外には広がっていない。自分たち、特にニーナが裸足で血溜まりのなかを歩くことになる。

それを配慮してのことだったのだろう。梯子の件で、彼女は大雑把で細かいことには無頓着な性格かと思っていたが――リュウは少し、感心した。

一行のいるところは工員の休憩室に使われていたらしく、二段ベッドやスチール製の机や椅子などが置かれている。また同じ用途の部屋が道なりに連続しており、一行は二つ目の部屋で足を休めることにした。

何気なく下段ベッドに腰を下ろすリュウ。マガジンに弾を込めているリン。
ニーナは地べたに座り込んでいたが、やがて思いついたように立ち上がると、元来た部屋のほうへぱたぱた走っていってしまった。おとなしく見えて、彼女は好奇心の塊なのだ。
「あの子が何なのか、訊かないのか？　レンジャー」
ハンドガンをホルスターにしまい、ベッドの細い鉄柱に背を預けると、リンがおもむろに話しかけた。
「訊けば教えてくれるのか、犯罪者（トリニティ）？」
本当ならニーナについて訊きたいことは山ほどあるのだが、リュウはとっさに強がってしまった。
「正直なところ……私も詳しくは知らされてないんだ。けど、ね。レンジャー」
リンの目線の先で、ニーナがぼんやりと天井を仰いでいる。
またいつスパイダが現れるか分からない。リンの指先は密かにハンドガンにかかっていた。
「あんたが守ろうとしているこの世界は、それほどまっとうなもんじゃない……」
分かってるさ。そう答えそうになったのを、リュウはぐっとこらえた。相手が同業者ならいざ知らず、敵対者に言われて合意するわけにはいかない。
しかし、彼女はなぜこんなことを言うのだろう？　トリニティとは犯罪者と訳されると同時に、反逆者とも呼ばれる。
元々は政府の人間だった者が、彼らの生み出す不条理に耐えかねて反旗を翻すのだ。ひょっとしたら彼女は、自分と同じレンジャーだったのかもしれない。
「行くよ、ニーナ」
長い沈黙のあと、結局リュウはリンに訊ねることはしなかった。
どうしてトリニティ（反逆者）になったのか。経緯はどうあれ逆賊になった時点で、彼女はＩＤを抹消されているはずだ。

それは社会に居場所がないことを意味するが、あの忌々しいD値という呪いから解放されたとも言える。
自由の身。いや、本当にそうか……？
前を進むリンの背中が、なぜだか急に小さく見えた。

新たに二つ梯子をのぼり、一行は施設の最上階へと降り立った。
施設内を歩いていて気付いたことだが、ここはどうも廃棄物を処理するだけの場所ではないらしい。
フェンスやパーテーションで室内が分割され、空間的にも少し開けた部屋をいくつか通ってきた。そこに入ると決まってニーナが怯えたように腕を掴んでくる。
部屋にはこの世で最も残酷な拷問を受けたとでもいうような、惨たらしいディクの屍が累々と横たわっていたのだ。
死体にはどれも個体識別の番号プレートが付いていたことから、おそらくは実験体だろう。すなわち、この施設は過去にバイオ公社の息がかかっていたということだ。
いや、むしろ下層区周辺でバイオ公社の息がかかっていない施設を探すほうが難しい。日々粗製乱造される新型ディクの？性能？を試すべく、本来は違う目的で作られた施設が得体の知れない実験機関と化す。
この施設もその一つなのだろう。リンは昔ここで厄介になったと言っていたが、元はバイオ公社の社員だったのだろうか？
リュウは絶えず考えをめぐらしていたが、そうやって気を紛らわせていないと、死骸が発する臭気の渦に飲み込まれてしまいそうだった。
さながら悪夢のような部屋を抜け、分厚い鉄扉で蓋をしてしまうと、一行の前に細い十字路が広がっていた。
このまま真っ直ぐに進めば貧民窟に出られるそうだが、しかし。
リュウとリンはさっと身構える。？番人？が立っていたのだ。
ドヴォークゥ。サイクロプスと同じ巨人型の乗用ディクだが、あ

ちらと比べると華奢な体付きで、クリーム色の肌や幅広の耳は愛玩動物として親しまれる？地底ウサギ？を思わせる。
彼らは手と足を鎖で繋がれ、低い壁で仕切られたブースのなかで大人しく立っている。
どうやら野生化していないらしく、リュウは自分たちを物珍しそうに見つめる一つ目に愛嬌すら感じた。
通路の左右に連なるブースは二十近くあったが、残っているのは五体のみ。リンは銃をホルスターにしまい、そのなかの一体の首元を優しくなで始めた。ドヴォークゥはくすぐったそうに身じろぎする。
ディクは本来、人間に尽くすために生み出された人工動物だ。基本的に人間を襲うことはないし、知能が高いために飼い主の顔を死ぬまで覚えている。
先ほど自分が殺したサイクロプスだって、リンとの時間を記憶しているのだ。もちろん、飼い主である彼女も。
どうする。謝るべきか。リンはそもそも自分のディクが死んだことを知らないのかもしれないし、あるいは、それを責めたところでどうにもならないと思っているのだろう。
むしろ別行動を取らせていた自分の責任だと悔やんでいるのかもしれない。しかし、相手は犯罪者（トリニティ）。そして自分は、犯罪者を取り締まるレンジャーだ――ふと、リンがくちびるに指を当てて「しっ！」と静寂をうながした。
フードのなかでぴくりと動く獣耳が物音を聞き取ったらしい。リュウは辺りに視線をめぐらすと、それは通路の先に開けられた穴からのっそりと顔を見せた。
一つ目と目が合う。手足の鎖はすでに断ち切られたあと。野生化したドヴォークゥだ。その右腕には何か肉片らしき物体が大事そうに抱えられている。
ドヴォークゥはリュウたちと仲間の関係を探るようにしばし目を瞬かせたあと、急に雄叫びをあげた。どうやら？敵？だと判断され

たらしい。
リュウはいちはやく剣を握って駆け出す。が、それはリンも同じだった。
通路が狭いために、二人の身体は絡まるようにつっかえた。
「ジャマだよ、レンジャー！」
「あんただって！」
四の五のしている間に、ドヴォークゥは姿勢を低く構えながら突進してくる。
そして左腕を天井すれすれまで掲げ、拳という鉄球をぶん投げるように振り下ろした。
「ぐぉ……っ！」
リュウは真正面から殴打を食らってはるか後方の壁に激突。とっさに剣を構えて衝撃をやわらげたものの、一時的に気を失った。
「ちっ」舌打ちを一つ、リンは壁に向かって走り出した。
「こっちに来な！」
ブースの低い仕切りを踏み台に、リンはドヴォークゥの頭上を飛び越えた。
一発、二発、銃弾を背中に撃ち込むが、ドヴォークゥは怯むどころかいよいよ激昂。身体を反転させるやいなや、めちゃくちゃに左腕を振り回し始めた。
リンが軽やかな動きで拳打をかわす度に、壁や床が砕け散ってゆく。他のドヴォークゥたちは声援とばかりにがなり声を上げていた。
後退していたばかりのリンだったが、やがて意を決したように突入。ドヴォークゥの攻撃をかいくぐり、懐にもぐりこんだ。
そしてふっと地面を蹴り、銃口を顎先に押し当てる。決着だ。
「貫け」
至近距離で放たれた弾丸はドヴォークゥの脳天を貫いた。
操り糸が一本一本切れていく人形のように、ドヴォークゥはふらつき、どっと大きな音を立てて背中から倒れ込んだ。
その胸に抱えていた肉片が血しぶきとともに飛び散り、辺りにほ

のかな腐臭を漂わせる。あれだけ吠え立てていた仲間たちの声もぴたっと止まり、場は一変して静まり返った。
「こいつは、仲間を守ろうとしただけなのかもしれないね……」
リンは誰に語りかけるでもなく、ぽつりと呟いた。ブースに残されたドヴォークゥはみな、鎖に繋がれたまま忘れ去られてしまっているのだろう。
そして戦闘中、我を忘れてもなお、彼が肌身離さず持っていた肉片は、決して迎えに来ることのない主人を待ち続ける仲間のための食料だ。
一旦は鎖に向けた銃を、リンはやがてホルスターに戻した。ここで彼らを解き放ってしまったら、仲間の仇討ちをされるに決まっている。
「行こう。ここは、危ないよ……」
リュウはそっと彼女に声をかける。戦闘の一部始終を見ていたが、あの軽快な身のこなしは獣人にこそなせる芸当だ。
敵に回したらかなり手強いだろう。いや、立場としてはとっくに敵同士なのだった。それを一瞬忘れてしまうほど、彼女を頼もしく感じている自分がいた。
「傷は大丈夫なのか？」
「ああ。全然、痛くないよ」
あんなに強く吹っ飛ばされたのに？　とリンは怪訝そうに眉根を寄せたが、本当に痛くもかゆくもなかった。ニーナに心配な顔をさせているのが申し訳なく思えるぐらいだ。
やがて足早にその場を後にした一行だったが、リュウはとあることに気付いていた。ドヴォークゥの手足についている鉄の輪。それはディクを鎖に繋ぐための物であるのだが、ニーナがはめている輪と形も材質もまったく同じだった。
すると、ニーナは――ここで彼は、考えることをやめた。

（？）究極の破壊者ー後篇ー

岩場に出来た隘路（あいろ）を抜けると、暖かい火の明かりが三人を出迎えた。

鉄くず町。橋の入り口にかけられたアーチには、かすれた文字でそう記されている。

つとリュウの後ろに隠れていたニーナが駆け出した。きょろきょろと辺りを見渡し、ぱたぱたと橋を渡ってゆく。まるで何年かぶりに生まれ故郷に帰ってきたかのような様子だった。

ニーナの進む橋は一段一段の間隔が広く、手すりもつけられていない。梯子を水平に使ったかのような粗末で危なっかしい物だ。

それがいくつも連結されて、町の至るところへ繋がる空中通路になっている。地面まではせいぜい二、三メートルの高さだが、ニーナはガラスだ。

落ちたらひとたまりもないのだが、二人の心配をよそに、彼女は慣れた足取りでどんどん進んでいった。

「あの子、急にどうしたんだろうね……」

リンがつぶやく横で、リュウも同じことを考えていた。

彼女は橋の下に何かを見つけたらしい。覗いてみるに、老婆が幼い男の子と一緒に焚き火を囲んでいる。

一行を出迎えた光の源だ。それが貧民窟全体を温もりある色で満たし、妙に懐かしいような、優しい気持ちにさせてくれる。

二人は橋の上で慎重に足を運びながら、目線でニーナを追った。彼女はスロープを下り、老婆のもとへ駆け寄った。

手振りや身振りで彼女は何事か老婆に訴えかけているが、まったく通じていないようだ。二人がたどり着くと、ニーナはしょぼくれた顔でリュウのところへ帰って来た。

「婆さん、あの子のこと知ってるのか？」

はて、と老婆はリンの問いかけに応えた。

ついで「うーん……」としわがれた喉を鳴らすと、「知ってるような、知らないような……」と小首を傾げた。
「坊やはどうだい？」
近くにいた男の子の反応も芳しくなかった。というより、彼はまだ幼すぎて質問の趣旨さえ理解していないらしかった。
彼らの衣服は煤と塵にまみれ、もう何日と洗われていないのが分かる。まるでボロい布切れを身体のあちこちに貼り付けたかのようだ。
どう？　と訊ねたリュウの視線に、リンは静かにかぶりを振った。リュウの横で、ニーナは膝を抱えていじけている。
「ずうっと前に」
老婆がつと口を開いた。
「あんな子を見たような、気がするんじゃけれど……」
「どっちなんだい、婆さん」
緩慢とした老婆の口調に、リンは苛立ち半分、呆れ半分といった様子だった。
「あっ」
老婆に天啓来たり。
二人は固唾を呑んで、その口が何を語るのかと見守った。
「もうすぐ、炊き出しの時間じゃねぇ……」
はぁ、とリンは踵を返した。
「ダメだ。すっかりもうろくしてるね、あれは」
「でも、ニーナは、あのお婆さんのことを知ってるみたいだったけど？」
「じゃあ、ニーナはここで暮らしてたって言うのかい？　あの姿で？」
リンは目振りでニーナの背中を指す。まるで持ち主の心の有様を示すかのごとく、赤い羽はしゅんとしおれていた。
パチッと焚き火が爆ぜ、大空洞の天井を風が吹き渡る音だけが場を占めてしばらく。リュウがおもむろに口を開いた。

「トリニティ……お前は、ニーナの何を知ってる？」
「さっきも言ったろ。私は、何も知らないって――」
嘘だ、とリュウは彼女の言葉を遮った。
少年らしからぬ迫力に、リンは物怖じしたように顔をそらした。
「急にどうしたんだ？　さっきまでは無関心だったくせに」
「いいから、教えてくれ。お前が知ってる範囲でいいんだ」
リュウの脳裏には先ほどの光景が焼きついていた。
ドヴォークゥとニーナ。どう考えても重なり合わない両者が、？鎖輪？というアイテムで結びついてしまっている。
この共通点が意味することは何だ？　考えるだに恐ろしくて、リュウは何でもいいから答えが欲しかった。
「ニーナが何者であるか、本当に私は何も知らないし、聞かされてもいない……。けど、私の推測を話すことは出来るよ」
すかさず詰め寄ろうとしたリュウを、リンは片手で制した。
「初めに言ったね。ただ生きてるだけなら、知らないほうが幸せなこともある、と……。
彼女の真実を知ったところで、お前に何が出来る？　レンジャー、これは感情や興味本位でどうにか出来る問題じゃないんだよ」
「なら、お前たちはどうするつもりなんだ。ニーナに何をさせようって？　世界を変える？　こんな小さな子に、何を背負わせる気なんだ」
「しょうがないね……」リンはホルスターに手を伸ばす。
「ここで決着をつけるかい？　レンジャー」
リュウは剣の鍔を鳴らしてそれに答えた。途端に周囲の空気が張り詰める。
そしてリュウは先手を打とうとしたが――ふっと、リンの口元がほころんだ。
「あんた、しょうもないバカだよ。本当にこんなところで戦おうと？」
「そっちが言ったんだろ」

「冗談だよ。今はね」
言って、彼女はスロープに向かい歩き出した。
「この先はリフトポートだ。歩いて十分とかからないだろう。あそこなら誰もいないだろうし、私たちの同盟もそこまでだ……」
彼女の言葉は、リフトポートへ着くまでに答えを出せということを意味していた。
「これは私の任務なんだ。彼女を組織へ送り届ける……。ジャマする気なら、容赦しないよ」
ガシン！　と、彼女はハンドガンの撃鉄を引いてみせた。その目は刃のような鋭さを帯びている。
本気だ。彼女は必要となったら、間違いなく自分を撃ち殺すだろう。
ドヴォークゥに、人間の下僕であるディクに、あんなに優しい顔が出来る彼女も、感情に流されるほど愚かではない。
ゼノ隊長と何となく似ている気がする。何か巨大な責任や義務の前に、ひたすら感情を押し殺しているような迷いの光。
それが彼女の青い瞳のなかにも感じ取れる。いや、もっと頻繁に、ごく身近なところで見かけてはいなかったか？
鏡だ。毎朝、あの洗面鏡のなかに見る自分自身だ。寝て、起きて、仕事をして。それを繰り返すうちに、どんどん感情をなくして。
リンも、ゼノ隊長も、こんな気持ちで生きていたのか？　こんなにもみじめな気持ちは、D値の低い自分だけが抱えていたものじゃなかったのか？
リュウはニーナを呼んだ。町に飛び交う地底トンボを目で追いかけていた彼女は、ぱたぱたと彼の元へとやってきて、手を差し伸べると、ごく当たり前のようにそれを受け取った。
出逢って一日と経っていないのに、彼女は心を開いてくれている。それは自分が命の恩人だからだろうし、人を疑い抜くには彼女はまだ幼すぎるからだ。人の、世界の非情さを知らないのだ。
ニーナの手を握っていると、不思議と心が落ち着いた。スロープ

をのぼって、一行はリフトポートへと続く通路の入り口に差しかかる。
考えろ。いま自分の気持ちと向き合って、自分で答えを出すのだ。
手遅れになる前に。

リフトポートは静寂に包まれていた。
係員の姿も、停車しているリフトもない。電灯にたかる羽虫だけがじりじりと音を立てている。
「さて、答えを聞かせてもらおうか」
同盟終了。リュウに用意されている答えは三つ。
自分の手でニーナを守るか、リンの仲間になるか、あるいは、この手を離すか。
リンが彼に奨めているのは第三の選択肢。自分たちと出会ったことは忘れて、元の日常に戻る。賢明な選択だ。
リュウはちらとニーナを、ついでリンの顔を見た。彼女の指先はかすかにハンドガンに触れている。不意打ちに備えているのだろうか、隙のない奴だ。
いずれにしろ、リュウの心は決まっていた。あとはそれを口にして、行動にすればいいだけのことだ。
「おれは――」
突如として、トンネルの奥からリフトの警笛が突風のようにホームを横切っていった。
フロントライトの閃光にリュウの目が眩む。口にしようとしていた言葉は遮られた。
たっ、たっ、たっ……ブーツの乾いた音が聞こえる。眩い逆光のなかに立っていたのは、彼だった。
「ボッシュ……！」
リュウは思わず歓喜の声を上げ、彼に駆け寄った。
「ボッシュも無事だったんだ！」
しかし、とうの本人はリュウの横を冷たく通り過ぎていった。あ

たかもリュウの姿が見えていないかのように。
ボッシュの双眸はただ一点、ニーナに向けられていた。
「トリニティが一緒か……こいつで間違いなさそうだ。上出来だよ、リュウ」
一瞬、ボッシュとリンの間で視線の鍔競り合いが起こる。
抜き身にしたレイピアを右手に持ち、じりじりと、彼の足取りは高慢という名の使い魔でも引き連れているかのようだった。
「ま、待ってよ、ボッシュ！　ニーナがどうかした……！？　話を聞かせてよ」
「命令は……積荷の、確実な処分だ。それ以上のことを、おまえが知る必要はない」
すると、リュウはボッシュの前に毅然（きぜん）と立ちはだかった。
「ジャマする気か……？」
「違う、ちゃんと説明してくれ！　積荷？　処分……？　なんだよ、それ！？」
予感はあった。ニーナが、考えたくもないが？積荷？であるかもしれないということは。
赤い羽が生えた女の子を見たことがあるか。ディクにはめるものと同じ鎖輪がつけられた人間を見たことがあるか。
ない。彼女がごく普通の人間であるということの証明を、リュウは一切持ち合わせていないのだ。
あるのはただ、ニーナを守りたい。その気持ちだけだ。
「リュウ……俺は、な……」
鋭く、そしてひどく残酷な痛みが右足に走った。何が起こったのか分からなかった。
見れば、レイピアの切っ先が自分の右足を貫通している。刺した？　ボッシュが、おれを？
「ボッシュ、何を……？」
ボッシュは手元をねじり、更に痛みを加えた。うめき声が口からこぼれ、リュウは思わずひざまづいた。

「俺は、こんなところでつまづいてるわけには……いかないんだよ」
とっさにリンがハンドガンを構え、トリガーを引こうとした。が、それはボッシュの後方から発射された弾丸に弾かれ、彼女は丸腰になってしまった。
リフトから新たに二名のレンジャーが降り立ち、速やかに二人を取り押さえに向かう。
ニーナは慌ててリュウの下へ駆け寄り、彼の両肩をしっかりと掴んだ。
「ふん、ずいぶんとなついてるじゃないか……」
あざけるように言い、ボッシュはリュウの右足から引き抜いた刃の先端を、ニーナの首筋に当てた。
切っ先から赤いしずくがこぼれ落ち、ニーナのほっそりとした胸元を伝って白いベールに染みを作ってゆく。
液体の不気味な感触と、いつ殺されてしまうか分からない恐怖に、ニーナのか細い肢体はふるえていた。
「やめろ……ボッシュ……」
彼の反抗心に満ちた眼差しに、ボッシュはいささか驚いたようだった。
「リュウ、お前……」
ボッシュはちらりと刃の切っ先を宙に泳がせ――おもむろに、リュウの喉元を突き刺した。
呼吸が途絶える。喉の奥で生温かい痛みがあふれ、リュウのなかのすべての時間が氷結してゆく。
「リュウ……俺の道を、阻むな……」
機械のように無感情なボッシュの顔が、真っ赤な視界のなかでぐらぐらと形を失っていった。
おれは、ここで死ぬのか……？
よどみきった闇がどっぷりと渦巻く底なし沼に、あがくのも虚しく意識が沈む。
声が聞こえた。あの、凶悪で、すべての抵抗を徒労に変える強大

な力を持った声が。

？おまえを選んでやる？

ふっと、身体の内側で小さな太陽が生まれた。

それは焔（ほのお）の翼を広げてリュウの手を、足を、心を、一瞬のうちに焼き尽くしていった。

やがて真っ黒にこげた皮膚をびっしりと赤い鱗が覆い、劫火（ごうか）に研がれた爪は何者をも切り裂く刃となり、頭からは角が生え、髪は燃え朽ちて灰のような白銀へと色を変えた。

「リュウ……？」

ボッシュの問いかけに答える少年は、もうどこにもいない。

あるのはただ、鮮紅色の火の粉をまとった禍々しい人外の姿。それだけが、間違いなく彼の目の前にあった。

（？）世界を統べるもの ―前篇―

六歳ぐらいの男の子だった。
任務からレンジャー宿舎の自室に帰る途中、ふと路上で声をかけられた。
『いいな、おにいちゃん。ぼくもれんじゃーになりたいな』
そう無邪気に言う男の子の目はきらきらと輝いていた。
『ねぇ、ぼく、でぃーち１／４０９６なんだけど……れんじゃーになれるかな？』
やや答えに迷った末、彼は答えた。
『なれるよ。君は、おれよりずっとすごいレンジャーになれる』
わぁー、と言って、男の子は顔いっぱいに晴れやかな笑みを浮かべた。とても印象的な笑顔だった。
仕事の実態を知った途端に嫌になる職業だが、幼い子供、特に男の子にとって怪物から街を守るレンジャーはヒーローであり、憧れの的だった。
銃や魔法杖、なかには拳一つと、レンジャーの戦い方は各々の個性が色濃く反映されるために多種多様である。
そのなかでもとりわけ子供たちから人気があるのは剣士だった。男の子が声をかけてきたのも、リュウの腰に剣がぶら下がっているのが見えたからだろう。
銃にも魔法にも適正がなく、身体的にも取り立てて目を見張るところがなかったリュウにとって、唯一レンジャーとして戦うために残された武器が剣だった。
たったそれだけの理由で一躍ヒーロー扱いされるのは照れくさかったものの、この日ほど『レンジャーになってよかった』と思った日はなかった。
そんなある種の優越感が彼を深すぎる眠りへといざなってしまったのかもしれない。その日の夜に鳴らされた敵襲警報に彼は気付か

なかった。
すべてを翌朝に知った。数匹の邪公が破損したライフラインの隙間から居住区へと侵入してきたこと。巡回任務中のレンジャーがバイオ公社製の酒を飲んでいたこと。
路上生活者のなかから若干数の死傷者が出てしまったこと。そのなかの一人に、あの男の子がいたこと。
リュウは自分を呪った。街を守るためのレンジャーが、あろうことか事件の瞬間に眠りこけていたのだ。
アナウンスを知らせる部屋のスピーカーが壊れていたせいもあるかもしれない。そもそも、ローディだから、働く力がないからと、彼らに家を与えてやらなかった政府のせいかもしれない。
あるいは、酒に酔って警備を怠っていたレンジャーが――原因を挙げればきりがなかった。強いて言うなら、そう。男の子は世界に殺されたのだ。そして、自分は無力だった。
ニーナと手を繋いでいるとき、リュウはあの男の子のことを思い出していた。心が焼け切れそうになるほどの罪悪感とともに。
だから、思った。ニーナを守ろう。それで世界に居場所を失ったって構わない。もしも彼女の手を離してしまったら、自分の心までも一緒に離してしまう気がする。
生きろ。自分の心に従って――しかし、？いまの彼？は、自分から望んでその姿になっているのではなかった。彼自身の心、自我、感覚さえもとうになかった。
竜人。異形。血溜まりのような真紅の双眸（そうぼう）。彼にはもはや破壊に対する飽くなき欲求しか残されていないようだった。
そして彼は欲望を満足させるに必要な力をすべて備えている。爪、牙、角。あとは破壊対象を見つければいいだけだが、いた。目の前に。
その腕（かいな）がゆらりと、鮮紅色の火の粉を連れて振り上げられる。音はしなかった。しかし、ボッシュの身体は数十メートル後ろの壁に叩きつけられていた。

もうぐったりとしてしまっている。なんて脆弱なのだろう。
チクっと、何かが背中を刺した。銃弾だ。
破壊対象の一つが言葉にならない絶叫を上げながら何発と銃弾を撃ち込んでくる。
弾丸は胸を貫くこともなく、ただ弾かれて彼の足元にその数を増やしていくばかりだった。
カチ、カチ、トリガーの空転音がむなしくこだまする。彼の姿がふっと虚空に消えると、男の身体からぶしゃっと血液が弾けた。まるで水風船が割れるかのように。
これで二つ目。破壊対象は三つあったはずだが、近くにいない。
男の心臓を深々と突き刺していた右腕を引き抜き、彼はおもむろに振り返った。
見つけた。破壊対象は尻尾を巻いて逃げようとしている。彼は雄叫びを上げながら、頬が裂けんばかりに口を広げた。
怒れる彼の咆哮が劫火となって男を呑みこむ。後には大きな焼却痕と、悲鳴の余韻だけが淡々と静寂を舞っていた。
これで完了。いや、本当にそうか？
この羽の生えた子供は？　長い尻尾を垂らす女は？
駄目だ。壊してはいけない。なぜ駄目なのか？　分からない、分からない……。
混乱をきたした彼の意識は、やがてぷっつりと途切れた。

＊　＊　＊　＊

煌々と、ほの赤い光が揺らいでいる。壁のくぼみに幾本と配された蝋燭の火だ。
「この時期に召集とはな……」
「いずれにせよ、早すぎる」
石造りの聖堂に、二つの低い声が厳かな響きを立てる。
「その時が来るのは確かなこと……それがいつかを決めるのは、僕

たちじゃありません……」
　ほっそりとしたシルエットがちらりと横を向いて、幼い子供の声で喋った。その手は丸みを帯びた流線形を――膝の上に置いた小動物の背をゆっくりと撫でている。
　ぱち、ぱちぱち。青白い光の球が忽然と虚空に現れて、小さな稲妻を散らしてゆく。
　まばゆい閃光がストロボのように空間を照らし、三人の男と、一人の子供、そして瞳を閉じた女の姿とを映し出した。
　統治者（メンバー）。気まぐれに分散していた光はやがて一点へと収束していき、消えると同時に一つの人型を生み出した。
　刀傷のような線が縦に入った赤い瞳。その片方は白銀色の前髪に隠れて見えず、耳の付け根から生えた一対の角が髪留めのように頭を横断している。
　世界を統べる者たちの頂点、エリュオン。彼の登場を持って、統治者たちは集団としての完成を見る。
「？竜（ドラゴン）？が……現れた……」
　白と黒の大理石で出来た床に硬い足音を響かせながら、彼は第一声を発した。
「ドラゴンが……！？」
「そう、古の超兵器……我らが、対となるもの。世界を滅ぼすもの。公社からの報告では……起動したのは、すでに活動を終えた個体らしい」
「再起動、だと？　適格者は、すでに滅んだはず……」
「定かではないが、サード・レンジャーに過ぎない、リュウという少年が……ドラゴンとのリンクを保持している可能性が、ある」
「サード・レンジャー……？」鳴らされた鐘のような、気高く、静（せい）謐（ひつ）な女の声が二人の会話に割って入った。
「そのような能力の低い者では……適格者とは、なり得ません。これは？事故？でしょう」
　胸の前で祈りを捧げていた手がゆっくりと離れて、その片方が掌

のうえに球を作った。真円のなかで闇色が、時空が、どくどくと渦を巻き始める。
「その者が世界を混乱へと導く前に……私が、空間の断層へと封じましょう」
「まだ」エリュオンは静かにかぶりを振る。
「我々が動くときではない。人のことは、人に……。いまは、上級のレンジャーに確認を命じてある」
そう言葉を残して足早に場を去ろうとした彼の背を、左目に眼帯をつけた男が呼び止める。
残された片目は疑念の光に満ちていた。
「息絶えたはずの超兵器……、滅んだはずの適格者……。エリュオン。貴様、一体何をした……？」
エリュオンはつと足を止め、おもむろに天井を仰いだ。幾層ものステンドグラスが張られた天窓の向こうに、人工太陽の真っ白な輝きが見える。
中央省庁区。すべての都市の、人々のうえに存在する場所。彼ら統治者は、この世で最も空に近い場所にいた。
「デモネド、あの少年は実に凡庸だ……。しかし、読まれぬ歴史こそが、真実のときもある……すべてはこれからだ」
蝋燭の火は、ただ煌々と燃えていた。

＊　＊　＊　＊

霧のようにかすむ視界のなかで、大きな黒い眼が二つ。
見覚えのある顔だ。どことなく物憂いしげで、儚くて。
「ニーナ！？」
リュウは急発進したリフトのように慌てて飛び起きた。
ボッシュは？　敵は？　辺りをきょろきょろと見回すリュウの目に、白熱灯の光が眩しく突き刺さる。
ここはどこだ。リフトポートじゃない……。

つと、素早い足音が背後から近づいてくる。リンだ。
「お前は何だ……！？　普通のレンジャーじゃないのか……！？」
「な、何を言ってる？」状況が掴めずに呆然とするリュウの肩を、リンは激しく揺さぶった。
「ボッシュたちはどうした！？　積荷？　処分？　トリニティ、お前は何を知ってるんだ。答えろ！」
「知ってどうする？　さっきみたいに……得体の知れない力を使って、どうにかしようとでも？」
「うるさい！」
リュウは荒々しくリンの手を振り払う。自分の置かれた状況が分からず、一種のパニック状態に陥っていた。
掌を見てみる。剣を持つ利き手は皮の手袋をつけ、左手は素のまま。返り血でニーナの手を汚すまいと思ったからだ。
どこにも何も異常はない。ブーツも履いていればニット風の胴着（インナー）も着ている。これは間違いなく自分の身体だ。
それなのに、この、他人の布団を使っているような、ぴりぴりとした違和感は何なのだろう。解消しようのない不安に駆られて、リュウの苛立ちは増幅するばかりだった。
「ううー……、んー、んん」
顔を突きつけていがみ合う二人を見て、ニーナがふるふると首を振った。
やめて、ケンカしないで、と言っているのだろう。が、リュウもリンも強情で、お前のことなんか知るか！　とでも言わんばかりに、お互いぶっちがいに顔をそむけた。
ほとぼりがさめるまでには、それから数分の時間を要した。
今いる場所はリフトポートの貨物庫。話を聞くに、リンが意識を失った自分をここまで運んでくれたらしかった。
昨日うなされた悪夢の内容を細かく説明していくような顔つきで、粛々と語るリンの声に耳を傾けているうちに――徐々に記憶がよみがえり始めた。

映像の断片。感触の切れ端。血だ。悲鳴だ。
戦慄が身体を突き抜けた。これは、本当に、自分がやったことなのか……？
今さら、リュウは胴震いするほどの恐怖を覚えた。
「――いきさつはざっとこんな感じだけど、本当に分からないのか？」
リンはコンテナのうえに座っているリュウを見やった。
「ああ……あの力のことは、何も分からない……」
ただ、と付け加えて、彼は自分の両掌を見た。それは麻痺をきたしたかのように震えていた。
「頭のなかで声が聞こえて、気がついたら……。とても、怖かった……。自分が、人ではなくなっていくみたいで……」
そっと、ニーナが手を置いた。恐怖に凍えていく心が、ほんの少しだけ温められる。
ニーナは優しく、頭の賢い子だ。つい先ほどもそうだったが、彼女は自分がどのような行動を取ればよいか分かっている。
「分からないことがまた一つ増えた、って感じだね。ニーナといい、あんたの謎の力といい……。まぁ、私が一番不思議に感じているのは」
「なに？」
「あんたの服がどこも破けてないってことさ」
リュウはぽかんと口を開けて、やがて小さく笑った。
「笑うところか？　私が見た限り、あんたの身体は一瞬にして生まれ変わったんだ。得体の知れない？バケモノ？の身体にね。それなのに、今じゃすっかり元通り。不思議に思わないほうがおかしい」
「それは、そうだけど……一番不思議に思ってることが、服のことだなんて、ちょっとおかしくて」
「まぁ、裸のお前さんを担ぐことにならなくて、よかったとは思っ

てるけどね……」
リュウは心ひそかに安堵していた。自分はまだ笑っていられる、人間らしくいられる。バケモノなんかでは決してないのだ。
再び前に進む気力を得たリュウは、ニーナの手を引いておもむろに立ち上がった。
「どこへ行くつもりだい？」
「このままじっとしていてもラチがあかない……おれは、ニーナのことを知りたいんだ」
「行く当てはあるのか？」
そう問われると、リュウは口ごもった。
「バイオ公社のラボ……あそこなら、何か手がかりが掴めるだろう」
それまで背を預けていたコンクリート壁から離れ、リンはゆっくりと歩み寄っていった。
「トリニティ、お前までついてくるつもりか？」
「その子の正体を知りたいって目的は、同じだろう？」
リンの口元が静かにほころぶ。「手を結ぼう、リュウ」
しばらくしてから、彼は答えた。
「分かったよ……リン」

（？）世界を統べるもの ―後篇―

整備用のエレベータを使い、一行は下層区街を目指した。
バイオ公社のラボへは、街にある専用通路を使わなければ入れないからだ。
一行の前に景色が開かれる。赤土の地面が風で巻き上げられ、あの嘘っぽい空の輝きが暗闇に慣れた目に突き刺さる。
ここは街の中央区にあるエレベータポート。
今朝方食堂の行き帰りに見かけたときは故障中だったのだが、ゲート付近でたむろしている作業員たちが復旧させてくれたらしかった。
「変わらないね、ここは……」
歩きながら、リンが横でぼそりとつぶやいた。
「リンも、前はこの街に……？」
「さぁ、どうだろうね」
くすっと、リンは冗談っぽく微笑んだ。
一行は何食わぬ顔で作業員たちの横を通り過ぎたが、ふと呼び止められた。
リュウはどきっとする。自分たちはすでに？お尋ね者？になっているかもしれないからだ。
「エレベータ、ちゃんと直ってただろ？」
「あ、ああ……助かったよ」
ふっふん、と、作業用マスクで顔を覆った男は、得意げに鼻を鳴らした。
リュウは冷や汗を拭う。いつも見慣れた街が、人が、牙を隠し持った獣のように見える。
彼らの足取りはおのずと早まった。
「ところで、リュウ。一つ寄りたい場所があるんだが」
「なに？」

「ついでに金も出してくれると助かるね。ニーナに靴を買ってやりたいんだ」
「え？　でも」急がなくちゃ、と続けようとしたリュウを、リンは手で制した。
「さすがにいつまでも裸足じゃ、可哀想だろ？　私がひとっ走り買ってくる。あんたたちは先に行ってな。場所は分かってる」
ニーナの白い足は煤や埃で汚れてしまっている。この先も長い道のりを踏破していくことを考えれば、多少の危険を冒してでも手に入れておくべきかもしれない。
いつか彼女がガラス片なり踏んづけて、そのいたいけな足に痛々しい傷がつくところなど見たくないのだ。
リュウが財布に入っていた札のすべてを渡すと、リンはぽんっとニーナの頭に手を置いた。
「あんたに一番似合う色を見つけてきてやるからね」
そして塀の向こうを一瞥、レンジャーらしき者がいないことを確認すると、リンは足早に通りを突っ切って行った。
少し遅れて、リュウもニーナの手を引いて歩き出す。広場の中央には、何台もの液晶モニターがつけられた通称テレビ塔が立っている。
モニター各個が違う映像を流し、腰の折れた老人がぼんやりとそれらを見上げていた。物珍しさにニーナも足を止めたが、リュウが手を引っ張ると慌てて歩き出した。
町民のほとんどは労働者。いまの時間帯は仕事のピークで、人通りは少なかった。
それでも人目を避けるために、リュウは細く入り組んだ裏路地を進むことにした。子供の頃によく他のレンジャー候補生たちと鬼ごっこやかくれんぼをして遊んだ。
路の窮屈さや、薄汚れた鉄レンガ塀の質感、近くで換気扇が回る音と、その振動。排水溝からは泥とカビの悪臭がうすら立ち昇り、リュウの五感はそれらを鮮明に記憶していた。

バイオ公社ラボの専用通路は表通りの目立つ場所にある。いつも警備員が一人門前に立っていて、友人たちとともに物陰から忍び込む機会をうかがっていたものだった。
あのトンネルの真っ暗な入り口は、挑むべきこの世の謎として子供たちの冒険心をくすぐり続けてきたのだ。あれから十年近くが経って、まさか自分がその謎にトライすることになるとは思ってもみなかった。
幼い女の子を連れて、世界中から追われる身になって。手前勝手な考えだとは承知しつつ、ボッシュには無事であって欲しいと思うし、ゼノには恩を仇で返すことになって申し訳なく思う。
しかし、いつだって退屈な未来を予想していた彼は、いま巨大な使命感を胸に抱え、高揚していた。

一本の狭い路が伸びている。ここを抜ければ専用通路の真ん前だ。
しかし、おかしい。先ほどから喉がひりひりと痛む。いくら環境汚染が深刻な下層区といえど、身体に不調が出ることはなかった。
ニーナが二、三度咳き込む。「大丈夫？」と背中をさすっていると、やがて街全域にアナウンスの大音声（だいおんじょう）が響き渡った。
『警戒レベル４ノ空気汚染ガ発生。該当ブロックヲ閉鎖シマス』
一体何が起きたんだ？　答えを探る間もなく、新たな問題がリュウの前に立ちはだかった。
狭い抜け道の出入り口に、つとガスマスクをつけた作業員風の男が現れた。彼はトランシーバーに何事か吹き込むと、やにわに銃を構えた。
「ニーナ！」
彼女の手を取って走り出すのと同時に、高らかな銃声が空を切り裂く。
放たれた弾丸は通路脇のコンテナに当たり、一発はリュウの左頬をかすめた。
リュウは物陰に飛び込む。が、目の前には新たな追っ手の姿があ

った。挟み撃ちにされたらしい。
相手が体勢を取る前にリュウは地面を蹴り――袈裟がけに剣を振り下ろす。
それはポリカーボネート製の透明な盾に防がれたが、リュウは強引にもう一撃。男は胸を斜めに斬り裂かれ、赤い血がパッと虚空に花を散らせた。
ディクとは違う生身の人間の感触。初めてだ。初めて人を斬った。しかし、一瞬の気の迷いが命取りとなった。
「ぐっ！」
右の太ももに激痛が走る。後ろから銃弾を撃ち込まれたのだ。
何とか立ち上がらねばと力を振り絞るが、身体が言うことを聞いてくれない。敵はゆっくりと近づいてくる。
不意に、物陰に隠れていたニーナが飛び出した。その手には木製の魔法杖（ウォンド）が握り締められている。今しがた倒した敵が装備していた物だ。
ニーナは果敢にも敵を真正面に据え、ウォンドをくるくると旋回させながら振り上げた。すると敵の頭上にほの白い冷気が収束、鋭い氷柱となって相手を押しつぶした。
レイガ。空気中の水分を一瞬間に凝結させ、対象に撃ち出す攻撃魔法だ。
「ニーナ、君、魔法が……？」
驚くあまり、リュウは傷の痛みなど忘れてしまっていた。
敵は砕けた氷塊のなかで意気消沈している。だが、死んではいないだろう。
リュウの知る限り、レイガは攻撃魔法のなかでも低級に位置し、威力としてはそこまで高くない。敵が意識を取り戻す前に逃げるのが得策だ。
自分が役に立つことが出来てどこか得意げな彼女の手を取り、リュウは足早にその場を去った。傷がちくりとうずいたが、なぜか急速に痛みが消えてゆく。

見てみるに、傷口が塞がっていた。あれほど生々しい血を流していた穴が、すっかり元の肌色を取り戻している。？再生？した……？
ともすれば背筋が凍るような恐ろしい出来事ではあるが、この非常事態。リュウはひとまず考えないことにした。

来た道を半ばまで引き返してくると、リュウは思わず手で口を覆った。紫色がかった霧が路地に垂れ込めている。
間違いない。これは？ガス？だ。リフト道のディク掃討作戦の際にも使用された神経ガス。
霧の濃度は広場に近づくにつれてより深みを増している。目から涙があふれ、腹から湧き上がる強烈な吐き気をこらえながら、リュウは最後の道を一気に駆け抜けた。
通りを出たところで、ニーナの足がもつれる。慌てて抱き起こしてみるに、彼女の額にどっと冷や汗がにじみ、呼吸は荒い。かなり辛そうだ。
と、リュウは人の気配を察した。ガスマスクをつけた一人のレンジャーが悠々とこちらに歩いてくる。その後ろには彼と同じ出で立ちのレンジャーが二人、どうやら自分を待ち伏せていたらしかった。
「よう、サード。お前がリュウだろ……？」
「一体、何をした……？」
ふん、と鼻で笑って、男は顎で後ろを指した。彼の仲間は物見遊山といった風情で、横たえたガスボンベのうえに座っている。街中の空気を汚すものの正体だ。
「お前、ローディのわりに強いって聞いたもんでね……用心ってやつだよ」
「そんなことで、ガスを……ゼノ隊長の命令か？」
「いや？　あの女は会議だとかで席を外していてね……、なら、好き勝手やらしてもらおうってワケさ」
強い怒りを覚えたリュウだったが、思うように力が入らない。何か強大な重力に押さえつけられているかのようだ。

しかし、何とかしてこの毒ガスを止めなければ。テレビ塔の近くでは、先ほど見かけた老人が苦しそうにもがいている。ニーナも同じだ。

不意に、彼は通りの向こうにリンの姿を認めた。緩やかにカーブする通りを、こちらに向かい走って来ている。

リュウは何事かニーナに耳打ちすると、その背中を強く押し出した。いつものように優しく促してやる余裕がないほど事態は切迫している。

「走れ、ニーナ！」

怒号を上げるとともに、リュウは剣を抜いて男の脇腹を突き刺した。

飛びかかった勢いのまま馬乗りとなったリュウは、一発、二発、拳で男の脳みそを大きく揺さぶった。

しかし、敵は彼だけではない。男の仲間が銃を構え、その一つはニーナに向けられている。

リュウは射線のうえに飛び込み、寸でのところで銃弾をさばいて見せた。銀色に輝く刀身は、真っ赤に燃え盛る彼の瞳を映している。

突風のように鮮紅色のオーラがほとばしり、彼は剣を振り上げながら急加速。光の軌跡を残しながら一直線に突き進む姿はあたかも弾丸のようだった。

敵の一人はあられもない声をあげながら無様な死に体をさらし、残るは大男。身の丈二メートルに迫ろうかというその巨漢は、右手に戦斧のように大きい十字剣を握っていた。

しかし、サイクロプスさえも赤子扱いにしたリュウの敵ではない。一、二度斬り結ぶと、大男はがっくりと体勢を崩した。

好機（チャンス）！　しかし、追撃を仕掛けんとするリュウの意思とは裏腹に、足が動かない。急速に力が抜けて、リュウはがくっと片膝をついた。

敵がこの隙を見逃すわけがなかった。リュウは一転して劣勢に追い込まれ、一度ならず二度、三度ならず四度、高所から繰り出される攻撃を寸でのところでしのいだ。

やがて顎先に蹴りを食らい、リュウは赤土の地面を成すすべもなく転がってゆく。数秒間のうちに傷を治してしまう再生能力も、内側から命を蝕む毒霧に対しては効果がないようだった。
彼の瞳からは真紅の輝きが消え、その呼気さえも途絶えようとしていたが――しかし、彼は立ち上がった。ゆらゆらと、蜃気楼のように。
「どうしてだ……」
リュウの言葉に気を取られ、敵はぴしゃりと足を止めた。
「おれだけに用があるのなら、街の人を巻き込む必要はないはずだろ……」
「死んだところで……ローディじゃないか。悲しむ奴なんざいねーよ」
言って、大男は高らかに笑った。聞いていて吐き気を催すような下品な声だ。
リュウの額に血管が浮きあがる。柄を握る手に力がこもる。理性はとうに吹き飛んでいた。
「それが……それが、人間のやることかよ！」
穿刺（せんし）一閃。男の胴体に刃の切っ先よりもはるかに口径の大きい穴がうがたれ、その巨体は弾かれたビー玉のように飛び出していった。
攻撃の瞬間、リュウの身体には鮮紅色のオーラがよみがえっていた。砲弾でも食らったかのような穴が男の胴体に開いたのは、オーラの力が刃を通して爆発を起こしたからだ。
ひとまず、敵は片付けた。あとはガスボンベの噴出孔を塞ぐだけだ。
しかし、ガスボンベにはあるべき物がない。ハンドルだ。栓の開閉をするハンドル。
リュウはとっさに振り返る。初めに倒した男が、見せびらかすようにハンドルをかかげていた。
「ざまぁ……みやがれ……」
男の腕がぱったりと地面に落ちる。

リュウも限界だった。意識が混濁し、呼吸もままならない。
乾いた音を立てて、彼は地面に倒れ込んだ。闇に覆われていく視界の先に、リンとニーナの姿が見える。
そうだ。そのまま安全なところまで逃げろ――リュウの意識は、そこで途切れた。

「ニーナ！？」
リンの手を振り払い、ニーナは走り出した。
リュウのところへ向かう気だ。しかし、今さら何が出来る？
慌てて彼女を引きとめようとしたリンだったが、その足は止まった。
あまりにも深い霧に臆したのではない。思い出したのだ。ニーナには特別な力があることを。
ニーナは小さな足を引きずるように、ときにはつまづきながら、そのたびに立ち上がってリュウの下へたどり着いた。
彼の瞳は固く閉ざされている。まるで死人の顔つきだ。
ニーナは嗚咽をもらすように数回咳き込んだあと、胸の前でそっと両手を組んだ。
彼女の想いに呼応するかのように、赤い羽がはためき、白い光の粒子が放たれ始める。
光は加速度的に強さを増し、やがて巨大な柱となって天空に打ち上げられた。
紫色の霧が晴れてゆく。汚れた空気が浄化されてゆく。そして光が消失するとともに、彼女は意識を失った。
リンは二人の下へ駆けていった。リーダーの言っていた、？大気汚染改善プログラム？という言葉を思い出しながら。

（？）小さな旅立ち－前篇－

「一体、何が……起こったんだ？」
「分からない。ただ、言えるのは……ニーナが飛び込んで行ったら、ガスが中和されて、二人とも無事で済んだってことだ」
「ニーナが……？」
ちらりと、リュウの視線が傍らに向く。
良い子でしょ？　と胸を張るような、ウォンドを手に持ったニーナの姿がそこにあった。
街は沈黙に包まれている。あたかも昼に夜が来たというような、寝息が聞こえてきそうな静寂。
気を失ってから十分と経っていないらしかった。テレビ塔の近くで倒れていた老人が、階段のふもとで女が、路上で子供が、顔に赤土をつけて起き上がった。
どうやら大事には至っていないようだ。リュウはほっと胸をなでおろすとともに、危機感を覚えた。
またいつ新たな追っ手が現れるか分からない、街がまだ寝惚け眼でいるうちに次の行動を取ったほうが良いだろう。
その意思が目線を通してリンに伝わると、一行は足早に広場を後にした。

＊　＊　＊　＊

バイオ公社ラボの専用通路には、難なく入り込むことが出来た。
毒ガスにやられて警備員が倒れていたからだ。ついでにリンがそのポケットから『カードキー』をくすねておいた。
「災い転じて何とやら、だね」
冗談を言いつつ、リンは入り口の認証装置にカードキーを読み込ませた。

セキュリティハッチの内側でロックが外れる音がし、薄ひんやりとした廊下が目の前に開けた。
暗がりの向こうから科学薬品の匂いが漂ってくるだけで、社員や警備員の姿はない。壁や床の構造は、廃棄ディク処理施設に至るアプローチ道とほぼ同一。この廃墟を思わせる静けさもだ。
リュウはまた例の不可解な白昼夢のなかを歩いているのではないかと、しきりに頬をつねった。先を行くリンの足音は聞こえる。後ろをついてくる、ひたひたというニーナの足音もちゃんと――いや、止まった。
その代わりに、けほけほ、けほけほ、ニーナは二度三度、大きく咳き込んだ。
「大丈夫？」
リュウはとっさに彼女の肩を支えた。
しかし、咳は収まるどころか勢いを増し、ニーナはとうとう座り込んでしまった。
「少し、休ませた方がよさそうだね……」
リンの提案に同意し、一行は近くに見つけた小部屋のなかへと入って行った。
何らかの培養装置と思しき台座付きのカプセルが中央を領し、マス目の細かい銅造りのタイル床には薬品の瓶やガラス片が散乱している。
常人にはなはだ用途不明なものばかりだったが、部屋の有様からして長らく使われていないことは分かった。
そのなめらかな素足が傷つくことがないように、リュウは慎重にニーナを歩かせ、浅黒い粒子を散らす赤い羽を壁に寝かせた。
咳の合間に、ヒュー、ヒューと、肺が悲鳴を上げているような音が口の端からこぼれる。さぞ苦しくてたまらないだろうに、心配をかけまいと作られるニーナの笑顔が何とも痛々しかった。
つとリンに肩先を叩かれ、リュウは彼女とともに戸口の先まで歩いていった。蝶番の壊れた扉が小さく軋む。

「リュウ、気付いたか？」
「ああ……ニーナの羽が、汚れてる」
リュウの見やる先で、ニーナが強く咳き込んでいる。そのうち血を吐き出すのではないかと不安になるほどだ。
「さっきも言ったように、ニーナが毒ガスを浄化したんだ。何をしたのか分からないけど……あの子の負担になったってことは、間違いなさそうだね」
「――リン、どこへ？」ゆるやかに踵を返した彼女の背中を、リュウは呼び止めた。
「ちょっと先を見てくる。少し思い当たることがあるんだ。あんたは、ニーナの傍についていてやってくれ」
「え？　でも」
「それと、靴を買ってやれなかったこと……あの子に謝っておいてくれ」
優しい笑みを投げると、リンは走り去って行った。
健やかにゆらめく尻尾の先が暗闇に消える。リュウはしばし呆気に取られていたが、やがてニーナの下へ戻った。
「ごめん、ってさ。リンが」
リュウはつとめて明るい声で話しかけた。
ニーナの咳は幾分収まってきていた。それでも呼気は弱々しく、玉のような汗が額に浮かんでいる。
「靴を買ってあげられなくて……けど、ニーナ、近いうちにちゃんと買ってあげるから。君に似合う靴を」
「ん……ん……」眠りに落ちてしまいそうな、けれど確かに声を聞いているらしい瞳のきらめき。咳はもう止んでいた。
リュウはニーナの隣に腰を下ろし、次の声を発するまでにはしばしの沈黙を要した。
「リンは、心当たりがあると……言ってた。やっぱり、君のことで何か知ってるんだと思う。けど、おれには何も言わない。隠してるんだ」

「んー……」
「別に、嫌ってるわけじゃない。リンはいいやつだ。それは分かってる」
「ん……？」
「けど、相手はやっぱりトリニティだ。このまま一緒にいて、本当に良いのかどうか――」
そこでリュウはやっと気付いた、ニーナが部屋の隅まで歩いていたことに。考え事で頭がいっぱいだったにせよ、物音一つ、気配一つ感じなかった。
ニーナは小振りな尻をこちらに向けて何かを見ている。そのすぐ後ろにガラス片が落ちていて、リュウはどきりとした。
「ニーナ？」
「んー、ん！　ん！」
うれしそうな声を上げるニーナの胸元には、くまのぬいぐるみが愛おしそうに抱かれていた。
継ぎ接ぎだらけの身体に、目がちかちかするような極彩色。それはがらくたの下に長らく埋もれていたらしく、埃まみれだった。
「これは、ニーナの……？」
「んん、ん！」
ニーナの顔がよろこびで弾ける。無理をしていない自然な笑みだ。
リュウは心が青く澄んでいくのを感じたが、それも束の間のことだった。
覚醒を促すようなサイレンの音が鳴り響く。やがて数人の警備兵が窓越しに部屋を横切って行った。
リンが見つかったのか？
リュウはニーナをかばうようにして身を潜め、しばらく様子をうかがった。
悲鳴が聞こえた。ついで、およそ人間でない者のうなり声が腹に響いた。違う、リンが見つかったのではない。
「ニーナ、ここで待っていられるね？」

彼女がうなづくのを待たず、リュウは部屋を飛び出した。
赤い交閃灯が警報に合わせて忙しく回る。リュウは血塗られたように赤く染まった空間を走った。
また、悲鳴。リュウの行く手に警備兵の背中が立ち並ぶ。彼らの頭上には、禍々しい人外の顔つき。ディクだ。
それは腕というにはあまりに巨大な長物で警備兵を三人まとめて壁に叩きつけた。豪快な破砕音が一瞬、サイレンをかき消し、あとには見るも無残な血しぶきの光景が残っていた。
リュウはとっさに目をそらしたが、またキッと怪物をねめつけた。たった一人残された警備兵は、ただただ怯えて後ずさりを始めている。
「どいてくれ」
「な、なんだ、お前……戦うつもりか？」
リュウは剣を抜き、構える。
「――やってみる」
一本角の生えた鉄兜の下で、今にも血の涙を流しそうな真っ赤な双眸がギラリとリュウを見つけた。
目の前にするとかなり威圧感があるが、巨腹をでっぷりと言わせてがに股に構えている姿はどこか滑稽でもある。
両腕は生き物のそれでなく、先端に三つのアームがついた大振りな鉄の砲身。人間を三人まとめてなぎ払うには十分な長さと太さだ。
しかし、元々の肥満体に更なる重装備をしているために動きはノロく、冴えがない。リュウは繰り出された腕のうえに飛び乗り、そこを突っ走りながら首めがけて剣を薙いだ。
飛び散ったのは火花。生身だと思っていた部分は堅牢な鉄のプレートを内側に仕込んでいた。迂闊。
敵が腕を振り上げるとリュウは体勢を崩し、宙を舞った。もう片方の腕が横様に接近してくる。
リュウは激しく壁に叩きつけられた。骨が軋む、意識が飛びかける。

それでもなお生きているリュウの身体を、敵はがっしりとアームで捕縛した。ついでぎりぎり、ぎりぎりと、圧力をかけて潰しにかかる。

リュウの口からうめき声がもれ、両側にネジの突き刺さった頭を見据える視界が激痛とともに薄らいでゆく。

と、敵の肩口で小さな爆発が起こった。リュウは力が弱まった瞬間を見逃さず、さっと素早くアームの束縛から逃れた。

見てみれば、遠くにはウォンドを振り上げたニーナの姿があった。いまの魔法はパダム、そしてニーナは再びくるくるとウォンドを旋回させる。

敵の頭上で紫色の電流が弧を描き、小さな雷鳴が轟いた。稲妻は一本角を通して巨体を隅々まで駆け抜ける。

なおもニーナは小気味よくウォンドを振り回し、一発、二発、続けざまに雷撃を浴びせた。パル。雷属性の低級魔法だ。

「助かったよ、ニーナ……」

続いて裂ぱくの声を上げながら、リュウは胸の中央部を突き刺した。丸いでっぱりの奥でガラス体がオレンジ色に底光りしている。

コア。またの名を弱点。そこが破壊されると敵は巨体をゆるがしつつ後ずさりしていき、やがて身体の節々から一斉に蒸気が吹き出した。

更に細かなスパークが生じ、感電したかのごとく全身がぶるぶると痙攣（けいれん）を始めた。往生の姿にしては尋常ならざる気配。

敵は死んでなどいなかった。それどころか理性の箍（たが）が外れたかのごとく大音声でわめき始めた。暴走。

敵は両腕を頭上高く揃えてかかげ、有無を言わずに振り落とした。凄まじい烈風とともに砕けたリノリウムがつぶてとなってリュウを襲う。

とっさに顔をかばったものの、肩口や太もも、身体の至るところに裂傷が走った。

なおも敵の勢いは留まることを知らない。右腕に反動を溜めると、

それは放たれた砲弾のようにリュウめがけて繰り出された。
半秒遅れてリュウも地面を蹴る。横薙いだ剣でアームを受け止める。このままでは刀身もろとも全身が砕けてしまうが、しかし。
リュウの怒号に呼応するかのように鮮紅色のオーラがほとばしり、それが刀身にみなぎってアームに食い込み始める。
リュウは渾身の力を振り絞り、一直線に駆け抜けた。斬り裂かれ、バラバラと崩壊飛び散る鉄片のあられ。
敵の背後を取ったリュウは、その命の在り処に狙いをつけて――突き刺した。コアの部分から刃が根元まで突き出ている。
敵はゆらゆらと平衡感覚を失っていきながら、やがて耳をつんざくような断末魔とともに、力尽きた。
リュウも無傷ではない。戦闘を終えると同時に片膝をつき、ニーナがぱたぱたと彼の元へ駆け寄った。
「た、倒しちまった……！　すげぇな、あんた！」
今の今まで傍観を決め込んでいた警備兵が、驚き交じりに歓喜の声を上げた。
うつ伏せに倒れた敵の巨体からはプスプスと黒煙が上がっている。どうやら生身と機械のハイブリッドらしい。
しばらくして、リュウの全身から痛みが引いた。例の？再生能力？だろう。
警備兵に事情の説明を求めてみるに、開発途中だったアーム・ストロングという実験体が檻から脱走し、今の事態に至ったということだった。リュウはどこか腑に落ちない気分になった。
「まぁ、あんたが何者かはこの際聞かないことにして……礼をさせてくれよ」
「それなら、頼みがある」
リュウは強い眼差しで言った。
「ニーナの……この子のことを知っているやつに、会わせてくれ」

（？）小さな旅立ち－後篇－

サイレンが止み、空間は元の静けさを取り戻した。
獣耳をぴくつかせ、リンは辺りに注意を配る。リュウとニーナのことが気がかりだ。
ふっと踵を返そうとした彼女だったが、薄暗い廊下の先にエメラルドのおぼろな輝きが見える。それは半開きになった部屋の扉からこぼれる光だった。
銃を構え、リンは慎重に足を踏み入れていった。すうっと肌寒い空間が広がる。何基もの培養装置が四列に整然と並べられて、カプセルはどれも蛍光色の液体で満たされていた。
そのなかの一つに、いたいけな少女の青白い肉体があった。背中からは赤い羽が生えて、やせさらばえた身体が蛍光色の海に浮かんでいる。
リンは思わず目を覆った。
少女には、首がなかったからだ。
『大気汚染改善プログラム……』
リーダーはこう言っていた。
『空気を浄化するのは、機械ではダメなのですか？』
『この計画は……人間を、その機械にしてしまおうというものだ』
追想の糸が切れるとともに、リンは思わず独りごちていた。
「なんてことを……」
部屋を出て、リンは認証装置にカードキーを通して扉にロックをかけた。
あの二人にこの部屋を見せるわけにはいかない。そう、本能が彼女に訴えかけたのだ。
曲がり角の向こうから足音が聞こえてくる。この分だと相手との距離はかなり近い。
リンは銃を構えて身を潜め、足音が自らの定めた警戒線を踏み越

えるとともに飛び出した。
ぎらりと剣が閃いて切っ先が眼前に突きつけられる。よく見覚えのある強いまなざし、相手はリュウだった。
「なんだ、あんたか……」
銃を下ろそうとしたリンだったが、それはまた素早く構えられた。
暗がりにぼうっと浮かぶようにして、ニーナの後ろに警備兵の顔があったからだ。
「リ、リン、大丈夫だよ。この人は、おれたちを案内してくれてるんだ」
「案内？　どういうことだ……？」
「まー、まー、威勢の良いねーちゃんよ」
警備兵はずずいっと身を寄せて、馴れ馴れしく喋り始めた。
「ちょいとこの子に助けてもらってな……そのお礼をさせてもらってるんだよ」
警備兵の言葉に付け足すように、リュウは事情を説明した。
リンは銃をホルスターにしまったが、警備兵を見る眼差しからは疑いの色が消えない。
なにせ相手は重厚なガスマスクで顔をすっぽり覆っていて、その下で何を考えているのかさっぱり分からないからだ。
聞けば研究主任の部屋に案内してくれるとのことだが、はなはだ疑わしい。ひょっとしたらレンジャー部隊が待ち構えているかもしれない。
「あんたたちのこと、知ってるぜ？　政府に追われてんだろ。大丈夫だ、俺はあいつらの一味じゃない……」
思惑を見透かされたような物言いに、リンは唖然とした。
「どうして知ってる？　レンジャーでもないあんたが」
「おいおい、迂闊じゃないのか？　そんな言い方じゃ、自分から相手に正解を与えてるようなもんだ……」
「あてずっぽを言ったってのかい？　ふざけやがって」
リンは銃口を突きつけたが、男は動揺する気配もなく、ちょこん

と廊下の先を指差した。
「すぐそこが研究主任の部屋なんだが……どうする？」
「信用できないからね。このまま、おとなしくしていてもらうよ」
「はいはい……」
男はぶらりと両手を挙げて、銃に背中を押されるまま歩き出した。
ぴりぴりとした不穏げな空気にニーナはすっかり怯えてしまい、リュウのスーツの袖をぎゅっと掴んでいた。

研究主任の姿は部屋になかった。
薄ひんやりとした沈黙が漂い、壁際に置かれた長いデスクには書類が散乱している。
片側には扉で隔てられた小部屋が設けられており、真っ白なタイル張りのなかに手術台が置かれている。
それが長方形の窓越しに目に入るや、ニーナは小さな悲鳴を上げてがたがたと震え始めた。
「ニーナ？　どうしたの？」
彼女の左手からぽろりとぬいぐるみが足元を転がる。リュウの見る限り、手術室のなかは空っぽで何もない。
ただ、ニーナの目には幻か何か、おぞましい光景が見えているようだった。
「や、なんですか？」
不意に声が聞こえて、リュウは振り返った。
かちゃかちゃ、と忙しい手つきで眼鏡を持ち上げ、一人の男が室内に伸びる廊下の入り口に立っていた。
研究主任。リュウは直感的にそう思った。
「やや、その試作品は出荷したはずですが……」
事務的な態度は崩さないまま、男は言葉ながらに歩み寄ってくる。
「何か、動作不良（エラー）でも……？」
「試作品？　出荷……？」
ニーナを見る男の目は、人間に対するそれではなかった。あたか

もディクや機械に接するような無機質な態度。年端のいかない女の子がこんなにも肩を震わせているというのに。
　リュウのなかで徐々に怒りが芽生え始めた。
「や、いけませんね。換気肺（ベンチレータ）がこんなに汚れてる……」
「ベンチレータ……？」リュウの存在などお構いなしに、男は図々しくニーナの傍に立って、ためつすがめつ身体の有様をうかがった。
　そして咎（とが）めるような視線をリュウに向け、彼は語気を強めた。
「もっと大事に使ってもらわないと」
「何を……言っているんだ？」
「君こそ、何を言ってるんです……？　これは、ここで？作られた物？じゃないですか……？」
　一度、二度、ニーナの頭をぽんぽんと叩きながら、彼は平板な口調で続ける。
「肺細胞をクローニングして換気肺を培養……汚染空気を浄化する機能を最大に強化……」
「や、すべて注文通りですよ」男はクックッと眼鏡を持ち上げる。
「何がいけないんです……？」
「？何が？……？」
　鮮紅色のオーラがほとばしる。穏やかにニーナを見守っていた瞳が血の色に染まる。
「言っておきますが、肺の交換は不可能ですよ。ここまで汚れたら、もう、回復も――」
　リュウに殴られ、男の言葉は宙を舞った。
　しりもちをついた相手にリュウは容赦なく刃を突きつける。
「？作った？だと？　ニーナは人間だ！　ニーナに何をした！　答えろ」
「何を、って……私たちは、注文通りに改造を……」
「注文通り？　改造……？　誰が、そんなことを」
　男は頬を押さえながら、喉先三寸に迫る死に怯えていた。
「この子は……ニーナは、この先どうなるんだ？」

ニーナの身体を支えながら、リンが心配げな表情で言った。
「試作品(プロトタイプ)なので、耐久性はありません……。汚れた空気を身体に取り込んで、処理しきれなくなったら、終わり、です」
半ば泣き出すような声音で言われた言葉が、リュウのなかで途絶えることのない響きとなって反復された。
処理しきれなくなったら、終わり。終わり。
その呪いのような響きの循環から逃れるように、リュウは激しくかぶりを振った。
「空気の汚れてない場所なら、ニーナは助かるのか？」
「地下の空気は悪くなる一方です……それが、生きていけるような場所は……ありません」
剣を握る手に力がみなぎる。「お前は、お前たちは……最低だ」
そして刃が振り下ろされようというとき――ニーナがリュウの背中にぎゅっと抱きついた。
途端に鮮紅色のほとばしりが消え、リュウの心から邪気が払われてゆく。ここで誰かを殺したところで何にもならない。
彼女を救いたいのなら、そう。目指す場所は一つだ。
「行こう、ニーナ……」
剣を捨てて、リュウはその手に彼女の体温を掴む。
優しく、放してしまうことがないように。
「君を、空へ連れて行く。君を……助ける」
リュウの胸のなかで、ニーナはゆっくりとうなづいた。
その昔、人々は空の青さとともに生きていたという。澄み渡った美しさのなかで、自由な翼を広げていたという。
そこに行けば、きっと、ニーナの小さな羽も――。

一行が部屋を去っていったあとで、警備兵がひどく打ちのめされた様子でうなだれる男の前に立った。
その手がおもむろにマスクへかかる。徐々に脱ぎ払われていくベールを前に、男はただ愕然としていた。

「あ、あなたは……ジェズイット、様……？」
「随分と手痛くやられちまったな」
燃え盛る炎のように逆立つ赤い髪、つり上がった双眸を持つ細面。
それが皮肉げな笑みを口元にたたえて、男を見下ろしていた。
ジェズイット。統治者（メンバー）の一人。
「冷やかしに来たつもりだったんだが……リュウ、か。面白そうなやつだな」
「どちらへ……？」
「追いかけるんだよ。触り損ねた？ケツ？をな」
瞬間、青年の姿がふっと虚空にかき消えた。
男はきょろきょろと辺りを見回すが、部屋にはブーツで床を叩く音がこだまするだけだった。
それが次第に遠のいていき、沈黙が重たく部屋に垂れ込めると、デスクに置かれた赤いタブレットが男の目についた。
最高機関の印が刻まれた勅命書。そうだ。
男は、確かに、統治者たちの言うとおりに、ベンチレータを作り上げたのだ。

（？）剣の絆ー前篇ー

レンジャー基地、メディカルルーム。
ターコイズのカーテンに仕切られたベッドの上に、ボッシュは上体を起こしていた。
その腹や頭、腕は包帯でぐるぐる巻きにされている。実に、実に不愉快だ。
「くそっ……くそっ……！」
ボッシュは苛立つ拳を繰り返し白いシーツに振り下ろす。
自分よりもD値ではるかに劣るサード・レンジャーに、リュウに、負けた。
これほど屈辱的なことはない。彼の憎悪にも似た怒りはいや増すばかりで、クッションやサイドボードに置かれた備品など、手当たり次第に感情を爆発させた。
「落ち着きなさい、ボッシュ」
カーテンを開けて、ゼノがその顔を見せた。
ボッシュは大きく息を喘がせる。額には破裂せんばかりの血管が幾筋も浮かび、その目は血走っていた。
「なんだよ……笑いに来たのか？　ローディに負けたこの俺を！」
「ボッシュ、D値は能力の最大到達予測値です。あなたが彼に敗れたのは……？誤差？の内でしょう」
「誤差！？」ボッシュのくちびるが震えを帯び、瞳は狼狽しきりに宙を泳いだ。
「そんなもんじゃない。あれは、あれは……？バケモノ？だよ」
言って、ボッシュは力なくうなだれた。
肋骨にひりひりと痛みが走る。完治にはまだ程遠いのに、無理やり身体を動かしたからだ。
「そのバケモノにやられて、全身打撲で済んだ奇跡に感謝すべきです。あなたについていった他の二名は見るも無残な……。とにかく、

あなたにはこれ以上任務を続けさせるにはいきません」
「バカな！？　俺は、任務に失敗したわけじゃない。こんなことで、ボッシュの名を……汚すわけにはいかないんだよ！」
「ボッシュ」ゼノは静かに、だが相手の心臓をきゅっとわし掴みにするような恐ろしい声音で、彼の耳元で淡々とささやいた。
「上層部から直々に勅命がありました……。？竜（ドラゴン）？を討て、と。バイオ公社からの報告では、つい先ほど、リュウたちと思しき三名のグループが……ラボを抜けて氷結廃道へと向かったそうです。私はこれから数十人の上級レンジャーを組織し、彼の、リュウの討伐に向かいます」
　さっと素早く踵を返したゼノの背中を、ボッシュは慌しく追った。
「ボッシュ、あなたは」
「いや、行かせてくれ。この目で見てやるんだよ……」
　にやり、と、彼は頬が裂けんばかりの、邪悪な笑みを浮かべた。
「あいつが死ぬところをな」

＊　＊　＊　＊

　リュウたち一行は、公社ラボのメンテナンスハッチから氷結廃道へと入った。
　地下水脈が凍えて出来た氷の洞窟。床や天井に至るまで分厚い氷が岩肌を覆い、所々に置かれたライトの光が乱反射されて、空間全体がほの眩い銀色に輝いている。
　この洞窟は地下の何ヶ所にも出入り口があり、身もすくむような寒さと遭難のリスクを恐れなければ、ショートカット（抜け道）として大いに役立ってくれる。
　事実、リンも今回の任務のためにこの洞窟を使ったらしい。彼女はここでも慣れた足取りで先頭を進み、案内役を買って出てくれた。
　目指すはトリニティのアジト。レンジャーとしてのリュウは敵の本拠地に向かうなど猛反対だったが、そこにはニーナの病状を緩和

するための医療設備があるという。
彼女を想うリュウとしては願ってもない朗報だ。それに今となってはもう、自分は半ばトリニティのようなもの。変に自分がレンジャーだという意識に固執する必要はない、大事なのは、ニーナを助けることだ。
リュウはニーナをおぶさり、凹凸がひどく、つるつると滑る氷の床に悪戦苦闘しながら、すいすいと進むリンの後を追っていた。
ジャケットを着ていてすら冷気が身に染みるのに、裸足のニーナを歩かせるわけにはいかない。だが、彼女は思いのほか寒さに強く、ぬいぐるみをリュウの頭に乗せたり、ぱたぱたと足を動かしてこの状況を楽しんでいる様子だ。
道中には小さく、身体が白く透き通った神秘的な生物が、エラを張って空中を浮遊していた。リン曰く、?クリオネラ?という名の生き物らしい。
ニーナは彼らと触れ合いたくてたまらない顔をしていたが、両手はあいにくウォンドとぬいぐるみで塞がっている。その代わりとばかりリンが捕まえようとしたが、クリオネラは伸ばされた手をひらりとかわして、悠々と空中散歩を続けた。
掴み損ねたものの感触を確かめるように、リンは右手をか弱く開閉させながら、ふと口を開いた。
「リュウ。本当に?空?を目指す気か?」
「なんだよ、急に……」
「それが本当に存在しているかも分からないんだ。仮にあったとしても、あんたが考えているようなものじゃ――」
「リン」彼女の口をそっと覆うように、リュウは穏やかに話した。
「地下(ここ)は、ニーナを救わない世界だ……。それどころか、彼女がいないと、大気を満足に保つことさえ出来ない。
おれは、ニーナを助けたい。だから、ここを出て……」
リュウはゆるやかに歩を進めながら、静かに天井を仰いだ。
その如何ともしがたい堅牢な氷壁の向こうに、彼は、青く澄み渡

った空を見ていた。
リンはこれ以上何も言及するまいといった風情で、短く息を吐き出すと、やんわりとニーナの背を打った。
「あんたは幸せ者だよ、ニーナ」
言葉の意味が分かっているのか、いないのか、ニーナはにっこりと笑った。
彼女にとって、リュウとリンの二人といる時間はかけがえのないものであるらしかった。

一行は氷床のうえに建立（こんりゅう）された鉄タイルの橋を渡り、奥の部屋にあった梯子を使って上階についた。
景色は天然のものから人工物へと一変し、銅造りの床と壁、埃っぽい空気などは、リンとニーナに出逢った廃棄処理施設をリュウに思わせた。
せせこましい通路を左に曲がり、突き当たりにあった立て付けの悪い扉を、始めは手で、次に足で、最終的には身体ごとぶつかってこじあけた。
四方に開け、天井が高い広間。コンテナや鉄筋類が無造作に置かれているところを見るに、ここは施設の集積庫であるらしい。
一同は短いスロープを下って部屋を横断しようとしたが――広間の中央に来るや、部屋の四方にあるゲートが一斉に開き、中から物々しい装備をした連中がぞろぞろとやってきた。
レンジャー部隊。まんまと待ち伏せを食らった。どこで情報が漏れたのかと勘ぐる暇もなく、やがて正面のゲートからよく見覚えのある顔が出てきた。
「よう、相棒」
ボッシュ。額に包帯を巻いてある以外、いつもと何ら変わらぬ高慢さで、彼はスロープのうえからこちらを見下ろしていた。
「生きていたのか、ボッシュ」
「あぁ？　それはこっちの台詞だ。下層区でお前を捕まえるために、

クズどもが大層バカげたことをやらかしたみたいだが……でもよかったよ、そこで死んでくれなくて」
「お前の死を目の前で拝めるんだからな」そう得意げに言葉を付け足すのと同時に、かっかっかっ……静かに足音を立てて、ゼノが彼の後ろからやってきた。
「リュウ＝１／８１９２……」
彼女は足元を向いて歩みながら、やがてその鋭い眼差しをリュウに向けた。
「お前は、バイオ公社の任務において、特殊な実験体とあやまって接触……その結果、精神に重大なダメージを負っている」
「ゼノ隊長……？　何を？」
彼の言葉に答えず、ゼノは二の句を継ぐ。
「反逆者と行動をともにしたり、保護対象に過剰な思い入れを持ったり……全てのお前の行動は、精神的混乱の結果だ」
リュウはかぶりを振る。「違う、おれは、」
「おとなしく、我々の保護を受けるんだ、リュウ……」
「違う」
「今なら、まだ間に合う……」
職業的だった彼女の口調は、次第に懇願するような響きに変わっていた。
彼女は自分に戻ってきてもらいたいのだろう、それは胸が痛むほどよく分かる。
しかし、この意思は、ニーナを助けたいと思う気持ちは、偽りなく自分のものだ。精神的混乱などでは決してない。
リュウは静かに口を開く。叶うなら、この想いがゼノに届くように。
「行かせては……もらえませんか……？」
「はぁ？」ボッシュが横槍を入れた。
「バカかお前。機密を持って行かすと思うのかよ……どっちにしても、お前はもうすぐ死、」

「リュウ、残念だが」ゼノが鋭い声でボッシュを制す。
「それは出来ないんだ……どうしても行くというのなら、仕方がない」
ゼノはリュウたちを包囲するレンジャー部隊に向けて、視線で合図した。
レンジャーたちは各々武器を構え、来る闘志の放出に向けて首を、拳を鳴らした。
「残念だよ、リュウ」
相手はざっと数えただけで十四、五人。彼らの先頭部隊はライオット・シールドを構えてがっちりと脇を固め、三方向からじりじりと距離を詰めてゆく。
リュウたちは完全に袋の鼠(ねずみ)だった。しかし、？バケモノ？の噂が広まっているせいなのか、レンジャーたちにはどこか怖気づいた様子がある。
だから思い切った行動に出ないのだ。リュウは何事かニーナとリンに耳打ちし、三人はそれぞれの方向を見据えて背中合わせに武器を構える。
第一に行動に出たのはニーナだった。ウォンドを旋回させながら横薙ぐとともに、右から左へと小気味よく巻き起こる爆発の連鎖が前方に並ぶレンジャーたちを蹴散らした。
それが戦火の号砲とばかり、リュウとリンが同時に駆け出した。敵も黙ってはいない。
「う、撃てぇ！」
リュウに放たれた銃弾は、しかし、鮮紅色のオーラを放ちながら爆発的加速で飛び出した彼を捉えることはなかった。
ここで優先すべき撃破対象は銃や魔法杖を持った敵。リュウはライオット・シールドによる防衛網を力ずくで突破し、後衛部隊に斬ってかかった。
一人、二人、血しぶきが飛ぶ。三人、四人、刃が鋭く閃き渡る。
何発かの銃弾が頬をかすめ、あるいは肩を貫いていった。パダム

による爆撃、パルによる電流も同時に巻き起こる。
攻撃はリュウ一人に集中していた。しかし、これでいい。
リュウは攻撃を受けるたびに獣にも似た雄叫びを上げて、鮮紅色の軌跡を縦横無尽に描いていった。

一方、リンはニーナとともに大型コンテナの裏に身を潜めていた。
ニーナが魔法を発動したのと同時に、リンは彼女をかっさらうかのごとく胸に抱えて素早く退避。戦闘はリュウが一手に引き受けるという寸法だった。
これはリュウの提案だったのだが、リンは何となくいたたまれない気持ちになる。確かにこちらの装備はハンドガン一丁で、リュウのような怪物じみた力も自分にはない。
あの包囲網を突破するには、リュウの得体の知れない力を頼りにするほかなかったのだ。ぎりっ、とリンは奥歯をかむ。
やがて銃声の驟雨（しゅうう）が止み、場が完全に沈黙すると、ニーナが不安げにひょこっと外を覗いた。
硝煙が薄く立ちこめる中で、はぁ、はぁ、と荒い息遣いがこだましている。リュウが地面に剣をついてひざまづいていた。床やコンテナのうえ、レンジャーがあちらこちらに横たわり、血しぶきが辺り一面に散っている。
ニーナがぱたぱたと駆け出していき、リンも遅い足取りでリュウのところへ向かおうとしたが――その目は殺気を捉える。
リュウの背後、少し離れたところで男がむくりと腰を上げ、今まさに手に持った魔法杖を振り下ろさんとしている。
やらせるか！　リンはハンドガンを抜くや二発、三発、発砲しざまに男との距離を詰めてゆく。
銃弾は男の腹や腕を貫いたはずだが、相手はよろめきつつも倒れない。そして男はふらりとターゲットをリンに変え、最後の力を振り絞るように魔法を発動させた。
氷柱の波が轟音を立てて迫る。レイギル。レイガの一段階上位の

魔法だ。
回避も間に合わず、リンは苦し紛れに腕を広げたが、爆発が起きた。ニーナのパダムだ。
それが何連発と起こって氷柱を砕き、どこまでも無防備な敵の姿が真正面に浮かぶ。あとは冷静にトリガーを引くだけだった。
額を撃ち貫かれ、男は背中からぱたりと大の字に倒れ込む。決着だ。
リンは銃をホルスターにしまいつつ、リュウの下へ向かった。
「すまない、リン、ニーナ……」
彼の震える声とそこかしこが破れたジャケットが、ダメージの深刻さを物語っていた。
「あんたの負担に比べたら、たいしたことじゃないよ。それより――」
リンはキッとゼノをにらみつけた。彼女は戦闘が始まる前と同じ場所に立ち、その横ではボッシュが悲嘆するようにかぶりを振っている。未だ信じられないのだろう、その目に焼きついているはずの光景が、リュウが生きていることが。
現状、敵になりそうなのはあの女だけだ。リンはそう見越して、最後の敵を討つべく静かに歩き出したが、リュウがバッと左腕を広げて行く手を阻んだ。
「大丈夫だ。あの人とは、おれがやる……」
「リュウ？　でも、その傷じゃ」
「戦えるよ。おれは？バケモノ？なんだ」
リュウは自嘲気味に言いながら、よろよろと立ち上がった。
ついで剣を振るい、切っ先をゼノに向ける。彼女は初めからこうなることが分かっていたかのように、眼鏡のテンプルを小さく持ち上げただけで、動揺した様子はなかった。
「ドラゴンの力……か」
言って、ゼノは腰に交差させるようにマウントしていた一対の剣を素早く抜いた。

「隊長、おれは、おれたちは……行きます」
「リュウ、それはお前の意志ではない。お前にリンクした実験体の意志だ」
「違う。これは、おれの、」
「リュウ……残念だが、ここまでだ」
ゼノの瞳が鮮明な覇気を帯び、剣を十字に構える。
リュウの身体からはオーラが消えていたが、戦意をなくしているわけではない。
ゼノ（師匠）を倒して、証明して見せるんだ。自分の意志を。

（？）剣の絆ー後篇ー

長い沈黙の後で、先陣を切ったのはリュウ――いや、ほとんど同時に飛び出した。

硬質な金属音が火花とともに飛び散る。リュウとゼノはいつ首が宙を舞うかすれすれの斬り合いを演じ、ときに飛びのき、間合いをつめ、果てることなく刃を交錯させた。

そのなかで形勢は徐々にゼノに傾きつつある。二振りの剣から繰り出される攻撃は終わりがなく、何度受け止め、捌いても、次から次へと息をつく間もない。

止むことのない斬撃の連鎖。リュウは防戦一方となり、じりじりと後退させられていった。

ゼノが腹めがけて突きを放つ。リュウは寸でのところで身をよじり、伸び切った腕をがっしりと脇に挟んだ。

瞬時に剣を右手から左手に持ち替え、袈裟がけにゼノの肩口を斬りつける。相手の反撃もまたこちらの肩を斬り裂いた。

両者の血しぶきが舞い、ひとまず互いに距離を取る。ゼノは呼吸を整え、リュウは剣をまた利き手に持ち替える。あのとき剣を移動させたのは、ゼノの腕をホールドした利き手側からは満足な攻撃が出来ないと判断したためだ。

リュウは本気でゼノを殺しにかかっている。それは相手も同じ。この戦いに生ぬるい情けや感情などは無用なのだと、二人は理解していた。

「どうした、リュウ。さっきまでの動きが嘘のようだぞ」

眼鏡の位置を直しつつ、ゼノは挑発するように言った。

リュウは懐かしさを覚える。いつの日だか、こうして、ゼノと剣の稽古に励んだ。

もちろん、真剣ではなくて、命を取り合うためではなくて。ひたすら、明日を生きるために。

いや、いけない。思い出してはだめだ。リュウは雑念を振り払おうときつくまぶたを閉じ、誓いを立てるように十字剣を胸に構えた。
次にまぶたが開いたとき、瞳はすでにいつもの色を失っていた。毒々しいとさえ言える赤が渦を巻き、鮮紅色の粒子が燃え爆ぜる焔のように立ち昇ってゆく。
覚悟は決まった。
「――行きます」
残像をその場に残し、リュウの実体は半円を描きながらゼノに向かっていた。
彼女は寸でのところで殺気を感じ取る。とっさに剣を構えたところに斬撃が飛び、これはどうやら防いだが、続いて背後にただならぬ気配。
瞬間的に飛びのいたものの、彼女の頬にはぱっくりと裂傷が出来ていた。リュウの姿はまたも見えず、ただただ大気を引き裂くような不気味な音だけがこだましている。
右か？　頭上か？　いや――
「ここだ！」
ゼノの剣が背後から飛んできた斬撃を受け止める。彼女は素早く胴体をよじって右の剣で斬りにかかった。
次に左で、次に右で、完全に相手の姿を捉えた彼女の剣は、怒涛の連撃を見せた。
リュウの体勢がわずかに傾ぐ。彼女は手元で双剣を揃え、ありったけの力を込めて突きを放った。
それはオーラの防壁を貫いてリュウの腹に到達。肉を捉えた感触は薄かったものの、リュウははるか後方に吹き飛ばされた。
なおもゼノの猛追は続く。力強く疾駆しながら両腕を交差させ、刃が薄紫色の光を帯びてゆく。そして力がみなぎったところで、ゼノは斜め十文字のかまいたちを放った。
飛ぶ斬撃。リュウはコンテナにしたたか背中をぶつけ、未だ体勢が整っていないところだった。

直撃。コンテナはスパっと四つに分断されて鉄片を散らしつつ宙を舞い、粉塵が立ち込める。そのなかからやがて赤い弾丸が飛び出してきた。

リュウは裂ぱくを上げながらゼノへと直進し、三振りの剣が激しく衝突した。瞬間的に鎬(しのぎ)を削る力の拮抗があったのち、両者は弾かれたビー玉のように飛んでいった。

もはや人間同士の戦いとは思えない光景に、リンとニーナ、そしてボッシュはただ唖然とするばかりだった。一方は祈るような思いで、一方は期待と焦燥を募らせながら。

やがて、広間の中央に姿を見せたのはリュウだった。半歩遅れるようにして、ゼノもよろめきながらも戦いの舞台に立つ。

眼鏡のレンズは粉々に砕けて、もうとっくに役割を果たしていないが、ゼノの癖が治ることはなかった。

彼女はいつものように眼鏡を持ち上げると、落ち着き払った声で言った。

「その力……やはり、危険。ここで完全に止めねば」

砕けたレンズの欠片がぱらりと落ち、ゼノは双剣を逆手に持った。それに呼応するかのように、リュウもまた剣を逆手に構える。

絶命剣。二人が持ちうる最高の剣技であり、また戦いの最終局面に打たれるべき終止符。

師として、ゼノは。子として、リュウは。この戦いを終わらせようとしていた。

「行くぞ、リュウ――」

彼女の身体が蝶のようなたおやかさで飛翔する。リュウは振り上げた剣の先に力を収束させる。

爆裂。鮮紅色と紫の稲妻が交じり、広がり、止め処ない輝きの奔流となって大気をつんざく。

輝きは次第に失せていき、底抜けの沈黙が土煙とともに舞い戻ってきた。

立っていたのは――

＊　＊　＊　＊

大勢のレンジャー候補生が肩を並べて帰ったあと、一人の少年がぽつんとミーティングルームに残っていた。

少年はしょぼくれた様子で立っている。講習は終わりだ、彼らと遊びに行かないのかと、ゼノは声をかけた。

「みんな……ぼくのことを、ローディだって、弱虫だって……」

少年の目からすうっと一筋の涙が流れ、やがてどっと泣き出した。

「よしよし、泣くな。私がお前に剣の稽古をつけてやる」

ゼノは彼の頭を優しく撫でた。

少年の涙は次第に収まり、彼は上目遣いに問いかける。

「ぼくも、強くなれるかなぁ……？」

「ああ、なれるさ。Ｄ値なんて関係ない。お前の努力次第だ」

少年の顔に笑みが弾ける。ゼノは彼の名前を呼ぼうとして、しかし、とっさには出てこなかった。

今日が彼の属する第五十六期レンジャー候補生たちとの初めての顔合わせだったからだ。

「リュウ、です。リュウ＝１／８１９２」

「私はゼノだ。改めて」

ゼノは少年の、幼く、無垢な手を取った。

「よろしくな」

＊　＊　＊　＊

カラン、とむなしい響きを立てて、ボッシュの前に一振りの剣が転がってきた。ゴクリと唾を呑んだあと、彼は負け犬さながら逃げ出した。

リンはリュウの下へ歩み寄ろうとしたが、その背中が震え、大きな悲しみを宿していることに気付いた。彼は静かに涙しているのだ

ろうと、リンは直感した。
「ここを抜ければ、工業区に出られる……」そうしてリンが話しかけるには、長い沈黙を要した。
リュウは依然として背中を向けたまま。今にも断崖から飛び降りようとしているかのような、絶望に打ちひしがれた佇まい。
もうどうにも見ていられなくなって、ニーナは彼の胸に顔をうずめた。力いっぱいに、ぎゅうっと、彼の心が消えてしまわないように。
「そうだ。おれは、決めた……。君を空へ連れてゆく。後悔はないんだ」
リュウは自分に言い聞かせるようにささやいて、おぼつかない足取りで歩き出した。
スロープのうえには刀身が紫色がかった剣が一振り、横様に転がっていた。
ゼノの愛用していた紫音(しおん)剣。リュウは彼女の眠れるまぶたにそっと触れるように、剣を手に取った。
これまでの激闘で自分の剣はボロボロになっている。同じ十字型と言えど、切っ先の長さや鍔の形状は微妙に違う。
しかし、紫音剣はリュウの鞘にぴったりと収まった。そこがいつもの場所とでも言うように、あるいは、ゼノが彼とともにいることを望んだかのように。
リュウはキッと顔を上げて涙を払い、力強く前を見据えた。行こう、ニーナ。
空へ。

（？）ネガティブ―前篇―

ほの赤く発光する蝋燭の群れ。
数あるうちの一本から、いま、ふっと火が掻き消えた。
「ゼノによる上級レンジャーの一団が、敗走した……」
コツリ、と床の大理石に硬質な足音を響かせ、エリュオンは言った。
「やはり……人の手にはあまる、と？」男女どちらか判然としない、幼い声が問いかける。
その横で黒い眼帯をした男――デモネドは、やるせなさそうにかぶりを振っていた。
「その時が来た、ということか……」
「いや、」エリュオンが二の句を継ぐ。
「？ネガティブ？を使う」
「ネガティブ……？　他ならぬ、？人の暗部？ではありませんか！」
清らかな女性の声が、勢いを持った水流のように場を打った。
ついでデモネドが猛然と立ち上がる。叩かれた机と、倒れた椅子、聖堂にはしばし残響がこだました。
「分からんな……なぜ、こんな回りくどい手を！？」
エリュオンはうつむくばかりだった。
「すでに動き始めた流れのなかで……人は、あまりにも無力だ」
「何が言いたい？」
「だが、それは我々とて同じだ……デモネド」
およそ人間らしくない、彼の赤い瞳が眼光鋭く冴え渡った。

エリュオンは赤絨毯の敷かれた列柱廊を歩いていた。
つと、背後に何者かの気配を感じる。まるで廊下に伸びる自らの影に追われているかのような感覚。
しかし、振り返るなり辺りを見回すなり、エリュオンに亡霊を探

ろうとする様子はなかった。気配の正体が何か、彼はとっくに分かっていたからだ。
「会議の場にいなかったが……どこへ？」
一拍、間を挟み、答えが返ってきた。
「見てきた。俺たちの敵が、どんなやつかをな」
ジェズイット。彼はあたかも初めからそこにいたというように、石造りの壁に背もたれて腕を組んでいる。
「ゼノたちのレンジャー部隊はやられちまった……。あのガキ、竜（ドラゴン）の力をある程度コントロール出来るらしい。意識的なレベルかは分からないが、暴走することはなかった。やつのD値、1／8192じゃ、適格者にはなり得ないはずなんだがな」
「――それで、私に何を問いたい？」
「別に？　ただ、あんたは楽しみにしているみたいだからな。あのガキがここへやってくるのを」
「クピトに勅命書を持たせて、現在ネガティブに対象の殲滅を命じるところだ……。彼の命運も尽きるだろう」
「それならそれで、」ジェズイットはおもむろに歩き出す。
「あいつはそこまでの器だったってことだ。それと……隠し事はあまりするもんじゃないぜ、？オリジン（始原の唯人）？」
振り返りざま、彼はシニカルな笑みを浮かべる。
一方、エリュオンの表情は固く閉ざされたままだ。
お手上げだな、というように肩をすくめると、ジェズイットの姿は暗闇に紛れて消えた。
『何のつもりだ、オリジン』
闇の底で轟くような残忍な声が、つと彼の頭のなかでよみがえった。
『昔を懐かしみに来たか？　失せろ、オリジン。戯れに費いる時間などない』
彼は長らくぶりの再会を喜びはしなかった。牙を剥き、朽ちた翼を躍動させて怒りを露わにしていた。

どくん、と鋭い痛みが走る。エリュオンは心臓の辺りを押さえたが、すぐに痛みは遠のいていき、また落ち着いた足取りで歩みだした。

『時間がないのは同じだ、アジーン』

そう、かつての？戦友？との対話を思い出しながら。

＊　＊　＊　＊

リュウたち一行は工業区を進んでいた。

工員の姿はなく、辺りを領する闇のなかで何かが蠢く気配と、取り留めもない静寂が広がっている。照明は所々生きているが、数が少なく、この不気味な空気を払うには頼りない。

クレーン装置や何基ものベルトコンベアが配備された作業部屋、通りがけに見てきたそれらの設備から察するに、ここは製鉄工場であるらしい。だが、最下層区にあった施設と同様放置、あるいは一時的に稼動が停止しているようだ。

通路のあちらこちらにディクの排泄物が散らされ、アブラクイがのさばっているところを見ると前者だろう。前回の施設よりもタチが悪いのは、四足歩行型巡回ロボットであるチャペックが警備の目を光らせていることだ。

単純に考えて彼らを稼動させたまま工場を閉鎖させたのだろうが、ロボットは命令に忠実だ。施設を守る意義を失ってなお、背中に一門のガトリング砲を備え、触手のように伸びた丸い瞳からサーチ・ライトを放射し侵入者はいないかと気張っている。

リュウたちはレンジャー戦の傷が癒えぬ身体で、彼らの動向に注意を配らなければならなかった。発見されたところで倒すのは難しいことではないが、余計な戦闘は避けるにこしたことはない。

暗闇に同化してサーチ・ライトの警戒網を逃れつつ、一行はようやく工業区の中間地点までたどり着いた。横幅一人分の非常通路、チャペックの監視もここまでは届かない。

辛そうに息を喘がせるリュウ、ニーナを見て、リンは休憩を取ろうと提案した。うなづく間もなく、リュウはどさりと床に腰を下ろした。
「道があっているかどうか、私は先を見てくるよ」
言って、リンは足早に通路を抜けた。
辺りに人気がないのを確認すると、彼女はポーチから通信機を取り出した。
しばらくの呼び出し音のあと、低くしわがれた男の声が耳元に聞こえる。
メベト＝1／4。トリニティのリーダーだ。
「はい……レンジャーの防衛線がありましたが、何とか」
リンは努めて声を殺し、L字型に曲がった通路の向こうをしきりに伺った。この会話をリュウとニーナに聞かれてはならない。
「先刻、下層区街から報告したとおり、あの少年、リュウは……？竜（ドラゴン）？の力を持っています。本人が自覚しているのかは分かりませんが、ニーナを助けるために？空？を目指す、と……」
リンの顔が次第に不穏の色を帯びる。「リュウを組織に、ですか……。現状、確かに彼は政府に楯突く形となっていますが、それはあくまで自分の意志を……」
「はい、はい……。見込みは薄いかと思われますが、了解しました」
通話はそこで途切れた。指令は引き続き、対象とリュウをアジトに連れて行くこと。通信機をポーチにしまう折、紙幣の束が目に付いた。
ニーナの靴を買いに行くからと、リュウに頼んでもらったものだ。それはただの口実で、自分は組織に連絡を入れていたのだが――もう少し時間があれば、本当に靴を買ってやるつもりだった。
二人の下へ戻ってきたリンだったが、ニーナの笑顔を見ると後ろめたい気持ちになる。いつもと何ら変わりないはずなのに、リュウの眼差しが疑いをはらんでいるふうに感じられた。
「どうだった？　道、あってた？」

気のせいだった。リュウは疑うどころか、本当に自分のことを仲間だと思っている。
リンは普段のように振舞おうとしたが、笑顔が少しぎこちなくなった。

＊　＊　＊　＊

鉄くずやスクラップが積まれた集積場。
錆び鉄を含んだ汚らわしい空気、弱々しく明滅を繰り返す白熱灯。この世の外道たちがのさばるに相応しい闇が、そこにあった。
「ほぉ、最高統治者の御印……」
赤いタブレットに目を通しながら、男が言う。
その声は不自然に濁った響きを持ち、まるで獣が無理をして人語を喋っているかのようだった。
「？勅命？……ということですか」
細やかな少女の輪郭を持った子供――クピトは、淡々と話しはじめた。
「そうです。あなたたちには、あなたたちに見合ったことを……して頂きます」
くく、と男が不気味に笑う。？あなたたちに見合った？こと。
クピトと対する男は、闇に見開く瞳がペイントされた趣味の悪いマスクで目と鼻を覆い、口はハオチーのそれのようにすり鉢状となっている。
レンジャーが身につけるようなジャケット、ズボンに包まれて肉体こそ見えていないが、男は人間と呼ぶにはあまりに異質な姿を持っていた。
その後ろに並ぶ二名も一切の人間らしさを持ち合わせていない。
一人は腕と足のバランスが著しく崩壊した巨人で、もう一人は鉄球から手足と頭が生えたような肥満体。
彼ら三人を前にクピトは慄くどころか、その眼差しは一抹の哀れ

みを含んでいた。
「結構、たいへん結構です……。とても、いいですよ。世界を統べるオリジンが私たちを必要とし、私たちに好きにしろとおっしゃる……くく、とてもいい……」
ネガティブ。人ならざる彼らは、ただただ、愉快そうに笑っていた。

（？）ネガティブ ―後篇―

休憩地点を出発して三十分ほどは経過しただろうか。本来なら中層区に到達していてもおかしくはないが、チャペックの目を避けるために遠回りを余儀なくされている。

薄暗い通路を進む一行に口数は少ない。ニーナは息を喘がせ、しきりに立ち止まっては辛そうに顔をしかめる。そのか細い足は悲鳴を上げていた。

しかし、彼女はリュウとリンに置いて行かれまいとして、距離が開いては二人の後をペタペタと追った。

いくら怪物じみた再生能力があるとはいえ、戦闘に次ぐ戦闘、どこの角を曲がっても尽きることのない窮屈で暗い空間はリュウの心身を確実に磨耗させていた。先頭を真っ先に進むリンも、疲れを見せまいとしてはいるものの、その額には玉のような汗が浮かんでいる。一行の集中力はかなり散漫な状態にあった。

だから異変に気付くのがいささか遅れたのかもしれない。第二工業区に足を踏み入れてからというもの、チャペックの姿が見当たらない。発見したとしても、それは大破しているかスクラップ同然の有様だった。

施設の老朽化が原因だろう――しかし、それではこれまでの道程にいたチャペックが疲れも知らず働き続けていることに説明がつかない。ただ、今の一行には勤勉なロボットたちの死について考える余裕はないのだった。

漠然とながらもリュウが危機感めいた不穏さを察知したのは、四角くて広い作業部屋に入った時だった。これは……血の臭い？

きゃっ、と後ろでニーナの声が聞こえた。壁面に取り付けられた照明が届かないところで人が倒れている。

更に辺りをうかがってみると、ベルトコンベアにもたれかかる形で一人、操縦盤が設けられた司令室らしき小部屋の中で二人、衣服

と床を血に染めて事切れている。
剣やシールドなどの装備を見るに彼らは自分たちを追ってきたレンジャーだ。それがすでに何者かの手によって殺害されているという事実に、一行は首を傾げた。
小部屋から出ると、リュウは視界の隅に何かを見つけた。この時間すら凪いでいるような静寂のなかで、そのシルエットは人の形をし、呼吸に合わせて右に左に微動しているかに見える。
リュウは剣の柄を握りながら、部屋の中央部に至る短い階段を下りていった。近づけば近づくほどに、不気味な影は次第に輪郭を帯びてリュウたちの前に姿を現していく。
ニーナはとっさに顔をそむけた。
「はじめまして、リュウさん……レンジャーたちは邪魔なので、ふふ……私が片付けておきましたよ……」
リュウは始め、自分は一体何を目の当たりにしているのだろうと思った。人間？　ディク？　いや、そんな生易しいものじゃない。
強いて言うなら、この世の暗部だ。見てはならないもの、触れてはならないもの、悪魔死神の類。それが目の前でノイズだらけのしゃがれた声で喋り、すり鉢状に細かく生え揃った牙が虫のようにぞろぞろと蠢いた。
口からうえは前面に赤い蛍光色で一つ目が描かれた円形のマスクですっぽり覆われ、禿げ上がった頭には所々釘のようなものが突き刺さっている。かすかに見える男の肌はくすんだ灰色だ。
そんな人ならざる異形の姿が傍らにある大型機械に付けられたランプの光を受け、男に備わった異質、不気味さを何倍にも助長させている。リュウとリンは武器を構えたまま半ば硬直していた。
男は両手に持ったダガー・ナイフを勢いよく振るう。その切っ先から飛び散った赤い雫が男の後ろで倒れているレンジャーの血液であることは明白だった。
「それじゃあ、始めましょうか――」
言うや、男はリュウに切ってかかった。それは体内に骨があるの

かどうか疑問に感じられるほど常軌を逸した動作ではあったが、見た目に反して振り下ろしは早い。
リュウはとっさに飛びのいて事なきを得る。同時に、彼の背後からリンが駆け出した。弾丸が後ろから男の左肩を貫き、鮮血が虚空を舞った。
「い……痛いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！」
リュウたちは思わず両耳を塞ぐ。男の金切り声は痛々しいほど哀れな響きを持っていたが、同時に『もっといたぶってください』とでもいうような余裕も感じられる。
事実、男はかすかに笑っているのだ。リュウは直覚する。こいつは？狂って？いる、と。
男の禍々しさに気圧されてか、ニーナはぬいぐるみをきつく抱きしめたまま立ちすくんでいた。この戦闘はリンと二人でどうにかするしかないだろう――リュウは袈裟懸けに剣を振るった。
しかし、男の軟体生物のような奇怪な動きに翻弄され、なかなか的を射ることが出来ない。それはリンも同じだった。
ときには常人には到底無理な角度まで身体を丸めたり、機械やパイプ管を足場に宙を飛びまわったり、そうして回避にばかり専念しているかと思えば、あらぬ所から攻撃が飛んでくる。
まったく予測がつかない。リュウたちの戦意はことごとく空回りし、一方で男の攻撃は徐々に速度と重みを増してくる。これまではウォーミング・アップだったというわけだ。
「二人がかりでこの程度とは……拍子抜けですねぃ」
男は足にバネでも仕込んでいるかのような跳躍で天井すれすれまで飛び上がると、下に向けて両手を広げた。
リュウとリンの間に紫がかった黒い球が出現し、急速に膨張するや盛大に弾けた。属性不明の魔法、ブンパ。
とっさに防御の構えを取ったものの直撃を被った二人はそれぞれ壁に激突。舞台には男とニーナが残された。
「逃げなくていいんですか……？　それとも怖くて動けないんです

か……？」
　不自然に首をぐらつかせながら、男はじりじりとニーナに迫る。死を目前にしながら彼女は立ち尽くしたままだ。
「ふふ……今、ラクにしてあげましょうねぃ！」
　男は刃を振り上げた――が、刹那、男の足元で赤い輝きが放たれた。
　ニーナはただ怯えていたわけではなかった。リュウとリンが戦っている間、彼女はいくつかのポイントに？魔法陣？を描いておいた。
　あとは魔法陣のうえに男を誘い込む。そう、見るからに弱々しい女の子を演じて。
　魔法陣から爆発的な勢いで生まれた炎はたちまち男を火達磨にし、皮膚の焦げる匂い、聞くにも耐えないうめき声が撒き散らされた。低級魔法陣の一つ、グランパダム。
　ニーナの行動にはリュウたち自身も驚かされた。そして窮地から一転、絶好の好機。リュウとリンは『行くぞ』と視線で言葉を交わし、男に向かって一直線に走り出した。
「乱れ舞え！」
　リンは新たにカートリッジ・インした弾丸をありったけ男に撃ち込む。
　弾丸が身体を貫くたびに男の右手が、左足が、上半身がうねるように躍動し、さながら破滅の輪舞曲（ロンド）でも踊っているかのような有様だった。
　そして最後はリュウの横一閃。男はぴたりと踊るのを止めて、その場に倒れこんだ。決着。
　リュウは剣を鞘に収めた後、真っ先にニーナの元へ向かった。頭を撫でられると、彼女は満足そうに笑った。二人の役に立てたことが嬉しいのだ。
　しかし、リュウには気がかりなことがあった。今しがた討ち倒した男の正体についてだ。
「なぜ、こいつはレンジャーたちを……政府の戦闘員じゃないのか

？」
薄い白煙を上げ、黒こげとなった男の亡骸を遠巻きに眺めながら、リンは険しい面持ちで答えた。
「非合法活動を専門とする？ネガティブ？と呼ばれる部隊があると聞いたことがあるが……これが？」
「ネガティブ？　なんで、そんなやつが？」
「あんたやニーナは、いよいよ政府（やつら）にとって？あってはならない？ものになったみたいだね……」
リュウは改めて自分の置かれた状況を知った。上級レンジャーだけでなく、政府は人外の者まで使って自分たちの殲滅に乗り出したのだ。
ネガティブが部隊だというのなら、他にも敵が襲ってくるかもしれない。名前も定かではないが、あの男のように醜悪で？狂った？連中が。
一行は足早に部屋を後にした。激しい戦闘の余韻すら嘘になった静けさのなかで、男の手足はあらぬ方向に曲がってしまっている。身体の至るところに風穴、ついで胸には肩にかけて大きな刀傷がつけられていた。
しかし、一行が部屋を去ってからまもなく――男の首が不意に、ぐるりと、勢いよく天井を向いた。
「フハハ……強い、強いですねぃ……」

（？）狂おしい心ー前篇ー

ボッシュはバイオ公社の通路を歩いていた。
その額に巻かれた包帯や頬につけられた刀傷が憎くてたまらないというように、怒りに満ち満ちた表情だ。
「よう、ボッシュ」
研究室の前ではボッシュと同年代と思しき若いレンジャーが立っていた。
ひょうきんというよりは皮肉っぽい表情で、気さくというよりは厚かましい態度で、彼はへらへら笑いながらボッシュに近づいた。
「聞いたぜ、ゼノ隊は全滅だってな……オレはこっちの警備に回されて命拾いしたぜ」
ボッシュは少年を一瞥、まるで相手にする気はないというように歩き出した。
「待てよ、腰抜け！」
ぴたり、とボッシュの足が止まる。
「お前、一人だけ逃げてきたんだってな。腰抜け！」
少年の手がそっと肩に下りる。「お気の毒にな、エリート様。今回のは取り返しのつかない失態だ」
腰抜け？　失態？　ボッシュの額に浮かんだ血管がぴくりと動く。両拳が怒りに震える。
彼は思わず大声を出した。
「逃げた……？　俺が？　剣聖に連なるこのボッシュが！？」
「そう、お前は負けたんだ。？リュウ？にな……」
少年の口元が卑しい笑みを作った。
笑われている。見下されている。ここには少年、彼一人しかいないのに、ボッシュは何百という人間に白眼視されているような心地になった。
彼らはありとあらゆる罵詈雑言をボッシュに浴びせた。負け犬敗

者ニセエリート様。それら激しく交錯する大音声（だいおんじょう）で頭がいっぱいになると――ボッシュのなかで何かが壊れた。
「ボ、ボッシュ、何を……っ！？」
少年の首からはおびただしい量の血が噴き出している。
ボッシュの右手にはレイピア。その切っ先からは赤い雫が滴り落ちていた。
「そうだよ……リュウだ……」
彼の瞳はほとんど焦点が合っておらず、言葉はほとんどうわごとのようだった。
「俺、あいつを殺さなきゃ……」

＊　＊　＊　＊

リュウたち一行はL字型の狭い通路を一列になって進んでいた。
先頭はリン、次にリュウ。二人の話題はもっぱら先ほどの男のことで、ニーナは輪に入れずにふてくれされたような顔をしていた。
「トリニティの方でもネガティヴ（やつら）のことはあまり分かっていない……さっきも言ったように、非合法な活動を専門とする政府の暗部だという以外はな」
「同じ政府の人間でもあいつはレンジャーを殺してたし、それに人間の姿をしてなかった……あれはなんだ？」
「恐らくはバイオ公社で肉体の強化改造（ブーステッド）を受けたんだろう。ディクの生体工学を応用した改造手術さ、それで超人的な力を得ることが出来る。人間の面影をなくしちまうぐらいにね」
リュウは得体の知れない歯痒さを感じた。人間であることを放棄してまで、彼らは何が欲しいというのだろう。強さ？　尽きることのない命？
分からなかった。ただ、言えることは、もし強化改造が彼らの意志ではなくて、巨大な権力の下に無理やり実行されたことだとしたら――リュウは政府を、世界を許すことが出来ない。ニーナの時と

同じように。
「うー！　うー！」
通路を出たところで、ニーナが声を上げた。リュウの袖を引っ張って何事か訴えようとしている。
大型機械だろうか、部屋の隅に丸っこくて歪なシルエットがあった。近くの照明が切れているために一体何なのか判然としないが、それは仰々しい足音を立てながら向こうから正体を現した。
ディク。それもリュウがバイオ公社で倒したアーム・ストロングと似たタイプで、先端に三つ指のアームがついた砲塔のような腕に、胸の中央に埋め込まれたコア。顔半分を覆った鉄兜からはそり立つ角が二本生えている。
でっぷりとした巨腹を支える足は短く、がに股気味に開いている滑稽さは相変わらずだが、いましがた出てきた通路の入り口をすっぽり塞いでしまうほどの大きさにはかなりの威圧感がある。
リュウたちは後ずさりながらも武器を手に取ったが、不意に背後からうめき声が聞こえた。暗闇に溶け込むようにして、身の丈二メートルを悠に超えるサイクロプス型のディクが長い腕を垂らして立っていた。
「挟み撃ちか……」
リンは舌打ちした。
壁伝いに張り立つように建立された橋梁型通路はせいぜいが横幅二人分、半機械の怪物が出入り口を塞ぎ、行く手には力と素早さに自信があると見える巨人。
絶体絶命というには充分すぎる状況だ。リンとニーナは怪物を、リュウは巨人を、それぞれ対峙し、あとは戦いの火蓋が切って落とされるのを静かに待っていた。
「ニーナを頼んだぞ、リン！」
先手を打ったのはリュウ。双眸に燃え盛る炎を宿し、真紅のオーラをまとって弾丸のように突進する。初めから全力で勝負をつける気だ。

巨人は両腕を斜め十字に構えてリュウの体当たりを受け、足場の鉄条網に激しい金属音を立てながら突き当たりの壁まで後退していった。

リュウは決着をつけようと巨人の顔めがけて突きを繰り出そうとしたが――急に右腕が動かなくなった。巨人の手に鷲掴みにされたのだ。

まもなくリュウのみぞおちに内臓が弾けんばかりの衝撃が走った。巨人の拳打をもろに浴びた。強烈な突き上げにリュウの足は地面から離れ、巨人は続けざまに次の攻撃に移る。

それは至って動物的で、しかし最も威力のある攻撃だった。リュウの首を左手に掴んで力ごなしに壁に叩きつけ、対象が力を失ったあとは無造作に投げ捨てた。

リュウはしばし前後不覚に陥っていたが、細い鉄棒で出来た橋の欄干を掴んで懸命に立ち上がろうとした。オーラはすでに掻き消えている。かすれた視界のなかで、はるか上方からこちらを見下ろす冷たい眼差しがあった。

そのうち爆発するんじゃないかと思えるほどの痛みが全身を蝕んでいるが、何せこっちは？バケモノ？だ。悲鳴を上げていた内蔵はやがて静まり、意識もはっきりとしてきた。まだ戦える。

リュウはキッと巨人をねめつけて、いざ斬りかかろうと構えを取った。が――おかしい、視界が急にぐらついた。足にも腕にも力が入らず、意識は半ば混乱状態にある。

身体に受けたダメージなら例の再生能力でとっくに回復している。巨人が何かしたのだ。相手の脳みそに毒薬を流し込む魔術でも使って。

立ち尽くしたまま動けなくなったリュウの身体は巨人にとって格好のダミー（的）。腹を、胸を、顔面を、リュウは鉛のように重い拳で徹底的に打ちのめされた。

ボロ切れ同然のようになったリュウの首を掴み、巨人は欄干の外に宙吊りにした。ふっと手を離してしまえば、リュウは深い闇のな

かをどこまでも落ちていく。地底に達した頃には再生能力も役に立ってはくれないだろう。

しかし常人ならとっくに意識を、いや生命尽き果てている状態で、リュウにはまだかすかな意識があった。剣を握る手に力を感じる。

紫音剣。これにはゼノ、彼女の魂が宿っている。

そうだ。この剣を手にした戦いで負けるわけにはいかない。リュウは裂帛を上げながら、がむしゃらに剣を振った。半円状に閃いた剣は巨人の両腕を切断した。

リュウは落下の寸前で欄干を掴み、舞台に返り咲くと再び剣を振るう。巨人の足元から壁にかけて走った刃の亀裂から電撃が生じ、そしてリュウは高らかに振り上げた剣を地面に炸裂させた。

無数に生じた雷（いかづち）の刃が巨人の全身を斬り刻み、一秒と待たず肉片に変えた。

紫音絶命剣。ゼノが有する最高の剣技で、リュウはこれに打ち勝って彼女との戦いを制した。本来なら滝のように降り注ぐはずの巨人の返り血を一滴残らず吹き飛ばすほどの威力を、リュウは身を持って味わい、いまや自分のものにしたのだった。

ありがとう、いや、さよならか。つと脳裏に過ぎったゼノの姿に、リュウはどんな言葉をかけてやれば良いか分からなかった。

一方、ニーナとリンは苦戦を強いられていた。

巨体がまとった鋼の装甲を前に下級魔法程度では歯が立たず、せいぜいが足止めぐらいにしかならない。

拳銃から放たれる小さな弾丸などはもっと役に立たなかった。生身の部分を狙って弾丸を撃ち込もうにも、あの大きな両腕を広げられてはお手上げだ。まさに鉄壁。

しかし、それよりもリンを焦らせていたのは――残りの弾がわずかしか残っていないからだった。レンジャーの防衛線、ネガティブ、これまでの戦いで予備カートリッジのほとんどを使い切ってしまっている。

そんな貴重な一発一発を、あの忌々しい怪物は容赦なく弾いてしまう。リンは舌打ちをしながら、最後のカートリッジを装填した。リュウが戦列に加われば勝機も見えてくるだろうが、これまでずっと彼一人に負担を強いてきた。

まがりなりにも彼女も戦士、プライドがある。この戦いはどうしても自らの手で決着をつけたかった。それはニーナも同じ様子で、初めて会ったときのような怯えやすぐにリュウを頼ろうとする弱さはなくなっていた。ウォンドを両手に敢然と立ち向かい、今の自分が持ちうる全力で相手に挑んでいる。頼もしい限りだ、彼女と一緒なら作戦を遂行できるだろう。

リンはニーナの耳元に何事かささやくと、相手に向かって右側に走り出した。天井付近に張り巡らされている水道管には流れ弾が当たり、先ほどから水が噴き出している。

リンは穴の近くに弾丸を浴びせ、するとパイプは真っ二つに割れた。ひしゃげたパイプの切り口からどうどうと滝のように水が流れていく。床は水浸し、敵はずぶ濡れ。

相手の振り払いをかわし、リンは通路に飛び込むや叫んだ。

「いまだ、ニーナ！」

ニーナはウォンドを旋回させて魔法を発動させる。雷撃魔法・パル。

下級魔法なので威力は微々たるものだが、大量の水を味方につければ話は違う。小さな稲妻が鉄兜の上で光を放つと同時に、敵の身体は激しい痙攣に見舞われた。

まるで足が床に突き刺さったように硬直し、腹の重さに引きずられていた背筋がピンと伸びきっている。やがてスパークが収まると、身体の節々から黒煙があがり、敵はがっくりと頭を垂れて沈黙した。

「やったか……？」

リンはおそるおそる歩み寄ろうとしたが――鉄兜の下の眼に鋭い光が灯った。更にコアが強く輝き、何やらモーターが高速回転するような音が響き始めた。

そして咆哮。敵は自らを奮い立たせるように帛(きぬ)を引き裂くと、リンに躍りかかった。不意を突かれる形になったものの、リンは寸でのところでアームの猛撃をかわした。

ニーナが立て続けにパルを放つも敵の勢いは止まらない。リンは危ういところで敵の攻撃を回避していたが、とうとう壁際に追い詰められてしまった。

着地に失敗して尻餅をついた際に、ポーチから銀色のケースが飛び出してきた。弾丸を収納している箱だ、中にはもう一発も――いや、ある。それも通常とは違う特殊な弾丸が。

これは中に爆薬が仕込んであり、相手に着弾すれば爆発するといういわば超小型ミサイルだ。使い所が難しいのと、暴発の危険を考えて今まで使ってこなかった。

しかしこの状況下でそうは言っていられない。リンはケースの中から爆薬弾丸(ファイア・バレット)を一発握りしめると、敵が腕(かいな)を振り下ろすよりも早く飛び上がった。

相手の左肩に足をつけ、大きく開いた口のなかに弾丸をねじ込む。そのまま飲み込んでしまうことのないよう舌の裏に、だ。

「ニーナ……こいつの口に火をつけてやんな」

リンはさっと飛び降り、勝利を確信したような足取りで悠々と歩く。

顔の周囲に赤い光の粒子が収束し始めていることなど意にも介さず、敵はリンの後頭部に鉄槌を振り下ろさんとしていた。

「爆ぜろ」

ニーナのパダムが炸裂したのに半秒遅れ、小さな破裂音が空を薙いだ。爆発は一瞬、それもごく小規模なものだったが、脳みそを吹き飛ばすには充分な威力だった。

決着。やがて通路の先から、リュウが足を引きずるようによろよろとやってきた。

「大丈夫か？　リュウ」

「こっちは何とか倒したよ。そっちも終わったみたいだな」

「ああ、楽勝だったね」
リンはニーナの頭に手を置いて、にこりと言ってみせた。
所々破けたジャケットに、痣と傷だらけの顔。いかにも満身創痍のリュウだったが、こちらの冗談に苦笑いを浮かべていられる余裕はあるようだった。
「なんだ、あれは……？」
リュウの後方に光の塊が見える。それは黄金色に煌き、尾を引きながら頭上を旋回していく。
続いてリンの後ろでも同じ現象が起きた。大の字に倒れた敵のコアからぽうっと光の塊が浮かび、それらは一つに溶け合うようにぐるぐると渦を巻きながら、やがて消えた。
一行はしばし唖然とし、リンが口を開いたのは随分と後のことだった。
「聞いたことがある。数ある魔法の中には、死者の魂を扱う？亡魂術？というのがあると……」
「今のもそれなのか？」
「分からない。私だって魂を見るのは初めてなんだ」
何か背筋が凍るような思いに駆られた一行は、足早にその場を後にした。

（？）狂おしい心ー後篇ー

中層区へと続く最後の部屋で、リュウたちはまたしても異変に直面していた。自分たちを待ち伏せていただろう上級レンジャーたちが血溜まりに伏している。

血が凝固していないところを見るに、まだ死んで間もないのだろう。先ほどの男のような頭の狂った輩が近くにいるのかもしれない、リュウたちは辺りを見回した。

何かいる。広間の中央で不気味に踊る影。わざわざ危険を冒してまで正体を確かめる必要などないのだが、生憎と中層区へのゲートは影の背後にある。

そしてリュウの不吉な予感は現実のものとなった。倒したはずのあの男、あの男が、右に左に身体を揺らしながら平然とそこに立っていたのだ。

「やぁ、リュウさん……またお会いしましたねぃ」

リュウは我が目を疑う。いくらまぶたをこすって目の前の悪趣味な幻は消えてくれない。男は確かに存在しているのだ。切れかけた天井の照明を背に、この世のあらゆる醜悪の権化といった風情で。

「改めて自己紹介をさせていただきましょう……私の名はタントラ。そして？隣にいる二人？は、」

タントラがゆらりと腕を上げると、どこからともなく光の塊が黄金色の輝きを振りまきながら舞い降りてきた。

それらはタントラの左右で停止すると、徐々に形を成していく。見覚えのある姿だ。アーム・ストロングに似たディク、長い両腕を膝頭までだらりと垂らした巨人。

黄金色の光を全身にまとった彼らの姿はおよそこの世のものではない。まるで立体映写機が見せるホログラムのように身体が透けて見える。

「大きいのはディゴン、丸っこいのはギーギガス……。ふふ、リュ

ウさん、よくぞ私の大切な仲間を倒してくれました」
タントラは両腕を広げて天井を仰ぐ。「さぁ、私と一つになりましょうねぃ……」
彼が？大切な仲間？といった者たちの姿が再び光の塊に戻り、ぐるぐると渦を巻きながらタントラの口のなかへと入り込んでいく。
リュウたちはただ唖然とするほかなかった。これが死者の魂を肉体に取り込んで力を得る亡魂術、すなわちれっきとした魔術の一つだと説明されたとしても、にわかには信じがたい光景だった。
二つの魂を吸収し終えたタントラの身体は神秘的な輝きを帯び始めた。内側から発せられる強い光のおかげで、すり鉢状の口、ネジが突き刺さった頭部がより鮮明に見える。
魂が放つ聖なる輝きに照らされたところで、彼の醜さ不気味さが払われることはなかった。
「ふふ、ふ……ありがとう、リュウさん。彼らを倒してくれて……これでまた一つ、私は強くなることが出来ました……」
タントラは小指から人差し指まで順に折り畳んで手招きする。戦いを、いや彼にとっては？パーティー？を始めようというらしい。
「リュウ、こんな肝心なときに申し訳ないんだが……」
リンが罰の悪そうにかぶりを振った。「弾切れだ。今回は役に立てそうにない」
「大丈夫。おれ一人で充分だ。ニーナを頼んだよ」
言って、リュウは剣を構えて前に出る。タントラを鋭くにらみつける。
そんな彼の闘気を受け流すような、くねくねとして憎らしい動きをタントラはやめない。
「それじゃあ、始めましょうねぃ……！」
消えた。タントラが立っていた場所は暗闇になっている。
「リュウ、後ろだ！」
リンの言葉に反応し、リュウはとっさに身体を反転させる。
剣を構えたところに刃が飛んできた。速い。先刻手合わせした時

とは段違いだ。
タントラは更に攻撃を繰り出す。リュウは反射神経だけでそれらを凌いだ。相手のどの手が、どの足が何をしているかまでは判別できない。
放った拳の一つが腹を捉え、リュウは大きく後ずさった。ぐっと足を踏ん張り、リュウは剣を掲げて突進をかけた。このまま黙ってなどいるものか。
逆袈裟に勢いよく振り上げた剣はことごとくかわされたが、リュウは続いて剣を地面に向かって突き刺す。紫音絶命剣。
「食らえっ！」
上空に逃れた敵を雷の刃が追う。タントラは腹をねじらせ、手を引き、足を回し、見るも鮮やかに身体を躍動させて全弾回避した。
そして身軽く地面に着地。リュウは愕然とした。
「今のはディゴンの全身を斬り刻んだ技ですよねぃ……彼の魂が死に際の記憶を見せてくれるんですよ……これは痛かっただろうなァ……」
タントラはダガー・ナイフを逆さ持ちにした両手を幅いっぱいに広げる。「おお、ディゴン。この恨みを今すぐ晴らしてあげますからねぃ！」
またしてもタントラの姿が空白に消える。リュウは防御の構えを取る暇もなかった。顔面を、みぞおちを殴られ、瞬く間に全身を切りつけられた。
一撃で殺しに来ないのは、これが細切れにされて死んだ仲間への手向けのつもりなのだろう。彼と同じように、タントラはリュウをじわじわと肉片に変えていくつもりだ。
リュウの瞳に真っ赤な炎が灯る。千切れ飛ぶジャケットの繊維、敵の息遣いまでも捉えるようになった目を使い、彼はタントラの攻撃を受け止めた。
すかさずリュウは剣を薙ぐ――が、タントラは上体を大きく仰け反らせてブリッジの態勢を取り、そのまま強烈なサマーソルト・キ

ックをリュウの顎先に浴びせた。
直後の攻撃をリュウはしのいだが、相手の動きを止めるには至らない。わき腹に蹴り、更に顔面に後ろ回し蹴りをもろに浴びてリュウは吹き飛んだ。
強い。リュウは上体を起こしながら、改めてそう感じた。だが勝てない相手ではない。これまでだって、いくら追い詰められてもその都度窮地を覆して勝利を収めてきたのだ。
リュウは立ち上がる、その足元から真紅のオーラを沸き立たせて。真正面に相手を見据える、剣を握る手に力をこめる。そうだ、絶対に勝ってやる――
「ふふ、ふ……？フォルカッション？」
ゆらりと広げた掌から、紫がかった霧がふっと放たれた。それは今にも全力疾走を始めようとしたリュウの身体を通り抜けて、ブーメランのようにひらりと旋回してタントラの下へと戻った。
がくり、とリュウは膝から崩れ落ちる。真紅のオーラは消失し、リュウの意識はひどく混濁している。これは例の巨人、ディゴンと戦ったときにも起こった現象だ。
「その力はあまりにも危険すぎるんでねぇ……？没収？させていただきましたよ、リュウさん」
言葉半ばに、タントラは右腕に力瘤を作ってみせる。「おお、これは凄まじい力だ……ありがたく使わせていただきますよ……」
リュウの力を？吸収？した。タントラの口ぶりはつまりそれを示している。リュウはうまく力が入らない足に鞭を入れ、よろよろと立ち上がった。こうするだけで精いっぱいだ。
「さてさて、パーティーも大詰めですかねぇ……」
タントラは再びリュウに向けて掌を広げた。「行きますよ、リュウさん」
リュウの周囲にいくつもの黒い球が生じる。ブンパだ。リュウは懸命に逃げようとするが、かつての機敏さは見る影もない。
黒い球は次々と肥大化して爆発、どろりとした液体が雨となって

降り注いだ。黒い雨が晴れたあと、リュウは床に平伏しながらもまだ生きていた。
紫音剣を支えに、彼は長い時間をかけていよいよ立ち上がった。ニーナが思わず目を覆ってしまうほど、その姿は胸が痛むほどの悲壮さで満ちている。
「さすがにしぶといですねぇ……ですが、これで終わり」
タントラがゆっくりと両腕を広げていくと、リュウの身体を幾筋もの白い光条が取り巻いた。
それらは操り糸で操作されているかのように、矛先をリュウに向けたままピンと虚空で静止している。
「？ハンドレドギアス？……」
タントラがふっと手を下ろす。まるで処刑の合図のように。
白い光条はリュウの肩、胸、腹、足、手、首、全身くまなく突き刺さり、挙句の果てには爆発を起こした。
リュウは脳天を銃弾で撃ち抜かれたように力なくその場に倒れ込む。この意識が、時間が凍えていく感覚は何だろう。そうだ、？死？だ。
「さて、お次はこちらですか……」
踵を返し、タントラはニーナとリンに足を向けた。
リンはニーナの前に立って彼女をかばう。ここでどんなに抵抗したところで、それは全てが報われることのない悪あがきに終わる。
それを本能的に察してか、ニーナが魔法を放つことはなかった。ただリンの後ろに隠れてびくびくと肩を震わせている。
「まったく、ひどいじゃないですか……人の口に爆弾を突っ込んで頭を吹き飛ばすなんてねぇ……人間のすることじゃあないですよ」
「何が人間だよ、薄汚い化け物どもめ」
「おやおや、威勢が良いですねぇ……あなたたちにも同じ苦しみを受けていただきますよ。パァーン。脳みそが吹き飛ぶ苦しみをねぇ！」
タントラの指がくいっと動くのに合わせて、白い光条がリンたち

を取り囲む。ハンドレドアギアス。
ニーナは暗がりに倒れるリュウを見て泣き叫び、今にも駆け出そうとしていた。リンはそれを腕で制し、諭すように語りかける。
「大丈夫だ。リュウは生きてる。信じろ、ニーナ」
再び、彼女は自分に言い聞かせるように呟いた。「信じろ」
終わりが、命の終わりが近づいてきている。リュウに、そして彼が大事に想う二人に。
深い闇へと溶け込んでいく意識のなかで、リュウは必死の叫びを続けていた。ここで息絶えるわけにはいかない、ニーナを空に連れて行くのだ。そう約束した。
磔にされた両翼、朽ちた半身、白骨と化したかつての威容。リュウはあの場所でドラゴンを見上げていた。この心が、身体がどうなっても構わない。頼む。

?力を貸してくれ、アジーン?

身を焼き尽くすような炎がほとばしり、リュウの肉体は異様なる変化を遂げる。
逆立った銀髪、血溜まりのような双眸、鋭利な爪、炎のゆらめきが具現化したような緋色の体毛。
竜人。彼はいま一度降臨する。何かを破壊するために。
「これが、噂の、ですか……」
竜人の瞳がタントラを捉える。鮮紅色の粒子が彼の背中で燃え爆ぜた。
「え……?」
突風を感じたと思いきや、竜人の姿が眼前にある。
その右手の爪からは赤い雫が滴り落ち、そしてタントラは気付いた。自分の右腕がないことに。
「い……痛いじゃないですか……え、やめ……」
勢いよく金切り声をあげようとした矢先、タントラは突然に黙り

込んだ。唇が？抉り取られて？しまっている。
竜人は今しがた抉り取った獲物を右手で潰し、今度はもう片方の手を振るった。次々に。間断なく。血しぶきが、肉片が、不気味な液体音を立てて虚空に舞った。
今やタントラに意識はない。腕をなくし、足をなくし、おびただしい量の血をうしなっていく過程で、彼はとっくに事切れていた。
竜人はタントラの頭を片手でわし掴み、その達磨と化した胴体を宙に吊り上げた。
ぶちっ。それが、彼の脳みそが弾け飛ぶ音だった。あとには得体の知れない肉の塊と、息が詰まりそうな沈黙だけが場に残された。
竜人はちらと二人を見やる。恐れ慄き、今にも吐き出しそうなニーナの表情――それがまぶたに焼きついたところで、彼の意識はぷっつりと切れた。

＊　＊　＊　＊

自動ドアが小気味よく開かれる。研究室に入ってきたのはボッシュ。
その胸元にはつい今しがた斬り裂いて来た少年の返り血がかすかに点々としているが、研究者がそれに気付く様子はない。
ぶくぶく、ぶくぶくと、彼の傍らにある培養装置が音を立てる。緑光色の液に漬かっているのは、人間ともディクとも違う、禍々しい黒さを帯びた何者かの？腕？だった。
「結論から言って無理ですね。D検体（オールド・ディープ）とのリンクは……」
研究者は培養装置を目で指しながら、あまり気乗りしないといった風に言った。
その頬はこぶが出来たように腫れている。先刻、あのリュウという少年に殴られた傷はまだ癒えていない。
「何故そう言いきれるんだ？」
「成功の保障が出来ないんですよ。記録にあるだけで三例ですが…

…うち二例は、リンクの初期の段階で暴走……」
くいっと、男は眼鏡のテンプルを持ち上げた。「最もD値の高い適格者だった最初のリンク例でも……制御しきれず、強制終了した、と聞いています……」
ボッシュはおもむろに培養装置を見やった。リュウに一度は完膚なきまでに敗北を喫し、二度目は戦うことも能わず逃げ出した。
だが、それはリュウがドラゴンの力を手に入れたからで、リュウ自身の強さではない。
ボッシュは不敵な笑みを浮かべる。
「そうだよ、リュウ……お前が？バケモノ？なら」
培養液に浸っていた腕の指先が、ぶくぶくと湧き上がる泡に押されてピクりと動いた。まるで彼を手招きするように。
「俺もバケモノになってやるまでだ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7732v/

ブレス・オブ・ファイア　ドラゴンクォーター

2011年10月2日03時12分発行